

# 西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告

2006（平成18）年3月

三重県埋蔵文化財センター



調査区全景（3次調査）



調査区全景（4次調査）



## 序

朝明川の左岸、朝日丘陵上に所在する西ヶ広遺跡は、かつて昭和44年から東名阪自動車道の建設に伴い発掘調査が行われており、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期及び奈良時代から鎌倉時代にかけての遺跡で、とりわけ奈良時代には5間×3間の身舎に3面の底を持つ大型の建物や倉庫を想定する建物が規則的に配置される等、46棟にも及ぶ掘立柱建物群の検出や円面硯の出土などから、何らかの公的建物群を想起させる遺跡として注目されてきました。

三重県初の高速道路である東名阪自動車道の建設に伴う発掘調査から約30年を経て、再び第二名神高速道路の建設に伴って実施した発掘調査は、この間のめざましい高速道路網の進化とともに埋蔵文化財保護や調査・研究でも飛躍的な進歩を遂げています。事業の実施に先立つ埋蔵文化財の有無の確認、発掘調査範囲や体制の充実、発掘調査成果の公開等先人の築いた文化財保護の道を少しでも充実すべく努力しているところです。この第二名神高速道路関係の現地調査が終了して以降、遺物整理・報告書作成の期間にも、四日市市教育委員会が実施する久留信遺跡では朝明郡衙やその正倉とされる遺構が発見されるなど、朝明川沿いの地域における古代史も次々と解明されています。

今後とも私たちは、貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として後世に伝え、文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

今回の発掘調査を契機に、本書が三重県や四日市市における歴史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓発にお役に立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりご協力を賜りました地元の関係者、及び中日本高速道路株式会社、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道路推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成18年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水 康夫





## 例 言

- 1 本書は、三重県四日市市伊坂町に所在する西ヶ広（にしがひろ）遺跡第3次調査・第4次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線愛知県境～四日市JCT建設事業にともなうもので、調査にかかる費用は日本道路公団中部支社（現：中日本高速道路株式会社）が負担した。
- 3 発掘調査は、次の体制により実施した。

年度 (平成)	調査内容	調査 面積	調整担当	発掘調査担当	調査作業 受託機関
10 年度	範囲確認調査	328㎡	調査第二課主幹兼課長 吉水康夫 主査兼第四係長 杉谷政樹	主事 田中久生	リメックス 株式会社
11 年度	本調査 範囲確認調査	2970㎡ 44㎡	調査第二課主幹兼課長 吉水康夫 主査兼第四係長 杉谷政樹	主事 片岡 博	㈱発掘建設 リンク
12 年度	本調査 範囲確認調査	2740㎡ 70㎡	調査第二課主幹兼課長 吉水康夫 主査 本堂弘幸	主事 田中久生 臨時技術補助員 田中美穂	㈱四門

- 4 本書の本報告書の作成業務は、以下の体制で行った。

三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱグループ グループリーダー 河北秀美  
 主査 竹田憲治  
 技師 角正淳子  
 臨時技術補助員 酒井巳紀子  
 業務補助員 有満俊江・新貝里美・櫻野幸子・  
 木村真弓・和田佐映子・松崎由里

- 5 本書の編集は竹田が行った。各部の執筆者は目次および本文末尾に記した。
- 6 本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査担当者及び調査作業受託機関が行い、遺物写真の撮影は竹田が行った。
- 7 本報告書作成にあたっては、以下の方々から御助言・指導を得ることができた。  
城ヶ谷和広、中野晴久、藤澤良祐、堀木真美子、渡邊博人
- 8 図版における方位は、国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。  
なお磁北方位は、西偏6°50′、真北方位は、西偏0°18′である。
- 9 本書で使用した土色・胎土の色調は、小山・竹原編『新版標準色帳』（9版1989年）による。
- 10 本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。

SA：櫓・柱列    SB：掘立柱建物    SD：溝    SE：井戸  
 SH：竪穴住居    SK：土坑

- 11 当発掘調査による図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 調査にあたっては、三重県企業庁・同北勢水道事務所・四日市市教育委員会・四日市市八郷地区市民センター・八郷地区連合自治会・千代田町自治会・伊坂町自治会ならびに地元各位の協力を得た。

# 本文目次

I	前言	(萩原)	1
II	位置と環境	(萩原)	5
	1 地理的環境		5
	2 歴史的環境		5
III	弥生時代後期の遺構と遺物	(竹田)	9
	1 遺構		9
	2 遺物		9
IV	古墳時代後期から古代の遺構と遺物	(竹田)	17
	1 遺構		17
	2 遺物		56
V	中世・近世の遺構と遺物	(竹田)	66
	1 遺構		66
	2 遺物		73
VI	発掘調査のまとめと考察	(竹田・角正)	88
	1 遺構の変遷		88
	2 弥生時代後期の集落と竪穴住居		90
	3 西ヶ広遺跡における古代集落の様相		92
	4 中世後期の居館跡について		99
VII	苑上遺跡範囲確認調査出土・地表面採集遺物	(竹田)	103

# 挿図目次

第1図	遺跡地形図 (1:5,000)	2	第14図	SH3010・3011・3018 (1:100、1:50)	21
第2図	調査区位置図 (1:2,000)	2	第15図	SH3012・3013・3015・3019 (1:100、1:50)	22
第3図	調査区地区割図 (1:1,000)	3	第16図	SH3016・3020 (1:100、1:50)	23
第4図	周辺の遺跡 (1:50,000)	6	第17図	SH3021・3027 (1:100)	24
第5図	遺構実測図① (1:400)	10	第18図	SH3022・3023・3035 (1:100、1:20)	26
第6図	遺構実測図② (1:400)	11	第19図	SH3024・3025a・3025b・3038 (1:100、1:20)	27
第7図	遺構実測図③ (1:400)	12	第20図	SH3026・3033 (1:100)	28
第8図	北西壁土層断面図 (1:100)	13	第21図	SH3026竈・3033竈 (1:20)	29
第9図	SH3001・3002 (1:100)	15	第22図	SH3028・3032・3039 (1:100)	30
第10図	SH3004・3007 (1:100)	16	第23図	SH3029・3030・3031 (1:100)	31
第11図	SH3017・SB3172 (1:100)	17	第24図	SH3030竈 (1:20)	32
第12図	出土遺物① (1~10・18~46=1:4、10~17・47~51=1:2)	18			
第13図	SH3003・3005・3006・3008・3009・3046 (1:100、1:50)	20			

第25図	SH3031竈 (1:20)	33	第49図	出土遺物⑥ (1:4)	63
第26図	SH3030竈・SH3031竈 (1:20)	34	第50図	出土遺物⑦ (1:4)	64
第27図	SH3034・3036・3044 (1:100、1:20)	35	第51図	出土遺物⑧ (1:4)	65
第28図	SH3037・3045 (1:100、1:20)	36	第52図	SB3126・3143・3149 (1:100)	67
第29図	SH3040・3042 (1:100、1:40)	37	第53図	SB3138・3174 (1:100)	68
第30図	SH3041 (1:100、1:40)	38	第54図	SB3175・SE3201 (1:100、1:40)	69
第31図	SB3101・3102・3103・3104・3140 (1:100)	40	第55図	SE3247・3290 (1:40)	70
第32図	SB3105・3106・3108 (1:100)	41	第56図	溝土層断面図① (1:40)	71
第33図	SB3111・3112・3113・3114 (1:100)	42	第57図	溝土層断面図② (1:40)	72
第34図	SB3115・3144・3116 (1:100)	44	第58図	出土遺物⑨ (1:4)	74
第35図	SB3121・3125・3122 (1:100、1:20)	45	第59図	出土遺物⑩ (1:4)	76
第36図	SB3124・3127・3137 (1:100)	46	第60図	出土遺物⑪ (1:4)	77
第37図	SB3130・3132・3161 (1:100)	47	第61図	弥生時代後期の遺構 (1:2,000)	88
第38図	SB3139・3141・3145 (1:100)	48	第62図	古代・中世の遺構 (1:2,000)	89
第39図	SB3142・3147・3146 (1:100)	49	第63図	弥生時代後期各遺跡の竅穴住居 貯蔵穴・排水溝	91
第40図	SB3148・3150・3151・3152・3153 (1:100)	51	第64図	竅穴住居の面積	92
第41図	SB3154・3155・3156・3157・3158 (1:100)	52	第65図	竅穴住居平面形態と床面積	92
第42図	SB3159・3160・3162・3163 (1:100)	53	第66図	掘立柱建物の柱間寸法	93
第43図	SB3164・3173・3171・柱列 (1:100)	54	第67図	倉庫建物の規模分布	93
第44図	柱列・SE3264・3277 (1:100、1:40)	55	第68図	倉庫建物の平面構成比率	93
第45図	出土遺物② (1:4)	57	第69図	掘立柱建物の床面積	94
第46図	出土遺物③ (1:4)	58	第70図	遺構の変遷① (1:2,500)	95
第47図	出土遺物④ (1:4)	60	第71図	遺構の変遷② (1:2,500)	96
第48図	出土遺物⑤ (1:4)	61	第72図	西ヶ広遺跡周辺の古代	97
			第73図	久留倍遺跡遺構配置図	98
			第74図	中世居館・道路と西ノ広城跡	100
			第75図	西ヶ広遺跡・伊坂城跡 瀬戸美濃 製品データ	101
			第76図	中世後期の遺跡群 (1:10,000)	101
			第77図	調査坑概念図・出土遺物 (1:4)	103
			第78図	試掘坑配置図 (1:2,000)	104

## 表 目 次

第1表	出土遺物観察表①	78
第2表	出土遺物観察表②	79
第3表	出土遺物観察表③	80
第4表	出土遺物観察表④	81

第5表	出土遺物観察表⑤	82
第6表	出土遺物観察表⑥	83
第7表	出土遺物観察表⑦	84
第8表	遺構一覧表①	85
第9表	遺構一覧表②	86
第10表	遺構一覧表③	87
第11表	掘立柱建物の規模一覧	94

## 図 版 目 次

### 巻頭カラー 調査区全景（3次調査）/調査区全景（4次調査）

図版1	調査前状況 北から/ 東端部全景 北西から	図版15	SB3101検出状況 北東から/ SB3101 南西から
図版2	東端部全景 南から/東端部全景 東から	図版16	SB3102 北西から/ SB3103・3140 西から
図版3	西端部全景 南から/ SH3001・SB3102検出状況 北東から	図版17	SB3104 北西から/SB3113 南から
図版4	SH3002検出状況 南東から/ SH3004・3103・3105 北西から	図版18	SB3113 西から/SB3106 北から
図版5	SH3007 北東から/SH3003 西から	図版19	SB3114 東から/SB3114 南から
図版6	SH3005 北西から/SH3006 北から	図版20	SB3115・3144 西から/ SB3116 東から
図版7	SH3009 北西から/SH3010 東から	図版21	SB3122 北から/ SB3122・SH3020・3021 東から
図版8	SH3010竈遺物出土状況/ SH3012東から	図版22	SB3132 北東から/SE3264 北から
図版9	SH3016・3017 北東から/ SH3020 西から	図版23	SE3277 西から/中世居館跡 北から
図版10	SH3020竈 南から/ SH3020竈 南から	図版24	SE3247 南から/ SE3247曲物出土状況 北から
図版11	SH3024・3025・3028 北西から/ SH3027 南から	図版25	工事着工前全景/工事完成後全景
図版12	SH3026・3033 北から/ SH3032・3028 南西から	図版26	出土遺物①
図版13	SH3030・3031 南東から/ SH3030竈 西から	図版27	出土遺物②
図版14	SH3031竈遺物出土状況 南から/ SH3031竈 南から	図版28	出土遺物③
		図版29	出土遺物④
		図版30	出土遺物⑤
		図版31	出土遺物⑥
		図版32	出土遺物⑦（瓦上遺跡）

## 附 図

附図1 遺構実測図（1：200）

# I 前 言

## 調査の経緯と経過

### (1) 近畿自動車道名古屋神戸線の概要

東名・名神高速道路は、我が国の基幹交通を担う大動脈として産業・文化・経済活動に大きな貢献を果たしてきた。しかし、供用開始後30年余を経過した現在、ほぼ全線にわたり混雑が著しく、本来の高速性・安定性が低下しつつある。このままでは、量的増大に加え、多様化する将来の交通需要に対応することが困難であると予想されている。

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は、第二東名高速道路と共に、これらの問題に対応し、先発路線である東名・名神高速道路と一体となって、四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

三重県内では、愛知県境から四日市市伊坂町の近畿自動車名古屋線（東名阪自動車道）との交差箇所までが該当する。その経路は、愛知県境から伊勢湾岸を南下し、川越町で方向を大きく西に転じて、朝明川北岸の沖積低地から朝日丘陵南縁の朝日町・四日市市を通る。なお、この経路は第二東名高速道路の一部を含めて伊勢湾岸道路とも呼ばれる。

### (2) 調査に至る経緯

調査に至る経緯については、『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）に詳細に述べられている。そのため、ここでは西ヶ広遺跡に関する事柄について記しておきたい。

西ヶ広遺跡は、昭和36年度に実施された三重県埋蔵文化財包蔵地調査の際にはじめて確認された広範囲な遺跡として知られた。昭和44年に東名阪自動車道建設にあたって発掘調査（A・B・C地区）が行われている。調査面積は約15,000㎡で、確認された遺構は、縄文時代後期の土坑1基、弥生時代後期の竪穴住居12棟及び土坑4基、古墳時代後期の竪穴住居10棟、土坑15基等、奈良時代の掘立柱建物46棟、土

坑9基等多くの遺構がある。西ヶ広遺跡は、弥生時代後期及び古墳時代後期において大規模な集落とみられるだけでなく、奈良時代においては多数の掘立柱建物と一定の配置にまとまっており官衙に関連する重要な遺跡と言えそうである。また、昭和46年においても西ヶ広遺跡の土取り工事に伴う発掘調査（D地区）で弥生時代後期の竪穴住居12棟等、古墳時代後期の竪穴住居4棟及び掘立柱建物2棟、奈良時代掘立柱建物6棟、鎌倉時代墳墓1基などが確認されている。第1次調査と同様の状況が窺えそうであり、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代それぞれの各時代においても重要な役割を担っていた遺跡である。

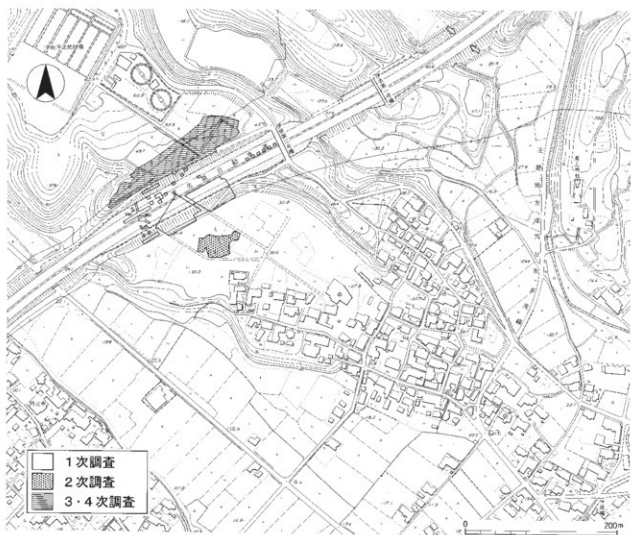
西ヶ広遺跡は、この様な過去の発掘調査の成果を基に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市市JCT建設予定地にかかり発掘調査を行うことになった。平成10年度から範囲確認調査を行い、平成11・12年度においても範囲確認調査をしつつ本調査を行なった。範囲確認調査の面積は442㎡で、発掘調査の面積は5,710㎡である。

### (3) 調査経過

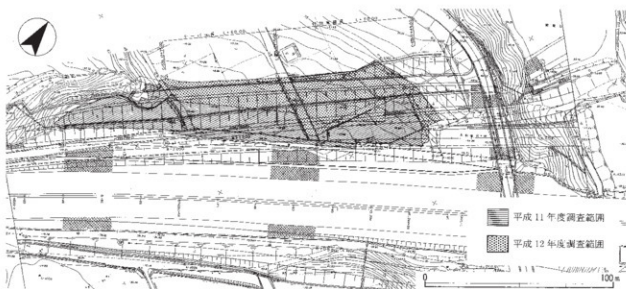
調査日誌抄

[平成11年度本調査]

- 10月8日 調査前現況写真撮影
- 10月25日 重機掘削開始
- 10月28日 地区設定
- 11月8日 遺構検出開始
- 11月15～18日 遺構掘削
- 11月29・30日 全景写真及び個別写真撮影
- 12月6・7日 遺構検出。遺構掘削開始。
- 12月8日 中世の井戸掘削。のち井戸底から平瓦。
- 12月16日 個別遺構写真撮影開始
- 1月16日 現地説明会
- 1月19日 現道下部分表土掘削
- 2月3日 谷部分の重機掘削。L状の溝を確認。



第1図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第2図 調査区位置図 (1 : 2,000)

- 2月10日 機材一式撤去
- 3月9日 現地引渡し
- [平成12年度本調査]
- 8月31日 現地協議
- 9月1日 基準点及び水準点測量
- 9月18～20日 範囲確認調査
- 9月21日 表土掘削開始
- 10月3日 地区設定開始
- 10月10日 包含層掘削・遺構検出開始
- 12月16日 遺構実測開始
- 1月14日 現地説明会開催 約130名
- 1月15日 実測及び堅穴住居の断ち割り確認調査
- 1月31日 現地作業終了
- 2月1日 現地引渡し

#### (4) 調査方法

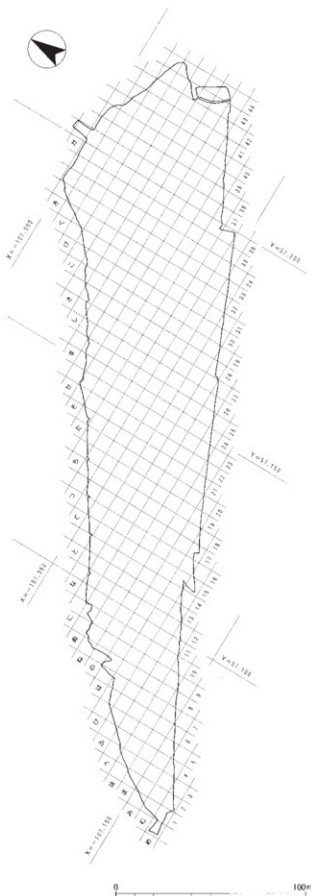
##### ①地区設定について

発掘調査は、平成11・12年度の2年にわたるものであり、それぞれが隣接した調査区である。調査区内の小地区は、その年度毎で重複しない様に4mメッシュを設定した。小地区の基準となる番号は、南北方向にいうえお順、東西方向に数字順である。地区杭は、座標北に則って設定した。また、遺物の取り上げ等に当たっての地区名は北西隅にある地区杭の小地区名で行った。

##### ②遺構の番号について

発掘調査時における遺構番号は、通し番号である。遺構の性格や規模等を区分していない。第3次調査では、調査区をおおよそ3つに大区区分しローマ数字を用いてそれぞれをⅠ・Ⅱ・Ⅲ区とした。遺構番号はアラビア数字を用いⅠ区で1番から、Ⅱ区で201番から、Ⅲ区で301番から付した。第4次調査では調査区を2分したが遺構番号は、400番から付した。なおピット番号は、第3・4次調査に関わらず各小地区毎に1番から付した。(ex. た29区Pit 1、た29区Pit 2、た29区Pit 3)

報告書作成にあたっては、遺構番号の整理作業を行い、第3・4次といった年度毎の単位による調査区の区分を改め、すべて3001番からの番号を付与した。新旧の遺構対称表は、調査成果に記載した。





### ③図化作業について

現地の発掘調査では、調査区全体の平面図を手書きによって行った。縮尺は1/20である。調査区断面図も1/20である。遺構の各個別情報を詳細に記録するため4mメッシュの小地区毎に1/40の遺構カードを作成した。調査区全体の略測図は、この遺構カードを基に1/100で作成した。また、個別遺構詳細図は1/10ないし1/20で、遺物出土状況図は1/10である。なお、1/20、1/50及び1/100の平面図及びコンタ図を作成した。

### ④写真撮影について

現地の発掘調査では、各遺構の検出時及び完掘状況を4×5 inch判、ブローニー判、35mmの各フィルムサイズによって撮影した。フィルムの種類は、モノクロネガ及びカラーリバーサルを使用した。

報告書作成にあたって遺物写真撮影は、4×5 inch判、ブローニー判を使用し、フィルムはモノクロネガを使用した。 (萩原義彦)

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

西ヶ広遺跡<sup>①</sup>（1）は、行政的には三重県の北部にある四日市市に属し、桑名市との境である朝日丘陵から派生する小丘陵上に位置する。伊勢平野北部のいわゆる北勢地域の地勢は、西側に古生層・花崗岩類から成る鈴鹿山脈が南北に連なり、断層崖に起因する急峻な東斜面の麓には標高約30～100mの第三紀・第四紀層で構成される低平な台地・丘陵が海岸近くまで広がっている。鈴鹿山脈東麓から流れ出る員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・内部川などの各河川は、台地・丘陵の間を開折して略東流し、下流域で急速に沖積低地を広げて伊勢湾に注ぐ。各河川の沖積低地は南北に連続し、海岸沿いに細長い平

野を形成している。

鈴鹿山脈釈迦ヶ岳を源とする朝明川は、中流域で北岸の朝日丘陵と南岸の垂坂丘陵の間に約1km前後の谷底平野を形成し、下流域では一部天井化しつつも員弁川・海蔵川などにつながる沖積低地を形成している。この沖積低地には河川堆積物である花崗岩粗砂（所謂朝明砂）などによる自然堤防状の微高地が点在する。また、朝日・垂坂丘陵の東縁沿いに桑名断層が南北に通過しており、断層西側の丘陵内部では褶曲による地層の不整合がみられる。当遺跡は、桑名断層とその西の桑名背斜の間に位置する。

### 2 歴史的環境

北勢地域北部を眺めつつ、朝明川流域を中心とした歴史的環境を概観しておきたい（第4図）。

**旧石器・縄文時代** 鈴鹿山脈東麓沿いは、県内では旧石器・縄文時代の遺跡が比較的多い地域である。しかし、朝明川流域となると中流域の鶴沢遺跡<sup>②</sup>・野呂田遺跡<sup>③</sup>で石器類が表採され、当遺跡で縄文時代後期の土坑が確認されている程度で、その様相は今一つ明らかではない。

**弥生時代** 沖積低地を望む丘陵上に数多くの遺跡が出現する。前期の遺跡として、海蔵川・三滝川に挟まれた生桑丘陵東端の大谷遺跡<sup>④</sup>・永井遺跡<sup>⑤</sup>（3）があげられる。これらの遺跡からは、数条の環壕や竪穴住居・方形周溝墓が確認されており、拠点集落と考えられている。朝明川流域では、前期の遺跡は判明していないが、中期になると、遺跡の分布は河川下流から中流域まで広がる。朝明川流域では丘陵上で丸岡遺跡<sup>⑥</sup>・菟上遺跡<sup>⑦</sup>（4）・山村遺跡<sup>⑧</sup>（5）、沖積低地の微高地に下之宮遺跡<sup>⑨</sup>（6）などにその足跡が認められる。菟上遺跡では、棟持柱式掘立柱建物や80棟以上の竪穴住居などが、山村遺跡では19基の方形周溝墓が確認されている。両者は近接しており、関係の深い遺跡と言える。

後期になると丘陵上の遺跡がかなり増え、垂坂丘

陵の山奥遺跡<sup>⑩</sup>（7）では100棟を超える竪穴住居が確認されている。金塚遺跡<sup>⑪</sup>（8）でも、標高約75mの丘陵頂部の狭い平坦地に後期の竪穴住居・環壕や銅鐸片が確認された。一方、間ノ田遺跡<sup>⑫</sup>（9）のように沖積低地の微高地に立地する遺跡も認められる。

朝明川流域では、弥生時代の代表的祭器である銅鐸が発見されている。当遺跡北方の丘陵、重地山の伊坂遺跡<sup>⑬</sup>（10）からは、扁平鈕式製安撫文銅鐸（伊坂銅鐸）が出土している。西ヶ広遺跡との関連も指摘されているが、最近の調査により、谷を挟んだ向いにある菟上遺跡との関連も考えられる。また、朝明川南岸の大矢知町青木山でも宝鐸の出土が伝えられるが、銅鐸であるのか詳細は不明である<sup>⑭</sup>。

**古墳時代** 北勢地域北部は、鈴鹿流域以南に比べて前期古墳の分布が少ない地域といえる。その数少ない前期古墳として海蔵川下流に突出する低丘陵端に築造された志氏神社古墳<sup>⑮</sup>（11）があげられる。前方後円墳もしくは後方墳で内行花文鏡・車輪石などが出土している。員弁川北岸の丘陵上には前方後円墳の高塚古墳<sup>⑯</sup>（12）が存在する。

朝明川流域では、中期の方墳を主体とする広古墳群<sup>⑰</sup>（13）がある。B1号墳は、一辺31mで墳丘の南辺の偏った位置に造り出しが付く特異なものである。



第4図 周辺の遺跡 (1 : 50,000)

その東に位置する浄々坊1号墳<sup>(14)</sup>は径36mの円墳とされているが、方墳の可能性もあり、広古墳群の周辺には比較的大形の方墳が集中している。その他、朝明川の谷底平野をのぞむ丘陵・台地縁辺部を中心に単独もしくは数基から十数基程度の小規模な古墳群が存在する。これらは殆ど後期の築造と考えられる。内部主体が判明しているものは少ないが、南岸の八幡古墳<sup>(15)</sup>は複室形態の構造の横穴式石室として知られている。近年調査された公事出古墳群<sup>(16)</sup>は、後期の小規模な古墳群であるが、墳丘が削平され埋没していた。朝明川北岸の城ノ広遺跡<sup>(16)</sup>でも、削平された前方後円墳が新たに発見された。現在確認されていないものにはこのような古墳も多いと思われる。

朝明川南岸の死人谷古墳群<sup>(17)</sup>は、金銅製環頭大刀柄頭が出土した横穴墓として知られている。北岸では、金塚横穴墓群<sup>(8)</sup>のほか、広永横穴墓群<sup>(18)</sup>や菟上遺跡<sup>(4)</sup>の横穴墓1基など、近年になって横穴墓の新たな発見が相次いだ。

古墳時代の集落跡としては、当遺跡や山奥遺跡に堅穴住居がみられ、弥生時代より継続して人々が生活を営んでいたことが窺い知れる。

古代律令制下、北伊勢には員弁・桑名・朝明・三重郡の四郡が置かれ、朝明川流域のほぼ全域は朝明郡に属していたとみられる。各所に規模の大きな遺跡が存在するが、朝明川南岸の久留信遺跡<sup>(19)</sup>では都府政庁及び正倉が確認されている<sup>9</sup>。当遺跡では奈良時代の掘立柱建物<sup>10</sup>が76棟も確認され、大型建物の計画的配置や円面視の出土などから、朝明郡衙にかかわるような官衙関連遺跡の可能性が指摘されている<sup>9</sup>。谷を挟んだ東にある菟上遺跡<sup>(4)</sup>でも、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物が多数確認され、計画的な配置や巨大な柱穴は注目される<sup>9</sup>。公事出遺跡<sup>11</sup>では、当遺跡のものよりも規模の大きい此付掘立柱建物が確認されている。

朝明郡の条里は、海岸部を除く沖積低地から中流域までの間に敷かれ、方位はN45°Eで統一されている。長方形地割りが多くみられ、一部に坪名が残る千鳥式の坪並の可能性が指摘されている<sup>9</sup>。

一方、古代伊勢国は東海道に所属し、その北部を壬申の乱の道、古代官道の東海道が通過していた。

その経路は明確ではないが、西ヶ谷遺跡と菟上遺跡間の南北方向の谷は、河曲駅家（鈴鹿市河曲付近に比定）から朝明郡家を経て榎撫駅家（桑名市多度町戸津・音取付近に比定）に向かう東海道の想定経路の一つであるが、調査では確定な道は確認されていない<sup>9</sup>。東海道想定ルートの脇にある当遺跡・菟上遺跡は河曲・榎撫両駅家のほぼ中間に位置するため、朝明駅家の可能性も指摘されている。

北伊勢の白鳳寺院は一部に一寺置かれたが、朝明郡では郡域の北東に偏した朝日丘陵北東端に親生庵寺<sup>(20)</sup>が所在する。塔心礎舍利孔から唐三彩鉢を蓋とする舍利容器の外容器が出土している。なお、隣接する桑名郡には、員弁川北岸に額田廃寺<sup>(21)</sup>が置かれた。

生産遺跡としては、垂坂丘陵に西ヶ谷古窯址群<sup>(22)</sup>と西ヶ谷遺跡<sup>(23)</sup>がある。7世紀代の須恵器窯跡とその工人の集落で、西ヶ谷遺跡からは土師器焼成坑も確認されており、須恵器・土師器生産の観点でも注目される。また、遺跡内や周辺の字名に寺院に関する地名があり、寺院の存在が伝えられていたが、平成12年度の調査では、8世紀中葉の瓦が検出され、寺院または瓦窯の存在が想定されるようになった。

中世 朝明郡内には、伊勢神宮の御厨・御園が数多くみられる。朝明川流域全般にわたって中世遺物が散布する遺跡は多いが、調査例は少なく、その様相は明らかではない。辻子遺跡<sup>(24)</sup>は、平安時代後期から鎌倉時代の集落遺跡で、条里の方向に合致する建物や溝が確認されている<sup>9</sup>。

中世後期、伊勢北部は十ヶ所人数・北方一揆と呼ばれる国人・地侍が群在した。このため中世城館も数多く、概ね大字に1~2ヶ所程度存在する。朝明川沿いには、伊勢湾岸と琵琶湖を繋ぎ、近江商人等が往来した交通路が通っており、中下流域の中世城館はこの街道が通過する谷底平野に面する台地・丘陵端に立地する。代表的なものに保々西城跡・市場城跡・萱生城跡<sup>(25)</sup>・伊坂城跡<sup>(26)</sup>・広永城跡<sup>(18)</sup>がある<sup>9</sup>。伊坂城跡では、発掘調査によって計画的に配置された屋敷地と城道が確認されている<sup>9</sup>。

(萩原義彦)

[註] (主な参考文献)

- ① 『西・広道路』『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(三重県教育委員会 1970年)  
『西・広道路発掘調査報告 -D地区-』(四日市市教育委員会 1972年)  
服部貞蔵編『四日市市史 第二巻資料編 考古Ⅰ』(四日市市 1988年)
- ② 服部貞蔵編『四日市市史 第二巻資料編 考古Ⅰ』(四日市市 1988年)
- ③ 前掲註2
- ④ 『大谷道跡発掘調査報告-A地区・B地区-』(四日市市教育委員会 1967年)  
『大谷道跡発掘調査報告-C地区の遺構-』(四日市市教育委員会 1976年)  
服部貞蔵編『四日市市史 第二巻資料編 考古Ⅰ』(四日市市 1988年)
- ⑤ 『永井道跡発掘調査報告』(四日市市教育委員会 1973年)、服部貞蔵編『四日市市史 第二巻資料編 考古Ⅰ』(四日市市 1988年)
- ⑥ 前掲註2
- ⑦ 『菟上道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2005年)
- ⑧ 『金塚道跡・金塚横穴墓群・山村道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2002年)
- ⑨ 徳積裕昌「北伊勢の弥生集落～四日市市下之宮道跡とその周辺」(『研究紀要』第13号 三重県埋蔵文化財センター 2003年)
- ⑩ 『山奥道跡Ⅰ』(四日市市教育委員会 2003年)、『山奥道跡Ⅱ』(四日市市教育委員会 2004年)
- ⑪ 前掲註8
- ⑫ 『間ノ田道跡・辻子道跡(第4次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2005年)
- ⑬ 『伊坂道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2004年)
- ⑭ 鈴木敏雄『三重県三重郡八郷村考古誌考』(1938年)
- ⑮ 前掲註2
- ⑯ 『桑名市史』本編(桑名市教育委員会 1987年)
- ⑰ 『四日市の後期古墳』(四日市市教育委員会 1973年)及び前掲註2
- ⑱ 前掲註17
- ⑲ 『四日市の後期古墳』(四日市市教育委員会 1973年)
- ⑳ 『公事出古墳群・公事出道跡』(四日市市教育委員会 1998年)
- ㉑ 『三重県埋蔵文化財年報 -平成12年度-』(三重県埋蔵文化財センター 2001年)
- ㉒ 前掲註2
- ㉓ 前掲註8
- ㉔ 『広水城跡・広水古墳群・広水横穴墓群』『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』(三重県埋蔵文化財センター 1999年)
- ㉕ 前掲註7
- ㉖ 服部芳人「古代官衙久留信道跡の発見と意義」(『日本歴史』685号 吉川弘文館 2005年)
- ㉗ 前掲註1
- ㉘ 前掲註7
- ㉙ 前掲註20
- ㉚ 弥永貞三・谷岡武雄『伊勢湾岸地域の古代桑里制』(東京

堂出版 1979年)

- ㉛ 『重地道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2004年)
- ㉜ 『龍生庵寺跡発掘調査報告』(朝日町教育委員会 1988年)ほか
- ㉝ 小玉道明「額田庵寺発掘調査概要」『桑名市博物館紀要第1号』(桑名市博物館 1987年)
- ㉞ 『西・谷古宮跡群』(四日市市道跡調査会 1992年)
- ㉟ 『西・谷道跡』(四日市市道跡調査会 1996年)
- ㊱ 『辻子道跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2004年)
- ㊲ 八賀晋編『四日市市史 第三巻資料編 考古Ⅱ』(四日市市 1993年)及び伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現況」(『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997年)
- ㊳ 『伊坂城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2003年)

### Ⅲ 弥生時代後期の遺構と遺物

#### 1 遺 構

##### (1) 竪穴住居

当該時期の竪穴住居は5棟確認した。これまでの調査（県44年度、市46年度）とあわせると、当該時期の竪穴住居の数は17棟となる。

SH3001 調査区の西端で検出した。長辺6.8m・短辺6.0mの長方形で、深さは5cmである。周囲に壁周溝が巡る。南壁の中央付近に貯蔵穴がある。埋土は褐色の単層である。古墳時代後期の竪穴住居SH3042と重複する。

埋土から壺（1）、鉢（2）、高杯（3）が出土した。

SH3002 調査区の西端で検出した。建替えが行われており建替え前をSH3002a、建替え後をSH3002bとした。SH3002aは長辺5.7m・短辺3.4mの長方形で、深さは20cmである。周囲の壁周溝と主柱穴しか残存しない。壁周溝の埋土は褐色土である。

SH3002bは長辺6.8m・短辺4.8mの長方形で検出面からの深さは19cmである。周囲に壁周溝がまわり、南壁の中央付近に貯蔵穴がある。中央部近くに炉跡がある。埋土は黒褐色、壁周溝の埋土は褐色である。

埋土から壺（4）、甕（6・7）、甌（5）、高杯（8）、土玉（9）、ガラス玉（10～17）が出土した。

SH3004 調査区の西よりで検出した。一辺5.1mの

方形で、深さは13cmである。

周囲に壁周溝がまわり、南壁の中央付近に貯蔵穴がある。埋土は上から黒褐色土、暗褐色土である。

埋土から壺（18～26）、甕（27・28）、高杯（29～32）、磨製石斧（33）が出土した。

SH3007 調査区の西側で検出した。長辺5.3m・短辺4.8mの長方形で、深さは32cmである。

周囲に壁周溝がまわり、南壁の中央付近に貯蔵穴がある。当該時期の遺物は出土していないが、建物の構造から弥生時代後期の遺構と判断した。埋土から土師器長胴甕（56）が出土しているが、これは混入と思われる。

SH3017 調査区の中央近くで検出した。古墳時代後期の竪穴住居SH3016の攪乱を受けているが、一辺約4.2mの五角形の竪穴住居の隅の部分である可能性がある。そうすると「の18ビット3」、「ね18ビット2」は柱穴の可能性がある。

##### (2) 掘立柱建物

SB3172 調査区の中央付近で検出した。1間×2間の小規模な掘立柱建物である。柱穴からの出土遺物はないが、柱穴が小さく、柱間が不揃いなことから一応、弥生時代の掘立柱建物とした。

#### 2 遺 物

##### ①SH3001出土遺物（1～3）

出土遺物には壺（1）、鉢（2）、高杯（3）があるが、いずれも小片である。高杯は杯部が浅く、口縁部が外反し、口縁端部が外につまみ出され面をもつ。清水政宏氏の編年<sup>3)</sup>のI-①期にあたる。

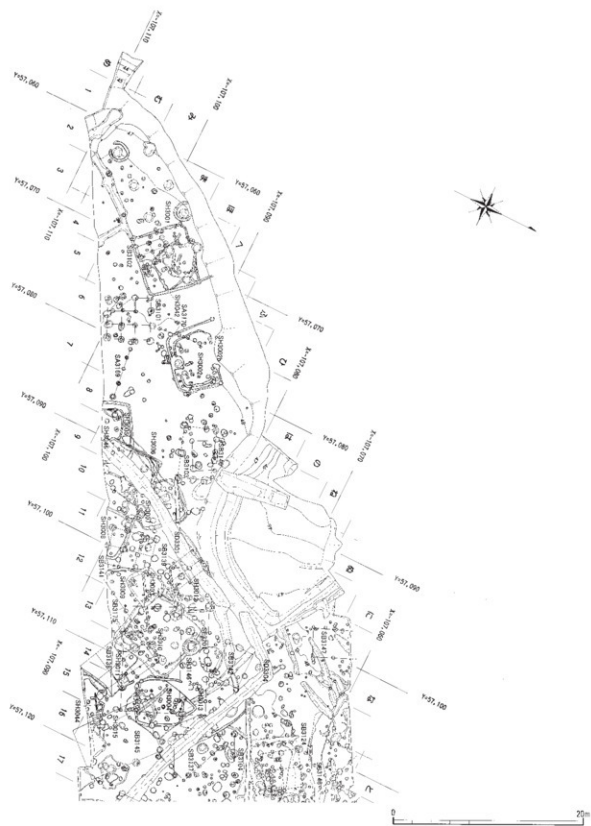
##### ②SH3002出土遺物（4～17）

出土遺物には壺（4）、甕（6・7）、甌（5）、高杯（8）、土玉（9）、ガラス玉（10～17）がある。甕には、受口状口縁のものと「く」状口縁のものがある。高杯は杯部が浅く、口縁部が外反し、口縁端部が外につまみ出され面をもつ。I-①期にあた

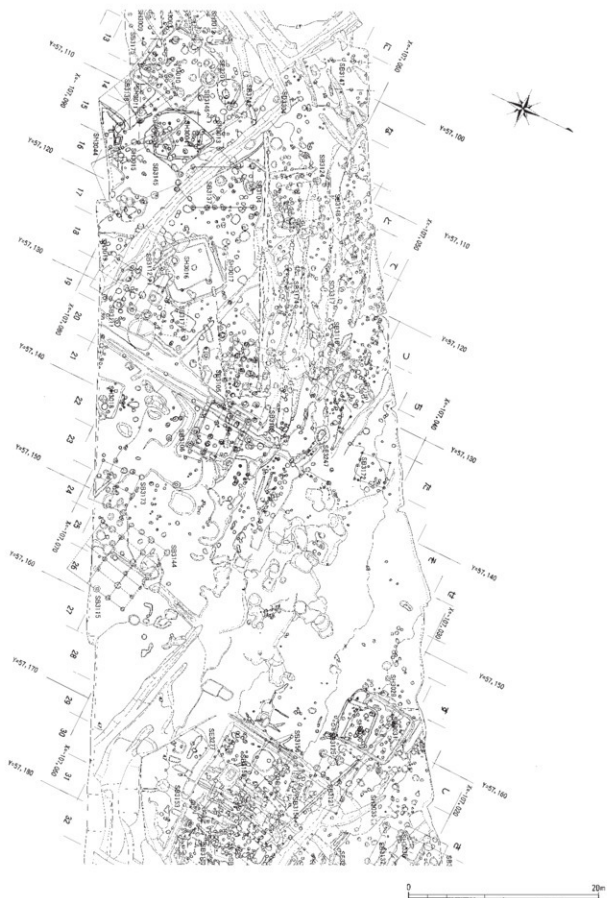
る。ただし図示しなかった遺物の中には、古墳時代初頭にまで降るものも含まれている。

##### ③SH3004出土遺物（18～33）

出土遺物には壺（18～26）、甕（27・28）、高杯（29～32）、磨製石斧（33）がある。甕には受口状口縁のものと、「く」状口縁のものがある。高杯は29のように杯部が浅く、口縁部が外反し、口縁端部が外につまみ出され面をもつものと、31のように杯部がやや深く、口縁部の外反が緩く、端部に面をもたないものがある。29はI-①期、31はI-②期のものと思われる。磨製石斧（33）は、蛇紋岩製のも



第5図 遺構実測図① (1:400)

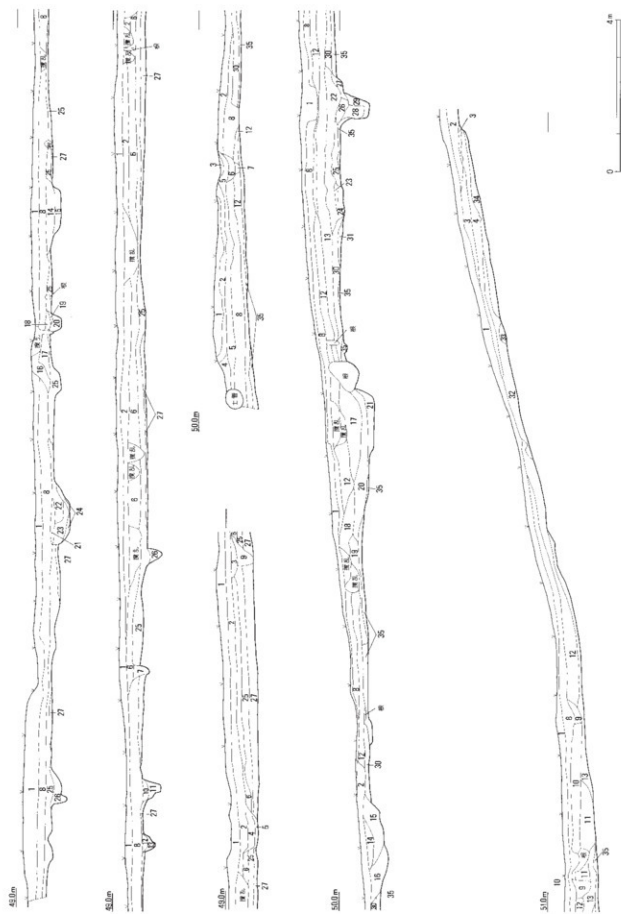


第6図 遺構実測図② (1:400)





第7図 遺構実測図③ (1:400)



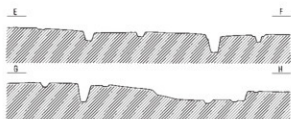
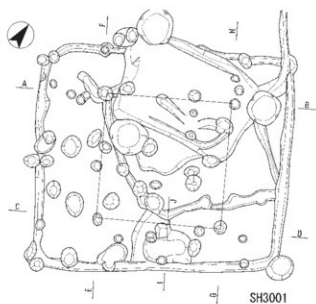
第 8 图 北西壁土层断面图 (1 : 100)

【上段】

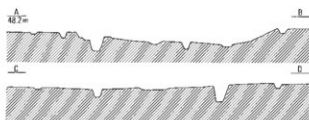
1	7.5YR4/4~	褐色土 しまりなし。粘性僅か。小~大円礫。表土。	7	7.5YR4/4	褐色土 しまり・粘性やや強い。φ3cm小砂利含。
2	7.5YR5/1	褐灰色土 しまり普通~ややなし。粘性なし。小中円礫。	8	7.5YR4/4	褐色土 しまり・粘性やや強い。φ3cm小砂利含。
3	5YR4/4	にぶい赤褐色土 しまり良。粘性あり。小角礫多。	9	10YR3/2	黒褐色土 しまり・粘性ない。瓦片・大~巨礫含。
4	土色不明	SD421埋土。	10	10YR8/2	灰白色砂質土 褐色砂と互層。 しまりあり。粘性なし。
5	土色不明	SD421埋土。	11	7.5YR4/4	褐色土 しまり良。粘性なし。大~巨礫含。
6	10YR3/3	暗褐色土 しまり普通。粘性なし。小中礫多。	12	7.5YR3/3	暗褐色土 しまり不一定。粘性僅か。大~巨礫含。
7	10YR3/3	暗褐色土 しまり・粘性弱い。小礫多。	13	7.5YR4/3	褐色土 礫質弱く、砂質粘性土へ変化。
8	10YR5/2	灰黄褐色土 しまりなし。粘性僅か。小中礫多。	14	10YR5/3	にぶい黄褐色土 しまり・粘性なし。中・大礫点存在。
9	色調不一定	しまり・粘性なし。	15	10YR4/3	にぶい黄褐色土 しまり・粘性なし。中・大礫点存在。
10	土色不明		16	10YR3/2~3/3	黒褐色土 しまり・粘性なし。中礫点存在。
11	土色不明		17	10YR4/4	褐色土 しまり良。粘性なし。小~大礫混。
12	土色不明		18	7.5YR3/1	黒褐色土 しまり不一定。粘性なし。
13	土色不明		19	10YR4/6	褐色土 しまり良。粘性ややあり。中・大礫混。
14	10YR3/2	黒褐色+褐灰色土混 しまり普通。粘性なし。	20	10YR5/4	にぶい黄褐色土 しまり良。粘性なし。中・大礫層。
15	7.5YR3/4	暗褐色土 しまりなし。粘性あり。	21	10YR5/3	にぶい黄褐色土 しまり普通。粘性なし。中小礫混。
16	7.5YR4/1	褐灰色土 粗砂質。 灰白色土・黒褐色土ブロック混。	22	7.5YR4/6	褐色土 しまり普通。粘性ややあり。中・大礫多。
17	7.5YR3/2~3/3	黒褐色~暗褐色土+灰白色土ブロック混。	23	7.5YR4/6	褐色土 しまり普通。粘性あり。
18	土色不明		24	7.5YR3/3	暗褐色土 しまり普通。粘性僅か。中・大礫少混。
19	土色不明		25	10YR4/6	褐色土 しまり良。粘性ややあり。中・大礫混。
20	土色不明		26	7.5YR4/6	褐色土。 しまり良。粘性ややあり。中・大礫混。
21	10YR3/1	黒褐色土 ブロック混。	27	7.5YR3/3	暗褐色土 しまり普通。粘性ややあり。
22	7.5YR3/3~3/4	暗褐色土+褐色土ブロック混。 しまり普通。粘性僅か。	28	10YR4/6	褐色土 しまり・粘性なし。
23	10YR3/1	黒褐色土 粗砂質。 しまり普通。粘性僅か。	29	10YR3/4	暗褐色土 しまりなし。粘性僅か。
24	土色不明		30	7.5YR3/3	暗褐色土 しまり普通。粘性ややあり。
25	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色土 粘性あり。	31	7.5YR3/3	暗褐色土 しまり良。粘性なし。小礫・粗砂多。
26	2.5GY3/1	暗オリーブ灰色土 しまり・粘性良。小中石含。	32	7.5YR4/4	褐色土 しまり普通。粘性僅か。小礫・粗砂多。
27	7.5YR5/6~5/8	暗褐色土 しまり普通。粘性あり。小中礫多。	33	7.5YR4/6	褐色土 しまり良。粘性なし。礫層。
28	10YR5/6	黄褐色土 しまり良。粘性あり。粗砂~小礫多。	34	10YR8/1	灰白色土 シルト岩。 しまりややあり。粘性なし。

【下段】

1	10YR4/3	にぶい黄褐色土 しまりかなり強い。粘性弱い。	35	7.5YR5/6	明褐色土 しまり普通。粘性高い。小・中礫多。
2	7.5YR4/3	褐色土 しまり・粘性強い。	36	10YR8/1	灰白色土 シルト岩。
3	10YR4/6	褐色土 粗砂層。 しまり・粘性弱い。			
4	10YR3/4	暗褐色土 しまり・粘性弱い。			
5	7.5YR3/4	暗褐色土 しまり強い。粘性弱い。小砂利。			
6	10YR4/6	褐色土 粗砂層。 しまり・粘性弱い。φ3cm程度の礫含。			

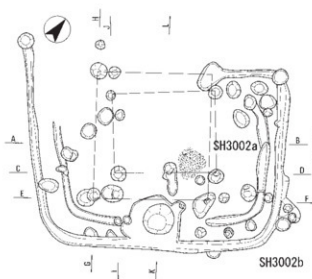


SH3001



[SH3001]

- |            |         |         |
|------------|---------|---------|
| 1. 10YR3/2 | 黄褐色土    | (貯蔵穴埋土) |
| 2. 5YR4/4  | にぶい赤褐色土 | (貯蔵穴埋土) |
| 3. 10YR3/2 | 黄褐色土    | (貯蔵穴埋土) |
| 4. 5YR3/4  | 暗赤褐色土   | (貯蔵穴埋土) |
| 5. 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | (貯蔵穴埋土) |



SH3002b

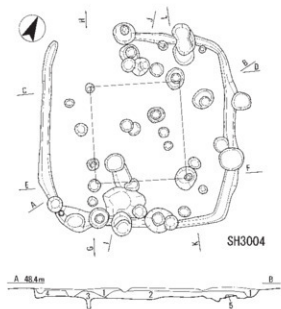


[SH3002]

- |             |      |                |
|-------------|------|----------------|
| 1. 7.5YR5/8 | 赤褐色土 | (堆山)           |
| 2. 7.5YR3/2 | 黄褐色土 | (SH3002a・b 埋土) |
| 3. 7.5YR4/4 | 褐色土  | (SH3002b 埋土)   |
| 4. 7.5YR4/3 | 褐色土  | (SH3002a 埋土)   |



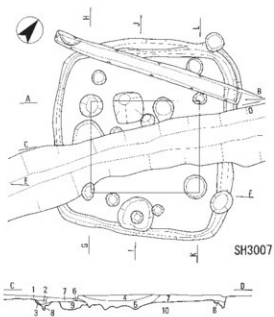
第9図 SH3001・3002 (1:100)



SH3004

【SH3004】

- |             |      |                  |
|-------------|------|------------------|
| 1. 7.5YR3/2 | 黄褐色土 | (SH3013-3015 埋土) |
| 2. 10YR3/7  | 黄褐色土 | (SH3004 埋土)      |
| 3. 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | (SH3004 埋土)      |
| 4. 10YR3/3  | 暗褐色土 | (SH3004 埋土)      |
| 5. 10YR4/4  | 褐色土  | (SH3004 埋土)      |



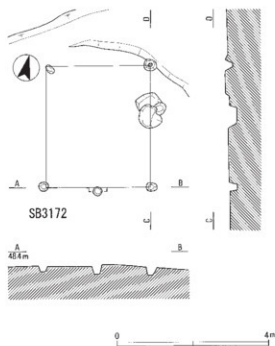
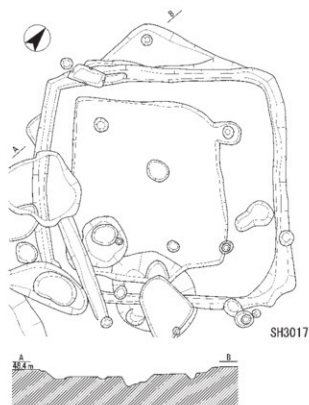
SH3007

【SH3007】

- |             |         |             |
|-------------|---------|-------------|
| 1. 7.5YR3/3 | 暗褐色土    | (SH3006 埋土) |
| 2. 7.5YR4/3 | 褐色土     | (SH3006 埋土) |
| 3. 10YR5/6  | 黄褐色土    |             |
| 4. 7.5YR2/1 | 黑色土     |             |
| 5. 7.5YR3/3 | 暗褐色土    |             |
| 6. 7.5YR3/2 | 黑褐色土    |             |
| 7. 10YR3/3  | 暗褐色土    | (SH3007 埋土) |
| 8. 7.5YR4/4 | 褐色土     | (SH3007 埋土) |
| 9. 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 | (埋山)        |
| 10. 10YR5/6 | 黄褐色土    | (埋山)        |

0 4m

第10図 SH3004・3007 (1:100)



第11図 SH3017・SB3172 (1:100)

のである。

#### ④包含層出土遺物 (34~51)

全体的には弥生時代後期後半の遺物が多い。壺 (34~36)、甕 (37)、高杯 (38~42)、磨製石斧 (43~45)、土玉 (46)、石鏃 (47~49)、ガラス玉 (50・51) がある。壺 (36) は口縁垂下部分の接合状況がよくわかる。甕にはS字状口縁のもの (37) もある

が、全体では少数である。高杯も口縁部の外反が強く、端部に面をもつものが多い。いずれもⅠ-①期のものか。

石斧のうち、43・45の石材はハイアロクラスタイト、44の石材は蛇紋岩である。石鏃は、47がサヌカイト製、48が黒曜石製、49が下呂石製である。いずれも縄文時代のものである可能性が高い。

## Ⅳ 古墳時代後期から古代の遺構と遺物

### 1 遺 構

#### (1) 竪穴住居

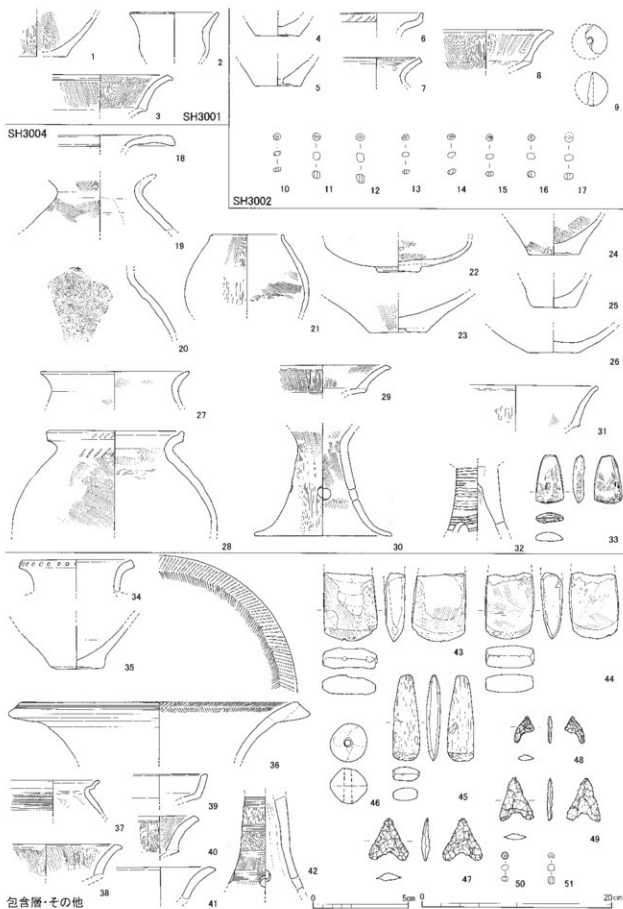
SH3003 調査区の西よりで検出した。長辺3.7m・短辺3.2mの長方形で、深さは40cm程である。壁周溝はなく、同時代の他の竪穴住居よりも小型である。SH3009、SH3010と重複するが、三者はSH3003→SH3010→SH3009という順で構築されている。

遺構の時期はおおむね7世紀後半以前と思われる。SH3005 調査区の西よりで検出した。一辺6.7mの方形で、深さは15cm程である。壁周溝が巡る。埋土は暗褐色である。SH3006・3046と重複する。三者

の前後関係は、SH3005・3046→SH3006となる。埋土から須恵器杯蓋 (52)、土玉 (53) が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀中葉と思われる。SH3046 SH3005と重複して検出した。長辺3.0m以上・短辺2.5m以上、深さは22cmである。SH3005・3006と重複する。三者の前後関係は前述のとおりである。

SH3006 SH3005の東で検出した。長辺7.2m・短辺5.95mの長方形で、深さは6cmほどである。壁周溝が巡る。SH3005、3008と重複するが、SH3005との



第12図 出土遺物① (1~10・18~46=1:4、10~17・47~51=1:2)

前後関係は前述の通りで、SH3008との前後関係はSH3006の方が新しい。埋土から土師器長胴甕(54)、甕(55)が出土した。

遺構の時期は7世紀中葉から後葉と思われる。

**SH3008** SH3006の東で検出した。長辺8.2m、深さは16cm程で、壁周溝が巡る。北壁の中央付近に竈の痕跡の焼土がある。焼土を除去すると1.6×1.0m、深さ15cm程の土坑があり、煙道も確認した。SH3006との前後関係は前述の通りである。埋土から土師器甕(57)、須恵器杯蓋(58)・杯身(59)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀中葉と思われる。

**SH3009** 調査区の西よりで検出した。長辺6.8m、深さは20cm程である。壁周溝が巡る。SH3003・3010との前後関係は前述の通りである。東辺に竈の痕跡の焼土がある。焼土を除去すると深さ15cm程の土坑があった。埋土から土師器の甕類(60・61)が出土した。

遺構の時期は7世紀後半以降と思われる。

**SH3010** 調査区の西よりで検出した。長辺6.5m・短辺6.3mの方形で深さは24cm程である。周囲にやや幅広い壁周溝が巡る。西辺の中央付近に竈がある。竈は、竈穴住居掘削後に皿状の穴を掘り、その上に粘質土を積んで構築している。

埋土から土師器甕類(62・63・71)、須恵器杯蓋(72~75)・高杯(76・78~80)・短頸甕(81)・甕か鍋(82)、鉄鏝(84)、鎌(85)が、竈の崩落土から土師器甕類(64~70)、須恵器高杯(77)、支柱(83)が出土した。

SH3011・3012と重複するが、三者の中では、SH3010が最も新しい。

遺構の時期はおおむね7世紀後半と思われる。

**SH3011** 調査区の西よりで検出した。長辺3.5m以上・短辺3.1m以上の方形で、深さは18cm程である。北壁の外側に焼土がみられた(SF27)が、これが竈の痕跡かどうかは不明である。SH3010との前後関係は前述の通りである。埋土から土師器甕類(86)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀後半以前である。

**SH3012** 調査区の西よりで検出した。長辺4.8m・短辺3.8mの長方形で、深さは10cm程である。壁周溝が巡る。東壁の中央に竈の痕跡の焼土がある。焼

土を除去すると皿状の浅い土坑が掘られていた。また、東隅には貯蔵穴がある。埋土から土師器甕類(87・88)・高杯(89)、須恵器杯身(90)・器台(91)が出土した。

SH3010との前後関係は前述の通りである。

遺構の時期はおおむね7世紀後半以前である。

**SH3013** 調査区の西よりで検出した。SH3013は一辺5.3mの方形で、深さは18cm程である。部分的に壁周溝が残存する。弥生時代の竈穴住居SH3004、SH3015と重複するが、SH3015との前後関係は不明である。

主柱穴の埋土から須恵器杯蓋(92)が出土した。

**SH3015** 調査区の西よりで検出した。長辺4.9m・短辺3.6m以上の方形で、深さは24cm程である。

**SH3016** 調査区の西よりで検出した。長辺6.8m・短辺6.3mの方形で、深さは26cmである。壁周溝が巡る。住居の中央部が方形に約10cmほど掘り下げられている。埋土から土師器甕類(93)・短頸甕(94)、須恵器杯蓋(95)・杯身(96)・高杯(98)、砥石(99)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀前半であると考えられる。

**SH3018** 調査区の西よりで検出した。長辺3.7m・短辺2.4m以上の方形で、深さは17cm程である。埋土から須恵器杯蓋(100)・杯身(101)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀前半と考えられる。

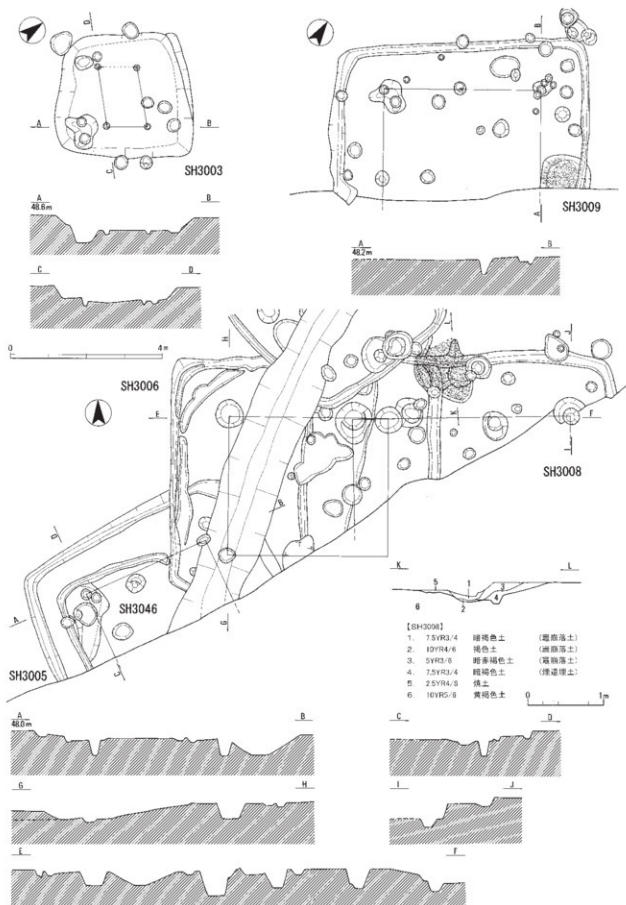
**SH3019** 調査区の西よりで検出した。長辺4.6m・短辺3.6m以上の方形である。深さは17cm程である。

**SH3020** 調査区の東よりで検出した。長辺6.3m・短辺2.0m以上の方形で、深さは45cm程である。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。北壁の中央付近に2基の竈がある。竈穴掘削後に浅い土坑を掘り、東側の竈を構築したあとで壁周溝を巡らせている。西側の竈は、壁周溝を埋めて構築されているので、後に造りつけられた可能性が高い。

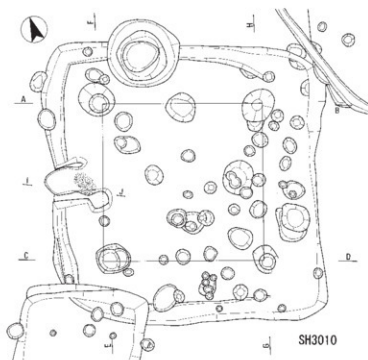
埋土から須恵器杯身(102~104)・高杯(105・106)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

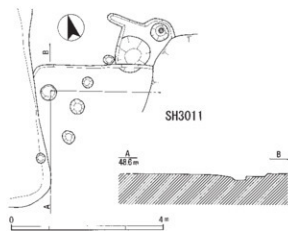




第13图 SH3003 • 3005 • 3006 • 3008 • 3009 • 3046 (1 : 100, 1 : 50)



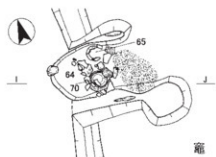
SH3010



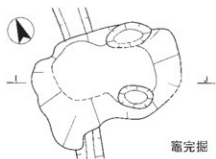
SH3011

40cm

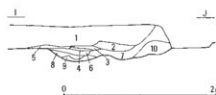
0 4m



竈

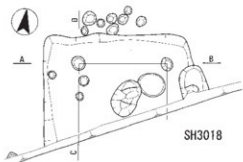


竈完掘

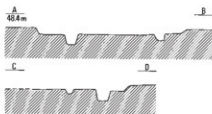


【SH3010】

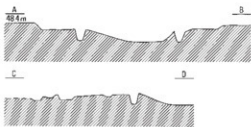
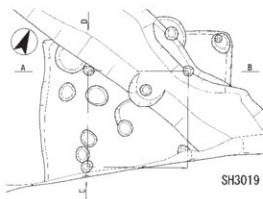
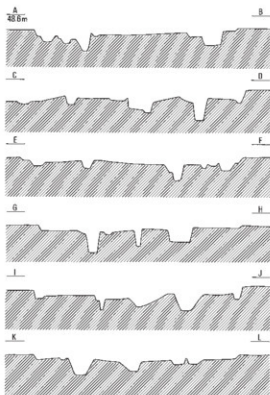
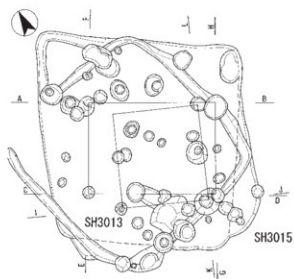
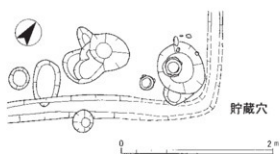
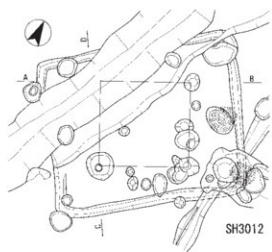
- |             |         |             |
|-------------|---------|-------------|
| 1. 75YR5/8  | 弱褐色土    | (SH3010 埋土) |
| 2. 75YR5/8  | 弱褐色土    | (遺構土)       |
| 3. 5YR5/8   | 明赤褐色    | (遺構土)       |
| 4. 7.5YR3/2 | 黄褐色土    | (遺構土)       |
| 5. 10YR2/3  | 暗褐色土    |             |
| 6. 5YR4/6   | 赤褐色土    | (遺構用時の埋土)   |
| 7. 10YR2/3  | 暗褐色土    | (遺構土)       |
| 8. 5YR4/8   | 赤褐色土    | (遺構土)       |
| 9. 2.5YR5/4 | にぶい赤褐色土 | (遺構土)       |
| 10. 10YR3/2 | 黄褐色土    |             |
|             | 10YR5/8 | 黄褐色土        |



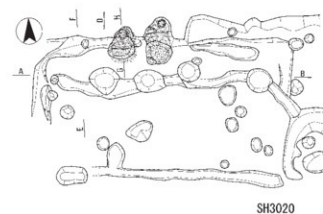
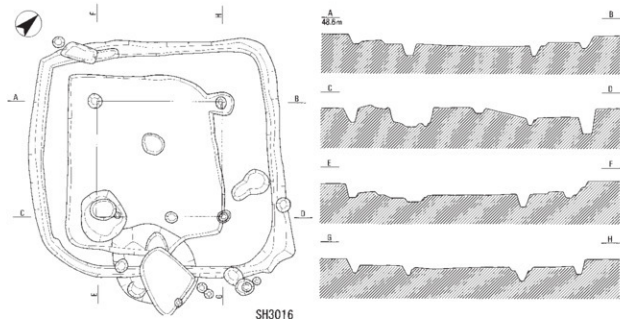
SH3018



第14図 SH3010・3011・3018 (1:100、1:50)

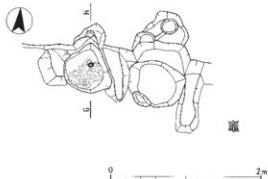
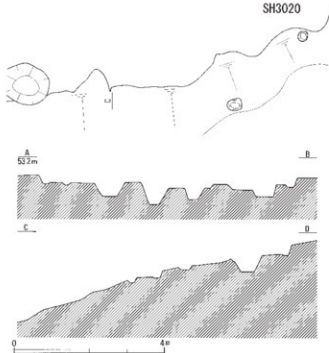


第15图 SH3012 · 3013 · 3015 · 3019 (1 : 100, 1 : 50)

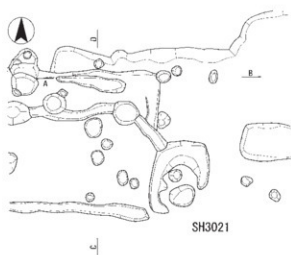


- 【SH3016】
- |             |     |               |
|-------------|-----|---------------|
| 1. 7.5YR4/4 | 褐色土 | (SH3020 雑土)   |
| 2. 7.5YR4/6 | 褐色土 | (SH3020 雑土)   |
| 3. 7.5YR4/4 | 褐色土 | (SH3020 黒溝雑土) |

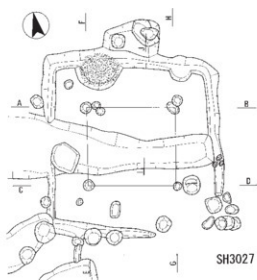
- 【SH3020】
- |             |       |            |
|-------------|-------|------------|
| 1. 7.5YR4/6 | 褐色土   | (黒溝落土)     |
| 2. 7.5YR4/4 | 褐色土   | (黒溝落土)     |
| 3. 7.5YR5/6 | 明褐色土  | (黒溝落土)     |
| 4. 7.5YR4/6 | 褐色土   | (黒溝落土)     |
| 5. 5YR3/2   | 暗赤褐色土 | (黒溝落土)     |
| 6. 7.5YR4/3 | 褐色土   | (黒溝落土)     |
| 7. 5YR4/8   | 赤褐色土  | (高梁用時の埴土)  |
| 8. 7.5YR4/6 | 褐色土   | (支柱石採取後埋土) |
| 9. 7.5YR4/4 | 褐色土   | (黒溝埋土)     |



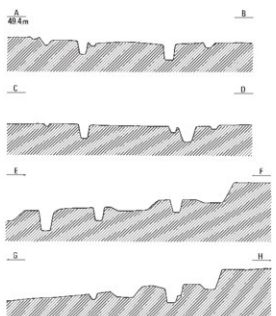
第16図 SH3016・3020 (1:100, 1:50)



SH3021



SH3027



- 【SH3027】
- |    |          |      |             |
|----|----------|------|-------------|
| 1. | 7.5YR4/4 | 褐色土  | (SH3027 埋土) |
| 2. | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | (SH3027 埋土) |
| 3. | 7.5YR4/4 | 褐色土  | (SH3027 埋土) |
| 4. | 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | (埋溝埋土)      |

0 4m

第17図 SH3021・3027 (1:100)

SH3021 調査区の東よりで検出した。一辺は4.6m以上、深さは42cm程である。埋土から土師器壺と須恵器甕が出土した。

SH3022・3023 調査区の東よりで検出した重複する2棟の竪穴住居。

SH3022は、一辺4.8m程の方形で、深さは30cmである。部分的に壁周溝が残る。埋土から須恵器杯身(107・108)・瓶(109・111)・鉢(110)が出土した。遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

SH3023は一辺3.2m程の方形で、深さは15cmである。部分的に壁周溝が残る。埋土から須恵器杯身(112)・短須壺(113)・高杯(114)が出土した。遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

両者はSH3034と重複するが、三者の前後関係は不明である。

SH3024・3025a・3025b・3038 調査区の西よりで検出した重複する4棟の竪穴住居。いずれも斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。

SH3024は長辺4.3m・短辺1.3m以上の方形で、深さは12cm程である。北壁の中央に竈の痕跡の焼土があり、焼土を除去すると皿状の浅い土坑が掘られている。

SH3025aは長辺3.0m以上・短辺1.1m以上の方形で、深さは10cm程である。竪穴掘削後に浅い土坑を掘り、東側の竈を構築したあとで壁周溝を巡らせている。このことから考えると、SH3025aと3025bの前後関係はa→bとなる。

SH3025bは長辺3.6m以上・短辺1.4m以上の方形で、深さは14cm程である。SH3025aを西に拡張して建替えたものかと思われる。

SH3038は壁周溝のみが残存するため一応、竪穴住居とした。

SH3026・3033 調査区の東よりで検出した2棟の重複する竪穴住居。SH3026は長辺4.8m・短辺2.1m以上の方形で、深さは33cmである。残存する部分には壁周溝が巡る。北壁と西壁に竈の痕跡の焼土がある。このうち西壁の竈は壁周溝掘削後に浅い土坑を掘り、竈を構築している。埋土から須恵器杯蓋(120・121)・杯身(122・123)が出土した。

SH3033は長辺5.3m・短辺3.4m以上の方形で、深

さは26cm程である。北壁と西壁には壁周溝が残存する。東壁の中央付近に竈がある。竈の下の土坑は極めて浅く、他のものとは異なり、竈を床面から直接組み上げた可能性が高い。埋土から土師器甕(158)、須恵器杯蓋(159・160)が出土した。

SH3028・3032 調査区の東よりで検出した2棟の重複する竪穴住居。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。SH3028は長辺8.3m・短辺2.3m以上の方形で、深さは43cmである。北西隅近くの壁に、竈の痕跡の焼土がある。焼土除去後には土坑はみられなかった。埋土から土師器甕類(124～127)、須恵器杯蓋(128)・杯身(129・130)・甕(131)が出土した。遺構の時期はおおむね7世紀後半と考えられる。

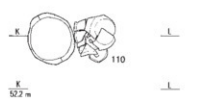
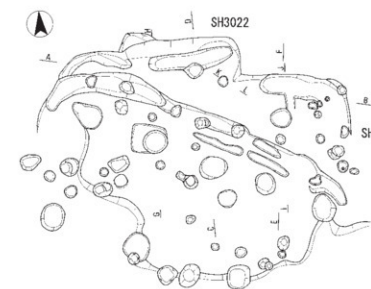
SH3032は長辺6.1m・短辺2.1m以上の方形で、深さは42cmである。西壁の中央付近に竈の痕跡の焼土がある。焼土の除去後には土坑はみられなかった。埋土から土師器甕類(154・155)、須恵器杯身(156)・杯蓋(157)が出土した。SH3028と3032の前後関係は、SH3032が古く、3028が新しい。遺構の時期はSH3028がおおむね7世紀後半、3032がそれ以前である。

SH3039 調査区の東よりで検出した。壁周溝と主柱穴2ヶ所のみであるが一応、竪穴住居とした。

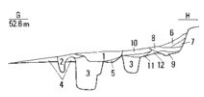
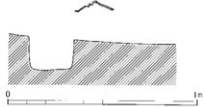
SH3027 調査区の東よりで検出した。長辺5.0m・短辺4.7mの方形で、深さは61cmである。埋土から土師器杯(115)・甕(116・117)、須恵器杯蓋(118)・杯身(119)が出土した。

SH3029・3030・3031 調査区の東よりで検出した3棟の重複する竪穴住居。SH3029は、一辺2.3m以上の方形である。SH3030は、長辺4.5m・短辺3.8mの方形で、深さは9cm程である。東壁の中央に竈を持つ。竈は、竪穴住居の壁周溝掘削後に浅い土坑を掘り、その周囲に粘土を積み上げて構築されている。埋土から砥石(132)が出土した。

SH3031は、長辺6.0m・短辺5.9mの方形で、深さは21cmである。北壁の中央に竈がある。竈は、竪穴住居の壁周溝掘削後に浅い土坑を掘り、その周囲に粘土を積み上げて構築されている。煙道も良好に残る。埋土から土師器甕類(133～142)、須恵器杯蓋(143)・杯身(144～147)・壺蓋(147)・高杯(149

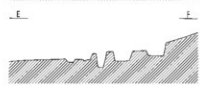
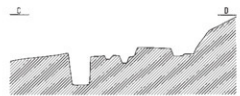
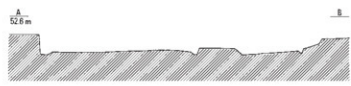


遺物出土状況



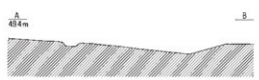
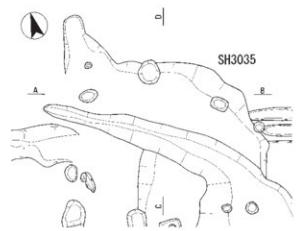
【SH3022】

- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1. 82794.9 褐色土                | 7. 82794.9 褐色土 (SH-0302 埋土)    |
| 2. 82794.9 褐色土                | 8. 82794.9 褐色土 (SH-0302 埋土)    |
| 3. 82794.9 黄褐色土 (SH3022 柱穴)   | 9. 82913.9 砂黄褐色土 (SH-0302 埋土)  |
| 4. 23195.9 砂黄褐色土 (SH-0304 埋土) | 10. 82914.9 褐色土 (SH-0302 埋土)   |
| 5. 20799.9 黄褐色土 (SH-0304 埋土)  | 11. 75965.9 砂黄褐色土 (SH-0302 埋土) |
| 6. 12979.9 褐色土 (SH-0302 埋土)   | 12. 23196.9 砂黄褐色土 (SH-0302 埋土) |

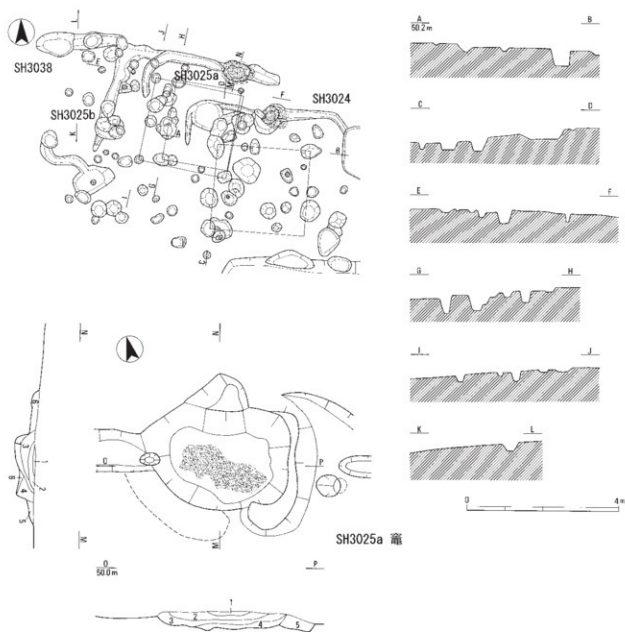


【SH3023】

- |                              |
|------------------------------|
| 1. 82794.9 褐色土 (SH-0302 埋土)  |
| 2. 13959.9 褐色土 (SH-0302 埋土)  |
| 3. 82913.9 黄褐色土 (SH-0302 埋土) |
| 4. 82914.9 褐色土 (SH-0302 埋土)  |



第18図 SH3022・3023・3035 (1:100, 1:20)

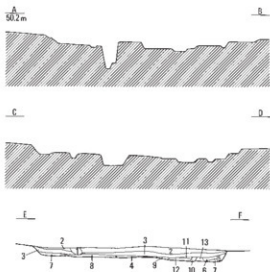
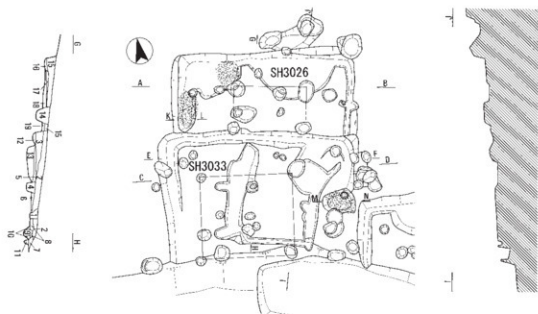


【SH3025a 竈】

- |    |                   |      |              |        |
|----|-------------------|------|--------------|--------|
| 1. | 7.5YR4/4~7.5YR2/1 | 褐色土  | 焼土アロウ, 灰を含む。 | (塚崩落土) |
| 2. | 7.5YR5/8          | 赤褐色土 |              | (竈崩落土) |
| 3. | 7.5YR4/4~5YR4/6   | 赤褐色土 | 炭化物含む。       | (竈崩落土) |
| 4. | 7.5YR4/8          | 褐色土  |              | (竈壁部)  |
| 5. | 10YR4/6           | 褐色土  |              | (竈壁部)  |
| 6. | 7.5YR4/6          | 褐色土  |              | (煙道埋土) |
| 7. | 7.5YR4/6          | 褐色土  |              |        |
| 8. | 7.5YR4/6          | 褐色土  |              |        |

第19図 SH3024・3025a・3025b・3038 (1:100、1:20)





【SH3026-SH3033 G-H】

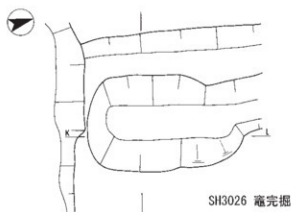
- |     |          |         |             |
|-----|----------|---------|-------------|
| 1.  | 7.5YR4/4 | 褐色土     |             |
| 2.  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色土 | (SH3033 埋土) |
| 3.  | 10YR4/4  | 褐色土     | (SH3033 埋土) |
| 4.  |          | 土色不明    |             |
| 5.  | 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 | (SH3033 埋土) |
| 6.  | 7.5YR4/5 | 褐色土     | (SH3033 埋土) |
| 7.  | 10YR4/6  | 褐色土     | (SH3033 埋土) |
| 8.  | 7.5YR4/4 | 褐色土     | (SH3033 埋土) |
| 9.  | 7.5YR4/3 | 褐色土     |             |
| 10. | 7.5YR4/6 | 褐色土     | (SH3033 埋土) |
| 11. |          | 土色不明    |             |
| 12. |          | 土色不明    | (SH3033 埋土) |
| 13. |          | 土色不明    |             |
| 14. | 7.5YR4/3 | 褐色土     |             |
| 15. | 7.5YR4/4 | 褐色土     | (SH3026 埋土) |
| 16. | 7.5YR4/4 | 褐色土     | (SH3026 埋土) |
| 17. | 7.5YR4/6 | 褐色土     |             |
| 18. | 7.5YR5/6 | 明褐色土    |             |
| 19. | 7.5YR5/6 | 明褐色土    |             |

【S-3026-S-3033 E-F】

- |     |          |         |             |
|-----|----------|---------|-------------|
| 1.  | 7.5YR4/6 | 褐色土     | (埋土)        |
| 2.  | 10YR5/4  | にぶい黄褐色土 | (S-3033 埋土) |
| 3.  | 10YR4/4  | 褐色土     | (S-3033 埋土) |
| 4.  | 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 |             |
| 5.  | 10YR4/6  | 褐色土     | (埋土)        |
| 6.  | 7.5YR4/6 | 褐色土     |             |
| 7.  | 7.5YR4/6 | 褐色土     | (埋土)        |
| 8.  | 7.5YR5/6 | 明褐色土    | (埋土)        |
| 9.  | 7.5YR4/4 | 褐色土     |             |
| 10. | 7.5YR4/4 | 褐色土     |             |
| 11. | 7.5YR5/6 | 明褐色土    |             |
| 12. | 7.5YR4/4 | 褐色土     |             |
| 13. | 7.5YR4/6 | 褐色土     |             |

0 4m

第20図 SH3026・3033 (1:100)

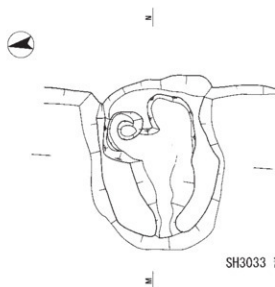


SH3026 窟完掘

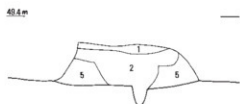


【SH3026 窟】

- |    |          |       |        |
|----|----------|-------|--------|
| 1. | 5YR3/6   | 暗赤褐色土 | (窟頂落土) |
| 2. | 7.5YR4/4 | 褐色土   | (窟頂落土) |
| 3. | 7.5YR4/4 | 褐色土   |        |
| 4. | 7.5YR4/4 | 褐色土   | (窟頂落土) |
| 5. | 5YR3/6   | 暗赤褐色土 | (窟頂落土) |
| 6. | 10YR4/6  | 褐色土   | (窟頂落土) |
| 7. | 5YR5/8   | 明赤褐色土 | (窟頂落土) |



SH3033 窟

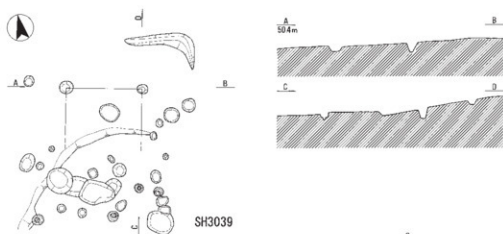


【SH3033 窟】

- |    |           |       |        |
|----|-----------|-------|--------|
| 1. | 7.5YR4/3  | 褐色土   | (窟頂落土) |
| 2. | 7.5YR3/4  | 暗褐色土  | (窟頂落土) |
| 3. | 7.5YR3/4  | 暗褐色土  | (窟頂落土) |
| 4. | 7.5YR3/3  | 暗褐色土  | (窟頂落土) |
| 5. | 7.5YR3/3  | 暗褐色土  | (窟頂落土) |
|    | +7.5YR4/4 | 暗赤褐色土 | (窟頂部)  |

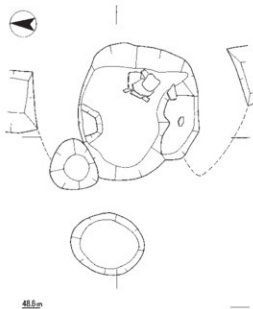
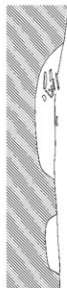


第21図 SH3026窟・3033窟 (1:20)

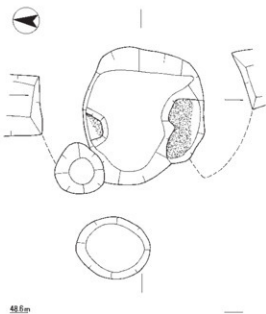
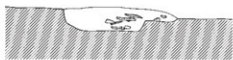


第22图 SH3028·3032·3039 (1:100)





遺物出土状況

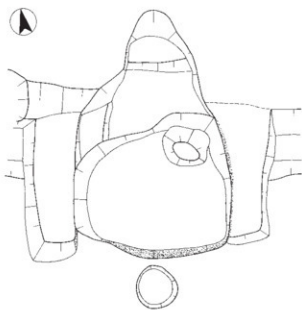
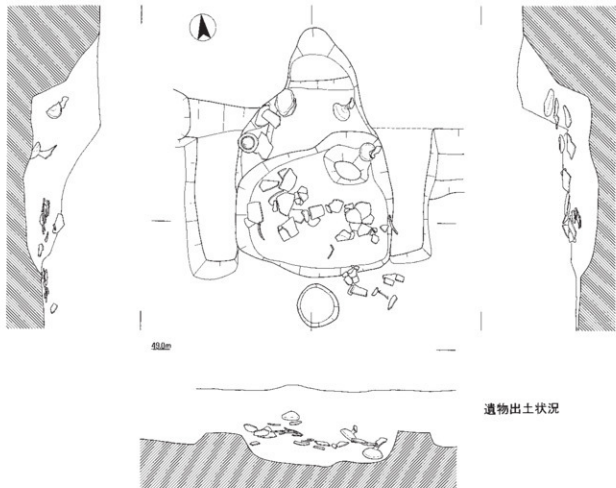


【SH3030 窯】

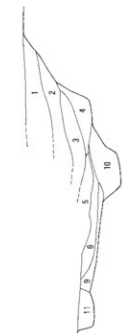
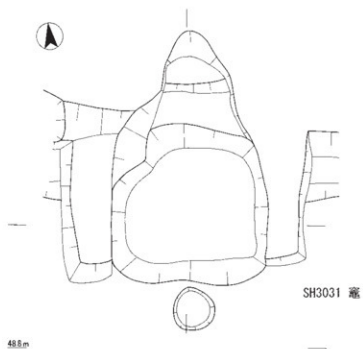
- |             |       |        |
|-------------|-------|--------|
| 1. 5YR3/6   | 暗赤褐色土 | (窯跡層土) |
| 2. 7.5YR3/4 | 暗褐色土  | (窯跡層土) |
| 3. 10YR3/4  | 暗褐色土  | (窯跡層土) |
| 4. 10YR3/4  | 暗褐色土  | (窯跡部)  |
| 5. 10YR3/4  | 暗褐色土  | (周溝埋土) |



第24図 SH3030窯 (1:20)

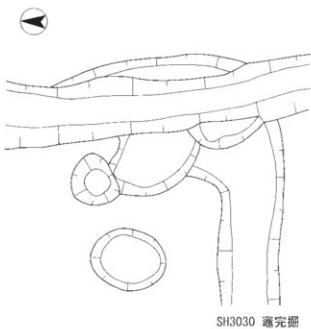
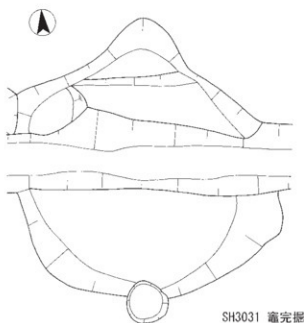


第25図 SH3031竈 (1:20)

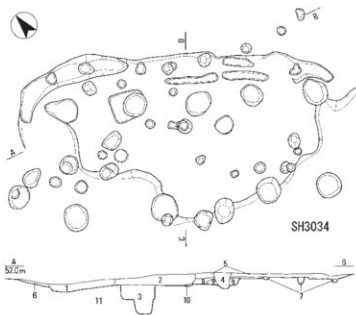


【SH3031 窆】

- |              |      |        |
|--------------|------|--------|
| 1. 7.5YR3/4  | 暗褐色土 |        |
| 2. 7.5YR3/3  | 暗褐色土 |        |
| 3. 7.5YR2/3  | 暗褐色土 |        |
| 4. 7.5YR3/4  | 暗褐色土 |        |
| 5. 7.5YR3/2  | 黑褐色土 | (甬道階土) |
| 6. 2.5YR4/6  | 赤褐色土 | (甬道面)  |
| 7. 7.5YR4/3  | 褐色土  | (室柱部)  |
| 8. 7.5YR4/4  | 褐色土  | (室柱部)  |
| 9. 7.5YR4/3  | 褐色土  | (室基座部) |
| 10. 7.5YR4/4 | 褐色土  | (甬道埋土) |
| 11. 7.5YR3/3 | 暗褐色土 | (柱穴)   |

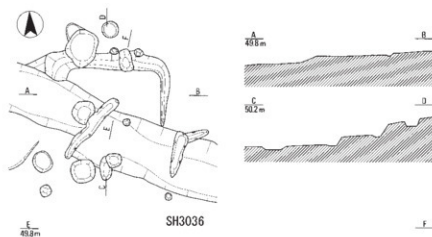


第26図 SH3030窆・SH3031窆 (1:20)



【SH3034】

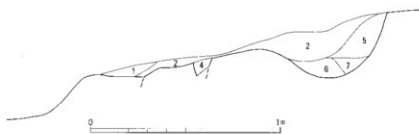
1. 10YR4/6 褐色土
2. 10YR4/6 褐色土
3. 10YR5/8 黄褐色土 (SB3122 柱穴)
4. 10YR4/6 褐色土
5. 10YR4/6 褐色土 (SH3034 埋土)
6. 10YR4/6 褐色土
7. 10YR4/6 褐色土
8. 10YR4/6 褐色土
9. 10YR4/6 褐色土 (SH3034 埋土)
10. 10YR5/8 黄褐色土
11. 2.5YR6/6 明黄褐色土



SH3036

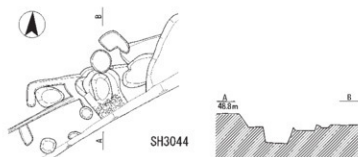
E  
48.8m

F



【SH3044】

1. 7.5YR3/4 暗褐色
2. 7.5YR4/3 褐色
3. 7.5YR3/4 暗褐色
4. 7.5YR3/3 暗褐色
5. 7.5YR4/6 褐色 (周溝埋土)
6. 7.5YR3/4 暗褐色 (周溝埋土)
7. 7.5YR4/4 褐色 (周溝埋土)



SH3044

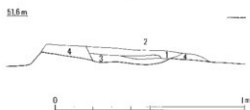
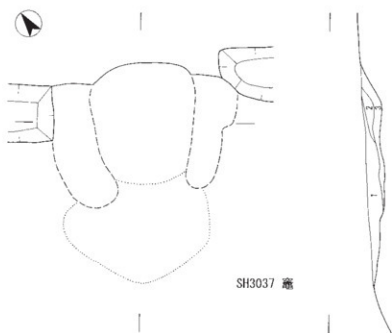
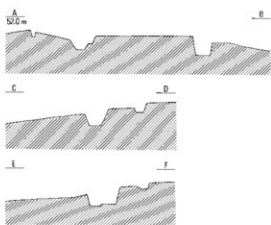
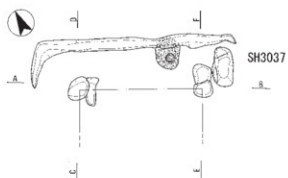
A  
48.8m

B

0 4m

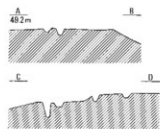
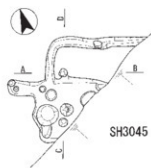
第27图 SH3034 · 3036 · 3044 (1 : 100, 1 : 20)





【SH3037 壙】

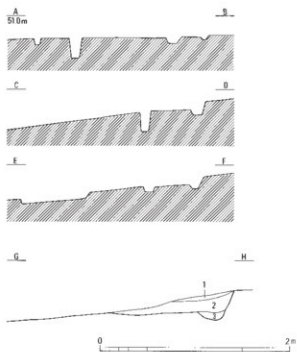
- |    |          |      |        |
|----|----------|------|--------|
| 1. | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | (壙前落土) |
| 2. | 10YR4/6  | 褐色土  | (壙前落土) |
| 3. | 7.5YR3/4 | 暗褐色土 | (壙前落土) |
| 4. | 7.5YR4/4 | 褐色土  |        |



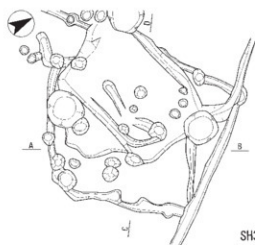
第28图 SH3037·3045 (1:100, 1:20)



SH3040



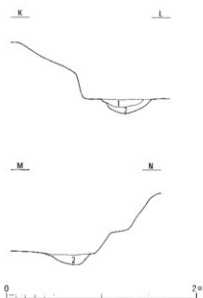
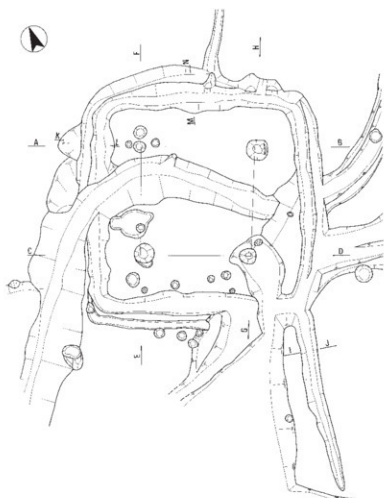
- 【SH3040】
- 1. 10YR4/6 褐色土 (SH3040 埋土)
  - 2. 10YR5/6 黃褐色土 (SH3040 埋土)
  - 3. 10YR5/6 黃褐色土 (周溝埋土)



SH3042

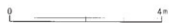
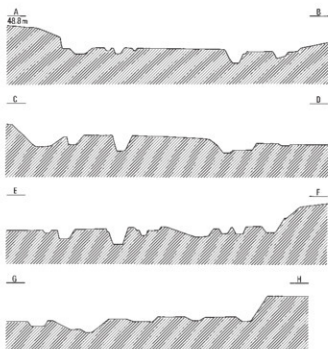


第29圖 SH3040・3042 (1:100, 1:40)



【SH3041】

1. 10YR4/6 褐色土 (周溝埋土)
2. 10YR4/4 褐色土 (周溝埋土)
- +10YR4/6



第30図 SH3041 (1:100, 1:40)

～152)・短頸壺(153)が出土した。遺構の時期は7紀後半と考えられる。

3棟の中では、SH3030がもっとも新しく構築されている。

**SH3034** 調査区の東よりで検出した。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。残存する一辺は8.3mで、深さは38cmである。埋土から須恵器杯蓋(161)・壺(162)が出土した。SB3122の柱穴はこの堅穴住居の埋土を切って掘削されている。ただし、SB3122の関連施設の可能性も残る。

**SH3035** 調査区の東よりで検出した。遺構の輪郭が明瞭でないが、調査時の所見から一応、堅穴住居とした。長辺5.5m以上・短辺3m以上で、深さは32cm程である。

**SH3036** 調査区の東側で検出した堅穴住居の北東の隅。深さは36cmである。

**SH3044** 調査区の東よりで検出した堅穴住居の北西の隅。北壁付近に竈の痕跡と思われる浅い土坑があり、全面に焼土が広がる。埋土から土師器甕(165)が出土した。

**SH3037** 調査区の東よりで検出した。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。残存する一辺は5.3mで、深さは16cmである。北壁のやや東よりに竈がある。竈は堅穴住居の壁周溝を掘削した後、浅い土坑を掘り、その上に粘土を積み上げて構築されている。埋土から土師器甕類(166～168・172・173)、須恵器杯蓋(169)・杯身(170)が、貯蔵穴の埋土から土師器甕類(172)が出土した。

遺構の時期はおおむね7世紀中葉と考えられる。

**SH3045** 調査区の東よりで検出した堅穴住居の北西隅。

**SH3040** 調査区の東よりで検出した。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため壁周溝も部分的にしか残存していない。残存する一辺は4.8mで、深さは26cmである。埋土から土師器甕類(164)が出土した。

**SH3042** 調査区の東よりで検出した。長辺3.9m・短辺3.5m以上の方形で、深さは2cm程しか残っていない。

**SH3041** 調査区の東よりで検出した。長辺6.5m・短辺6.0mの方形で、深さは31cm程である。南側を拡張している。埋土から土師器甕類(174～182)・壺(183)、須恵器杯蓋(184)・杯身(185～188)・高杯(189)が出土した。

## (2) 掘立柱建物

**SB3101** 調査区の西端付近で検出した3間×3間の総柱建物。柱掘形は円形で、側の部分の柱穴は大きく深い。柱間は1.5mの等間である。

**SB3102** 調査区の西端で検出した2間×2間の総柱建物。柱間が不揃いであるものの、建物の規模は桁行が4.5m(1.5m×3間)、梁行が2.1m(1.15m+0.95m)程である。

**SB3103・3140** 調査区の西端付近で検出した重複する2棟の掘立柱建物。SB3103は桁行2間、梁行2間の東西棟。柱穴は円形でやや大ぶりである。建物の規模は、桁行が5.4m(2.7m×2間)、梁行が3.6m(1.8m×2間)程である。柱穴から須恵器短頸壺(190)が出土した。

SB3140は桁行2間×梁行1間の東西棟。建物の規模は桁行が3.6m(1.8m×2間)、梁行が2.4m程である。2棟の前後関係は、SB3103→3140である。

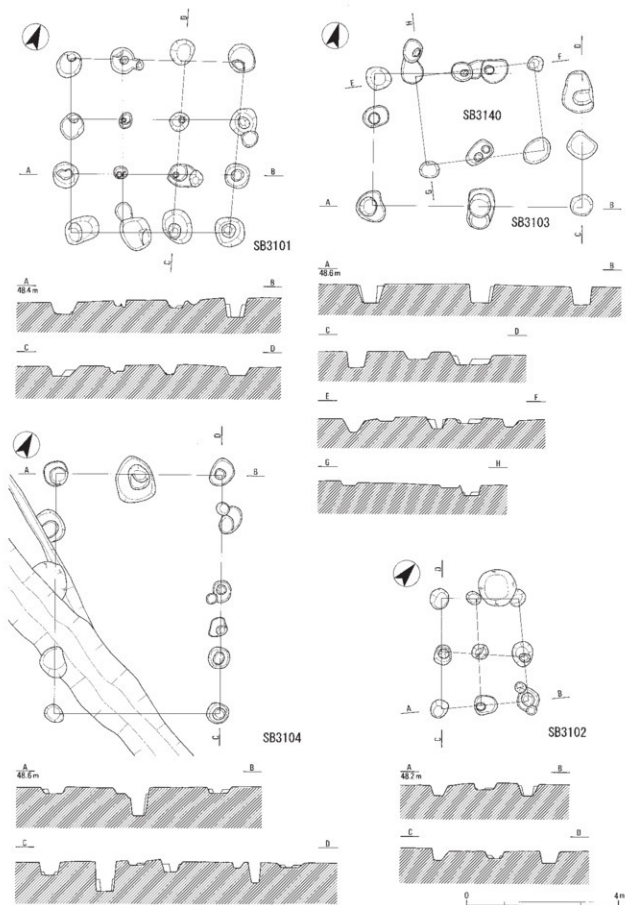
**SB3104** 調査区の西側で検出した桁行4間×梁行2間の南北棟である。建物の規模は、桁行が6.3m(1.5m+1.5m+1.8m+1.5m)、梁行が4.5m(2.25m×2間)程である。

**SB3105** 調査区の西側で検出した3間×3間の総柱建物。柱穴は円形で大ぶりである。柱間が不揃いではあるが、建物の規模はおおむね4.2m(1.4m×3間)四方程である。

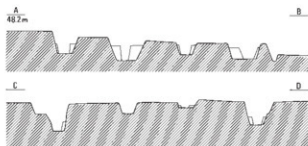
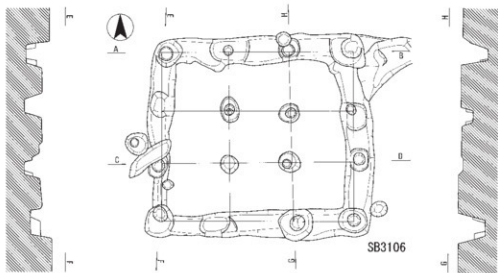
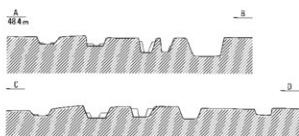
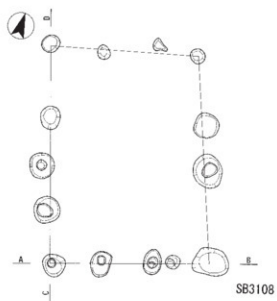
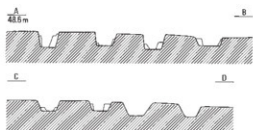
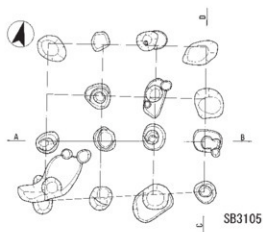
**SB3106** 調査区の西側で検出した3間×3間の総柱建物。側の部分の柱穴は布掘り、それ以外の柱穴は比較的浅い。建物の規模は桁行が5.1m(1.8m+1.5m+1.8m)、梁行が4.5m(1.5m×3間)程である。

**SB3108** 調査区の西側で検出した4間×3間の南北棟。建物の規模は桁行が5.7m(1.8m+1.2m+1.2m+1.5m)、梁行が4.2m(1.35m+1.35m+1.5m)程である。

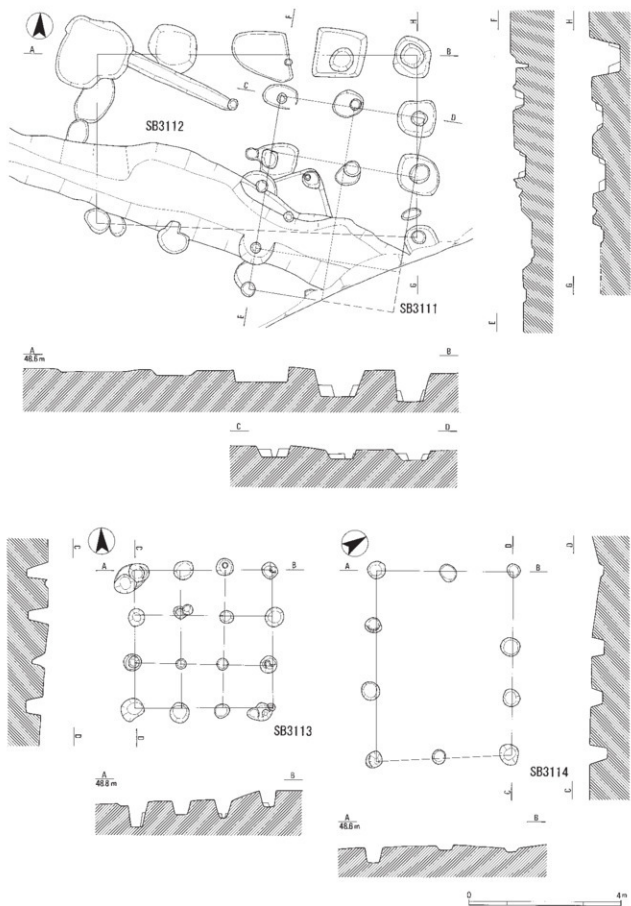
**SB3111** 調査区の西側で検出した。調査区南壁際



第31图 SB3101 • 3102 • 3103 • 3104 • 3140 (1 : 100)



第32图 SB3105 · 3106 · 3108 (1 : 100)



第33图 SB3111 • 3112 • 3113 • 3114 (1 : 100)

の柱穴を妻柱と考え、3間×2間の南北棟としたが、桁行はさらにのびる可能性がある。柱穴の掘形は方形で大きい。重複する2棟の掘立柱建物である可能性もある。

**SB3112** 調査区の西側で検出した桁行4間×梁行3間の東西棟。北側の柱穴は方形で巨大であるが、浅く、残りが悪い。東・西・南側の柱穴はあまり明確でない。柱穴から土師器甕類(191~193)、須恵器杯蓋(195)・杯身(196・197)が出土した。

**SB3113** 調査区の東側で検出した3間×3間の総柱建物。建物の規模は3.6m(1.2m×3間)四方である。柱穴から須恵器高杯(200)が出土した。

**SB3114** 調査区の東側で検出した3間×2間の東西棟。建物の規模は桁行が5.1m(1.5m+1.8m+1.8m)、梁行が3.6m(1.8m+1.8m)程である。

**SB3115・3144** 調査区の西側で検出した2棟の掘立柱建物。SB3115は3間×2間の南北棟の総柱建物。建物の規模は桁行が7.5m(2.1m+2.7m+2.7m)、梁行が6m(3m×2間)程である。

SB3144は2間×2間の南北棟の総柱建物。建物の規模は桁行が6.0m(3.2m+2.8m)、梁行が4.8m(2.1m+2.7m)である。

2棟の前後関係は不明であるが、同じ用途の建物の建替えである可能性が高い。

**SB3116** 調査区の西側で検出した3間×3間の総柱建物。建物の規模は、桁行が4.1m(1.3m+1.3m+1.5m)、梁行が3.6m(1.2m×3間)である。柱穴が大きい。

**SB3121・3125** 調査区の東側で検出した2棟の重複する掘立柱建物。SB3121は桁行3間×梁行2間の東西棟。南側と西側の柱穴が大きい。建物の規模は桁行が5.1m(1.5m+1.95m+1.65m)、梁行が3.9m(1.95m×2間)程である。柱穴のうち、「せ28ピット3」・「そ29ピット3」では根巻石が確認できた。

SB3125は2間×2間の建物。建物の規模は3.6m(1.8m×2間)四方である。

**SB3122** 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟。東側に1間の庇がつく。建物の規模は桁行が庇を含んで6.6m(1.8m+1.65m+1.5m+1.65m)、梁行が4.6m(2.7m+1.9m)である。北に

は堅穴住居として報告したSH3034の壁周溝がある。現地での所見では、SH3034とSB3122には前後関係があるとしているが、堅穴住居の壁周溝ではなく、掘立柱建物の南落ち溝などである可能性も残る。

**SB3124** 調査区の西側で検出した。2間×2間の総柱建物。建物の規模は4.2m(2.1m×2間)四方程である。東・西・南の三方向に浅い溝を伴う。

**SB3127** 調査区の東側で検出した。西側と南側の柱穴が不揃いであるが、桁行4間×梁行3間の南北棟とした。建物の規模は東側・北側でみると、桁行が6.3m(1.5m+1.2m+1.5m+2.1m)、梁行3.9m(1.35m+1.35m+1.05m)程である。

**SB3130** 調査区の東側で検出した桁行6間×梁行3間の東西棟。斜面に構築されているため、南側が流出してしまっている。そのため南側に関しては柱穴も部分的にしか残存していない。建物の規模は東側・北側でみると、桁行8.55m(1.2m+1.5m+1.5m+1.5m+1.5m+1.35m)、梁行4.8m(1.35m+1.5m+1.95m)程である。柱穴から須恵器杯蓋(201)が出土した。

**SB3132・3161** 調査区の東側で検出した重複する2棟の掘立柱建物。SB3132は桁行5間以上×梁行2間の南北棟。建物の規模は、桁行8.4m以上(1.8m+1.65m+1.65m+1.65m+1.65m)、梁行で4.5m(2.25m×2間)である。

SB3161は桁行4間×梁行3間の東西棟。南側の柱筋は攪乱により壊され、柱穴の残りが悪い。建物の規模は桁行が6.6m(1.8m+1.5m+1.5m+1.8m)、梁行が5.15m(1.95m+1.5m+1.7m)程である。

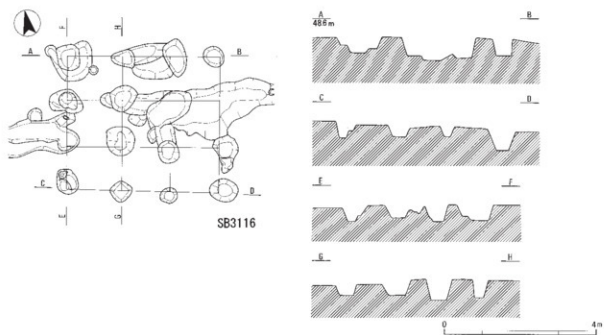
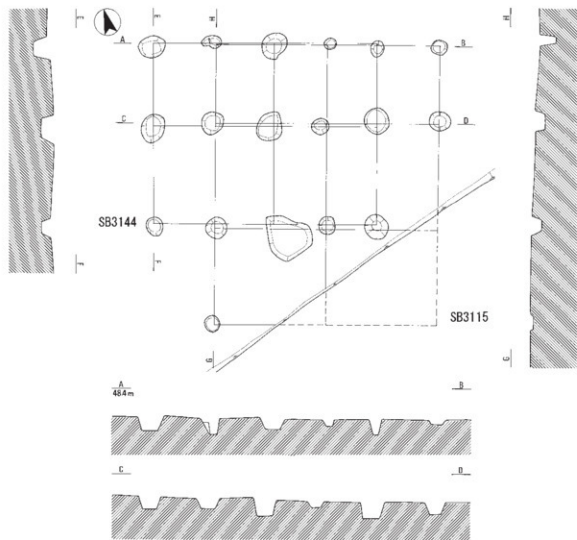
両者の前後関係はSB3132~3161である。

**SB3137** 調査区の西側で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟。建物の規模は桁行5.85m(1.65m+1.95m+2.25m)、梁行3.75m(1.65m+2.1m)程である。柱穴から須恵器杯身(202)が出土した。

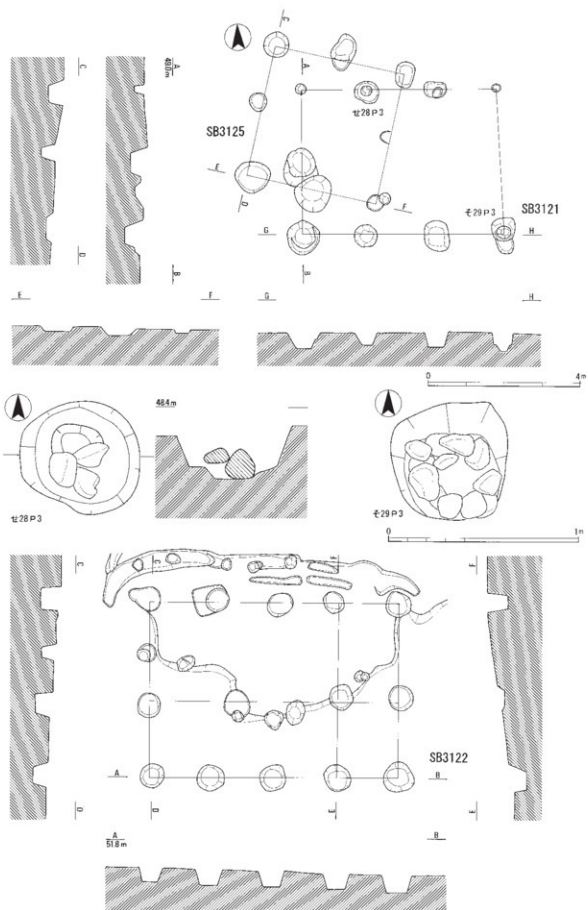
**SB3139** 調査区の西側で検出した。西側が溝によって壊されているため、柱穴を確認できなかったが、桁行3間×梁行2間の東西棟と思われる。

**SB3141** 調査区の西側で検出した桁行3間×梁行2間の総柱の南北棟。南側が攪乱により壊されているが、比較的大きな柱穴を確認したので、これを妻柱とした。建物規模は桁行が4.7m(1.55m+1.55m

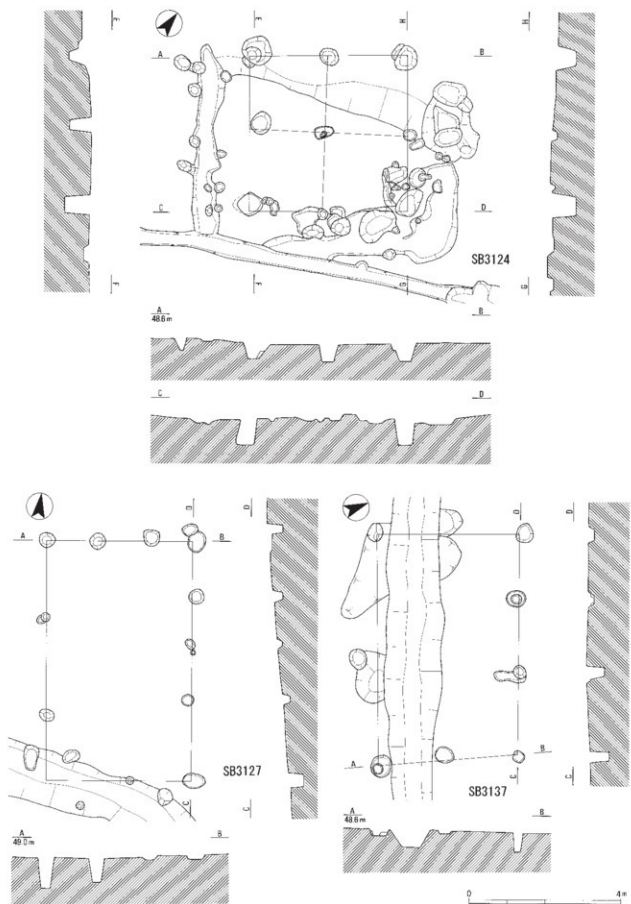




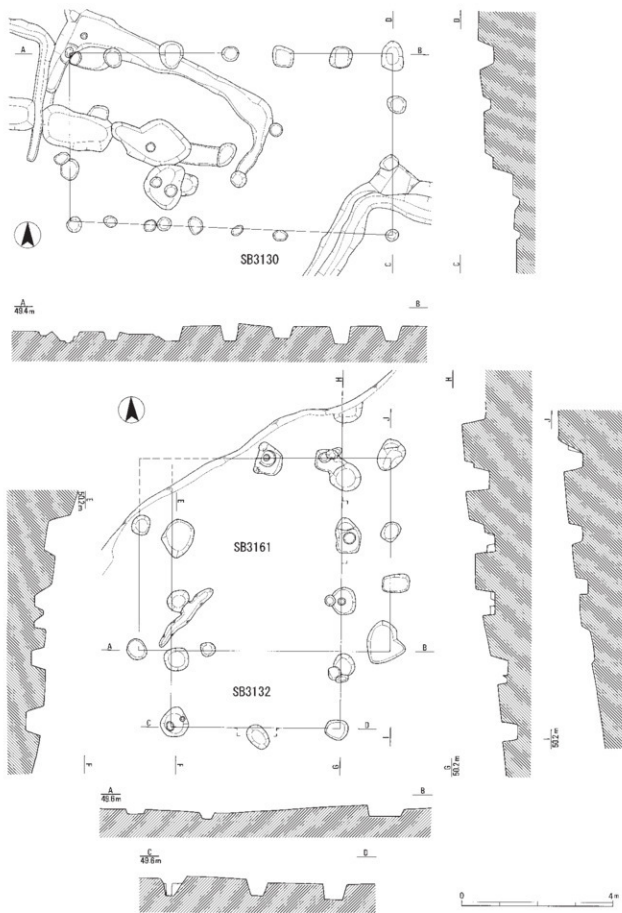
第34图 SB3115·3144·3116 (1:100)



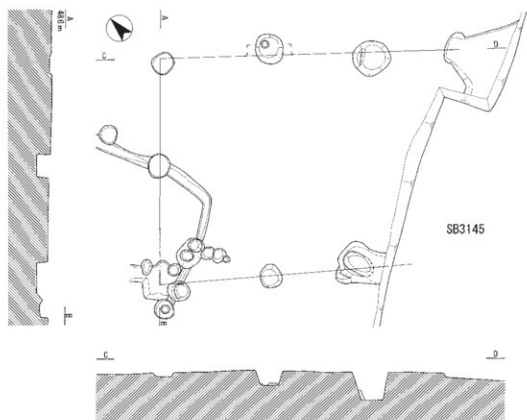
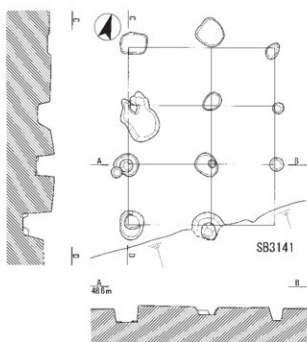
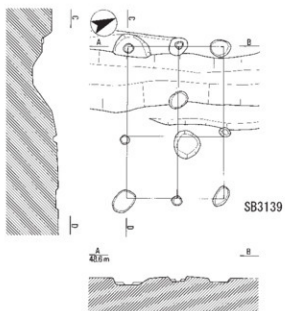
第35図 SB3121・3125・3122 (1:100、1:20)



第36图 SB3124・3127・3137 (1:100)

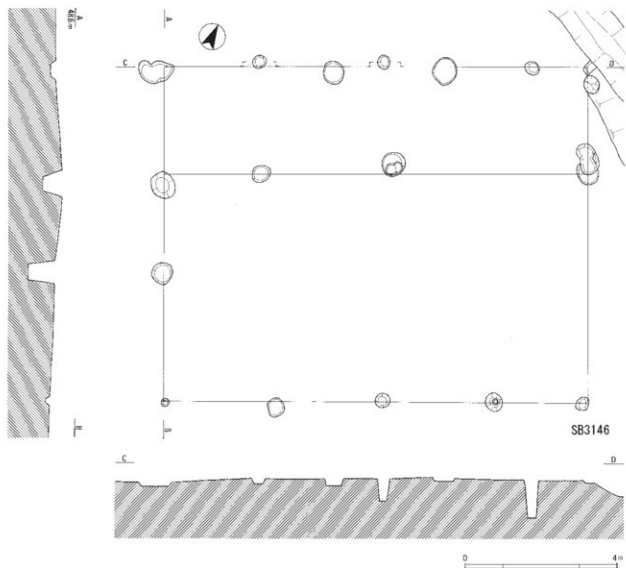
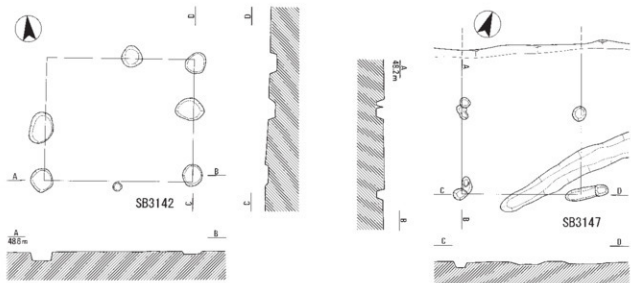


第37图 SB3130・3132・3161 (1:100)



第38図 SB3139・3141・3145 (1:100)





第39図 SB3142・3147・3146 (1 : 100)

+1.6m)、梁行が3.9m (2.2m+1.7m) 程である。

SB3142 調査区の西側で検出した桁行2間×梁行2間の東西棟。建物規模は桁行は3.9m (1.95m×2間)、梁行は3.2m (1.8m×1.6m) である。

SB3145 調査区の西側で検出した桁行3間以上×梁行2間の東西棟。他の建物と比較すると、柱間が長く、柱穴も大きい。建物規模は桁行が7.8m (2.7m+3.0m+2.1m) 以上、梁行が6m (3m×2間) 程である。

SB3147 調査区の西側で検出した桁行2間以上×梁行1間の南北棟。妻柱は重複する溝によって壊されている可能性が高い。建物の規模は桁行3.9m以上、梁行3.2mである。

SB3146 調査区の西側で検出した。桁行4間×梁行2間の東西棟で、北側に庇がつく。北側と西側、南東側の柱筋が明瞭であったので建物とした。建物規模は、桁行が11.4m (3.0m+3.0m+3.0m+2.4m)、梁行が5.6m (3.2m+2.4m) 程である。柱穴から須恵器杯蓋 (203)、短頸甕 (204) が出土した。

SB3148 調査区の西側で検出した桁行2間以上×梁行2間の東西棟。建物の規模は桁行が5.6m (3.0m+2.6m) 以上、梁行が3.6m (1.8m+1.8m) 程である。

SB3150 調査区の東側で検出した桁行4間×梁行1間の南北棟。建物規模は桁行が7.8m (2.55m+1.5m+1.8m+1.95m)、梁行が3.45mである。

SB3151 調査区の東側で検出した2間×2間の建物。建物の規模は3.6m (1.8m×2間) 四方程であろうか。

SB3152 調査区の東側で検出した1間×1間の建物。一応掘立柱建物とするが、削平を受け、主柱穴のみが残った堅穴住居かもしれない。

SB3153 調査区の東側で検出した桁行4間×梁行1間の南北棟。建物の規模は桁行が5.25m (1.35m+1.2m+1.35m+1.35m)、梁行が2.1mである。

SB3154 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟。建物規模は桁行4.5m (1.35m+1.65m+1.5m)、梁行3.75m (1.5m+2.25m) 程である。

SB3155 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行1間の東西棟。建物規模は桁行が6.6m (1.8m+2.7m+2.1m)、梁行が3.0mである。

SB3156 調査区の東側で検出した桁行2間×梁行2間の東西棟。建物規模は桁行3.6m (1.5m+2.1m)、梁行3.0m (1.8m+1.2m) である。

SB3157 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟。建物規模は桁行が3.45m (0.9m+0.9m+1.65m)、梁行が3m (1.2m+1.8m) 程である。

SB3158 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行3間の総柱の南北棟。建物規模は桁行が5.7m (1.8m+2.4m+1.5m)、梁行が5.1m (2.4m+1.35m+1.35m) 程である。

SB3159 調査区の東側で検出した桁行3間×梁行2間の南北棟。建物規模は桁行が5.1m (1.5m+1.8m+1.8m)、梁行が3.6m (1.2m+2.4m) 程である。

SB3160 調査区の東側で検出した桁行2間×梁行2間の東西棟。建物規模は桁行が4.8m (1.8m+3.0m)、梁行が3.6m (1.5m+2.1m) 程である。

SB3162 調査区の東側で検出した2間×2間の総柱建物。建物の規模はおおむね3.75m四方と思われる。

SB3163 調査区の東側で検出した。北側にかなり大きな柱穴の列があり、南東の隅に1ヶ所の柱穴を確認できる。南西の隅になる場所には擾乱があり、南側の柱穴は後世の溝により壊されていると判断し、建物とした。そうなると桁行3間×梁行1間の東西棟となる。

SB3164 調査区の東側で検出した桁行4間以上×梁行2間の南北棟。建物の規模は桁行が5.4m (1.8m+1.2m+1.2m+1.2m) 以上、梁行が3.45m (2.25m+1.2m) 程である。

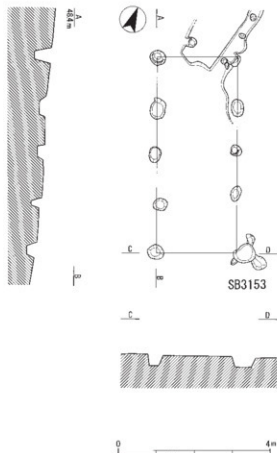
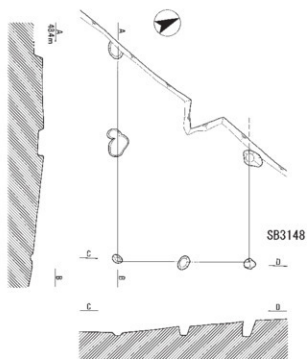
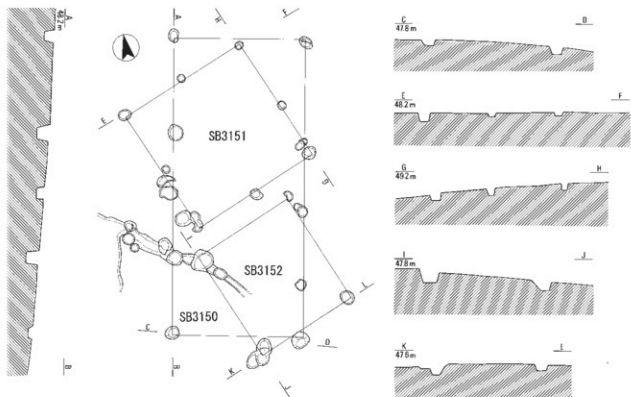
SB3171 調査区の西側で検出した桁行2間×梁行1間の東西棟。建物の規模は桁行が3.6m (1.8m×2間)、梁行が2.4mである。

SB3173 調査区の西側で検出した桁行2間以上×梁行2間の総柱の南北棟。建物規模は桁行が4.5m (1.8m+2.7m) 以上、梁行が4.2m (2.1m×2間) 程である。

### (3) 井戸

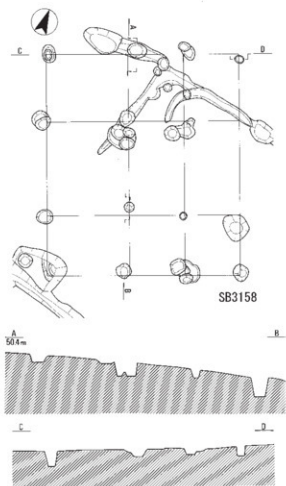
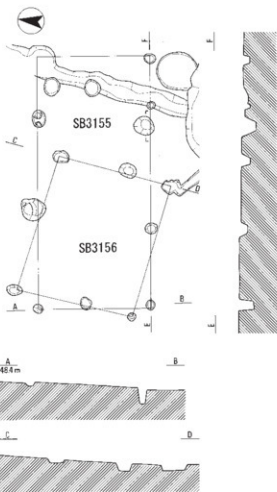
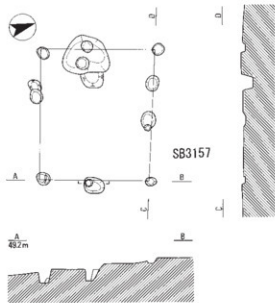
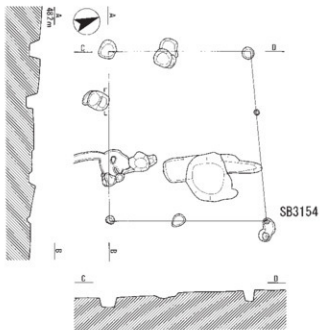
当該時期の井戸は2基確認した。いずれも調査区中央に造られている。この部分には浅い谷があり、ここに集まる水を溜めていたのであろう。

SE3264 直径1.3m、深さ0.7mの素掘りの井戸。埋

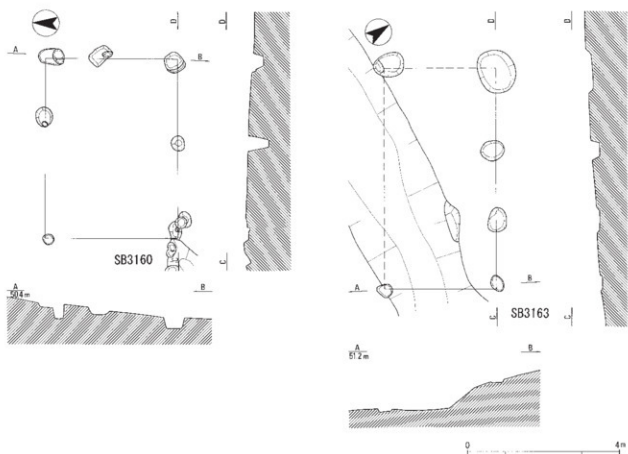
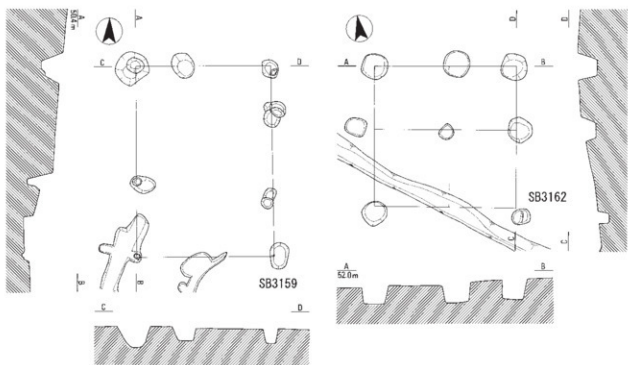


第40图 SB3148 • 3150 • 3151 • 3152 • 3153 (1 : 100)

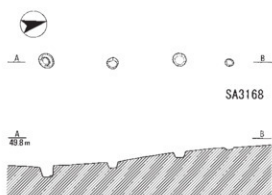
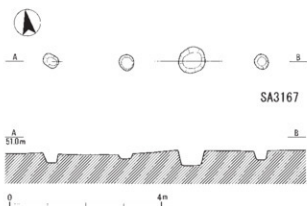
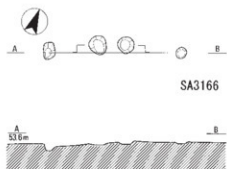
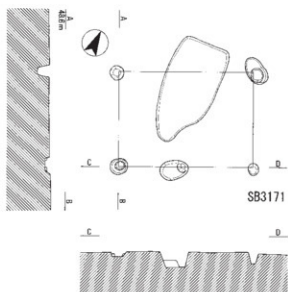
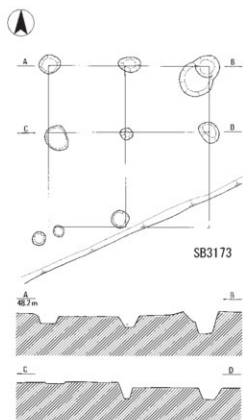
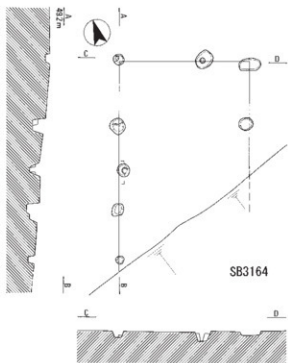




第41图 SB3154 • 3155 • 3156 • 3157 • 3158 (1 : 100)



第42图 SB3159 • 3160 • 3162 • 3163 (1 : 100)



第43图 SB3164 · 3173 · 3171 · 柱列 (1 : 100)

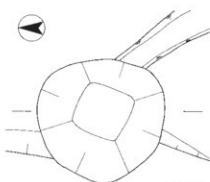
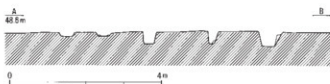


SA3165



SA3169

SA3170



SE3264

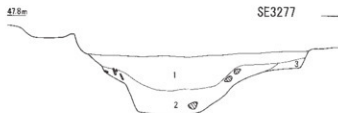


【SE3264】

1. 7.5YR3/2 黒褐色土
2. 10YR3/4 暗褐色土
3. 2.5YR4/4 赤-7'褐色土
4. 2.5Y4/1 黄灰色土



SE3277



【SE3277】

1. 7.5YR4/3 褐色土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
3. 10YR5/6 黄褐色土

第44図 柱列・SE3264・3277 (1:100、1:40)

土の最下部には、腐植土が薄く堆積していた。埋土から灰軸陶器の長頸壺(236)が出土した。

SE3277 長径2.75m・短径1.8m、深さ0.9mの素掘りの井戸。埋土から土師器甕類(237・244)・皿(238)、須恵器杯身(240・241・243)・横瓶(242)

## 2 遺物

### (1) 竪穴住居出土遺物

#### ①SH3005出土遺物(52・53)

須恵器杯蓋(52)と土玉(53)が出土した。52は猿投産である可能性が高い。H-15式<sup>3</sup>と考えられる。

#### ②SH3006出土遺物(54・55)

土師器長胴甕(54)と須恵器硯(55)がある。55はTK209~217古段階併行期のものと思われる。

#### ③SH3007出土遺物(56)

56は弥生時代後期の竪穴住居に混入していた土師器長胴甕である。頸部が屈曲し端部に面を持たない。

#### ④SH3008出土遺物(57~59)

土師器甕(57)と須恵器杯蓋(58)・杯身(59)がある。57は頸部の屈曲が緩く、端部に面を持たない。58は猿投産のH-15式と思われる。

#### ⑤SH3009出土遺物(60・61)

60は長胴甕か。口縁端部外側に面を持つ。61は小型の鍋か。

#### ⑥SH3010出土遺物(62~85)

量的にも質的にも最もまとまりがある。  
土師器 図示したものはすべて甕類(62~71)である。62・63・71は竪穴住居の埋土から、64~70は竪の埋土から出土した。いずれのものも頸部の屈曲はゆるく、あまり肥厚しない。口縁端部はつまみ上げられるもの(63・65・70)と、そうでないものがある。64は小型の甕。体部外面の下半にはヘラケズリが施される。

須恵器 蓋(72~75)、高杯(76~80)、短頸壺(81)、瓶か鍋(82)と器種のバラエティも豊かである。72・74・75はいずれも美濃須恵産のものと胎土が似ている。75は杯Gの蓋か。高杯のうち78~80は猿投産。78も猿投産に近い。77・78はH-17式、79・80はH-44式。80の透かしは一応四方としたが、三方になるかもしれない。短頸壺(81)も猿投産。おおむね7世紀代のものであろう。

が出土した。

#### (4) 柱列

6ヶ所の柱列を検出した。時期不明の遺構であるが、一応古代のものとした。

石製品・鉄製品 竪支柱(83)、鉄鎌(84)、鉄鎌(85)がある。

#### ⑦SH3011出土遺物(86)

86は土師器甕。頸部が屈曲し、頸部の内面は若干肥厚する。口縁短部はつまみ上げるように終わる。

#### ⑧SH3012出土遺物(87~91)

土師器甕(87・88)・高杯(89)、須恵器杯身(90)・器台(91)がある。88は小型の甕。竪の埋土から出土した。90の杯身は主柱穴の埋土から出土した。

#### ⑨SH3013出土遺物(92)

92は主柱穴から出土した須恵器の杯蓋。7世紀前半のものである。

#### ⑩SH3016出土遺物(93~99)

竪穴住居出土遺物の中ではやや古い様相を示す。土師器甕(93)は頸部の屈曲が緩やかで、頸部内面はあまり肥厚しない。須恵器杯蓋(95)は猿投産の可能性が高い。そうなる7世紀前半のものか。須恵器杯身(96)の形状は、渡邊博人氏のご教示によれば、西濃地域(大垣から長良川流域)から出土するものに類例が多い。ただし胎土などは若干異なる。

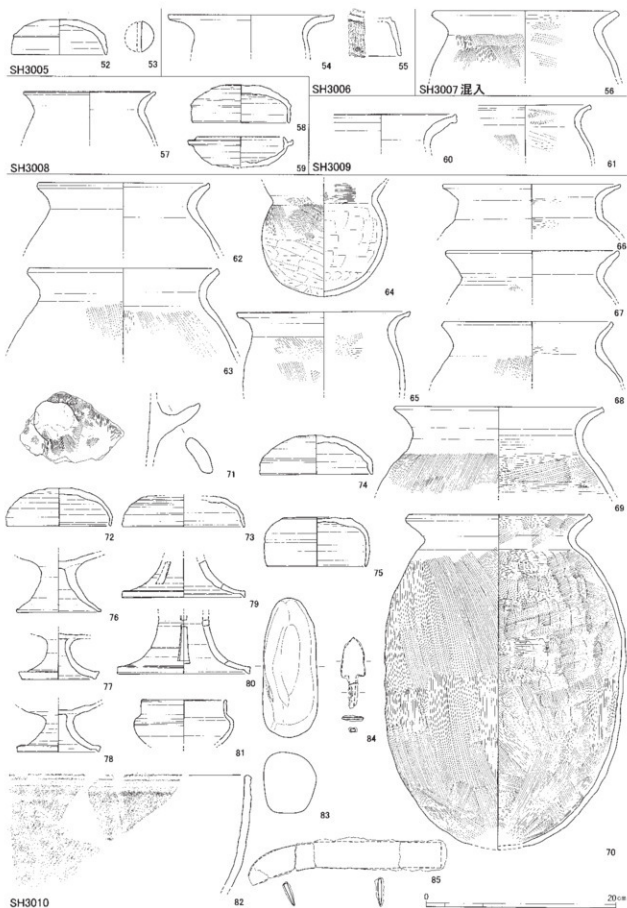
97は柄か短頸壺の口縁部小片。鉄鉢の可能性もある。畿内系で7世紀前半のものと思われる。98も同じく畿内系で7世紀前半のものである。99は砥石。貯蔵穴の埋土から出土した。

#### ⑪ SH3018出土遺物(100~101)

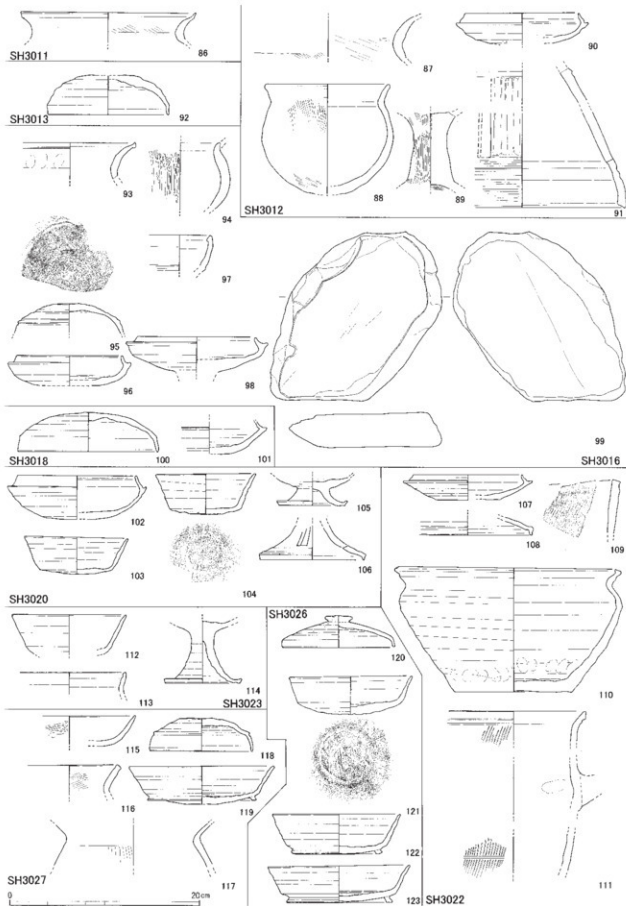
須恵器杯蓋(100)と杯身(101)がある。いずれも7世紀前半のものである。

#### ⑫ SH3020出土遺物(102~106)

出土遺物の時期幅は広い。102から104は須恵器の杯身。102は猿投産の6世紀末のものと思われる。103・104も猿投産。103は7世紀後半、104は7世紀末から8世紀初頭のものである。高杯(105・106)のうち、105は猿投産の7世紀後半のもの、106は7世紀前半のものと思われる。



第45図 出土遺物② (1:4)



第46図 出土遺物③ (1:4)

⑬SH3022出土遺物 (107~111)

この遺構も出土遺物の時期幅が広い。杯身(107)は在地産か。杯蓋(108)は8世紀中葉まで降る。109・111は須恵器の甗。

⑭SH3023出土遺物 (112~114)

112は須恵器の杯身。短頸壺(113)は猿投産。7世紀代のもと思われる。高杯(114)も猿投産で、7世紀後半のもと思われる。

⑮SH3026出土遺物 (120~123)

竪穴住居出土遺物の中では新しい様相を示す。120の内面にはヘラ記号らしき線刻がある。須恵器杯身(121~123)のうち121は須恵器の杯身。猿投産のNN-288式とほぼ併行する時期のもと思われる。122は猿投産で7世紀末~8世紀初頭のもの。123は美濃須恵産に似る。そうするとこれも7世紀末~8世紀初頭のものか。

⑯SH3027出土遺物 (115~119)

土師器 115は精製の杯。表面は磨耗しているが、外面にわずかながらミガキが残る。116・117は甗。いずれも頸部が「く」字状に屈曲する。

須恵器 118は杯蓋。猿投産でH-15式のもと思われる。119は杯身。これも猿投産。7世紀末のもと思われる。

⑰SH3028出土遺物 (124~131)

土師器 124・125は甗。いずれも口縁端部をつまみ上げるようにおわる。125のほうが頸部の屈曲がゆるい。126・127は把手。器高が低く、口径の広い鍋のものか。

須恵器 杯蓋(128)、杯身(129・130)、壺(131)がある。130は猿投産。H-15式のもと思われる。

⑱SH3030出土遺物 (132)

132は砥石。上面と側面に使用痕跡がある。

⑲SH3031出土遺物 (133~153)

土師器 すべて煮炊具である。いずれも頸部が「く」字状に屈曲するが、137のように頸部の内面が肥厚したり、138・141のように口縁端部がつまみ上げられているものは少ない。

須恵器 図示した杯蓋・杯身(143~147)はすべて猿投産。おおむねH-15~I-71式のものである。148は壺の蓋。これも猿投産でI-17式のもと考えられる。

高杯(149~152)のうち、149は6世紀後半代のものである。151・152は猿投産。151はI-17式、152はH-101式と思われる。153は猿投産の短頸壺。7世紀後半のもと考えられる。

⑳SH3032出土遺物 (154~157)

土師器甗(154)、把手(155)、須恵器杯身(156)・杯蓋(157)がある。甗(154)は頸部が屈曲し、口縁端部がつまみ上げられるが、頸部の内面は肥厚しない。杯身(156)・杯蓋(157)は口径が狭く、器高が高い。

㉑SH3033出土遺物 (158~160)

土師器甗(158)、須恵器杯蓋(159・160)がある。土師器甗(158)の頸部の屈曲はゆるやかで、器壁が薄い。須恵器杯蓋のうち、159は在地産か。160は猿投産で8世紀後半のもと思われる。

㉒SH3034出土遺物 (161~162)

須恵器杯蓋(161)と壺底部(162)がある。162の底部外面にはヘラ記号がある。

㉓SH3037出土遺物 (166~173)

土師器甗・鍋(166~168・171~173)、須恵器杯蓋(169)・杯身(170)がある。土師器の甗の頸部から口縁部の形態は様々である。171は貯蔵穴の埋土から出土した。173は頸部内面に稜を持つ。須恵器杯身(170)も貯蔵穴の埋土から出土した。畿内系に近く、おおむねTK217併行期のもと思われる。

㉔SH3040出土遺物 (163・164)

須恵器杯蓋(163)と土師器甗(164)がある。163は猿投産で8世紀後半のもと思われる。164は頸部内面がやや肥厚する。

㉕SH3041出土遺物 (174~186)

比較的まとまった量の遺物が出土している。

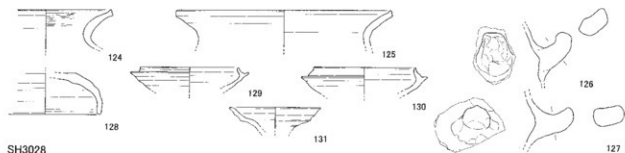
土師器は大部分が煮炊具の甗・鍋(174~182)である。頸部から口縁部にかけての形状は様々である。183は壺か鉢。底部に焼成前の穿孔がある。

須恵器には杯蓋(184)・杯身(185~188)・高杯(189)がある。185・187は猿投産。H-15式のものである。188は猿投産ならばI-101式か。畿内系にも似る。

㉖SH3044出土遺物 (165)

土師器甗(165)がある。表面は風化し調整などは観察困難である。



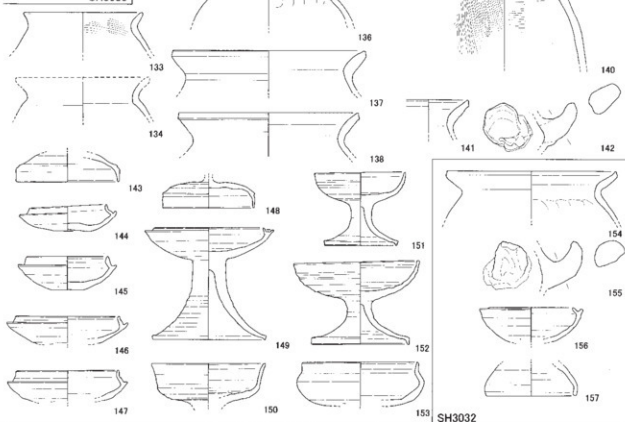


SH3028

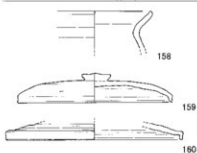


SH3030

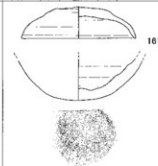
SH3031



SH3032

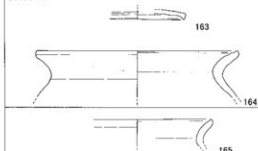


SH3033

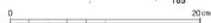


SH3034

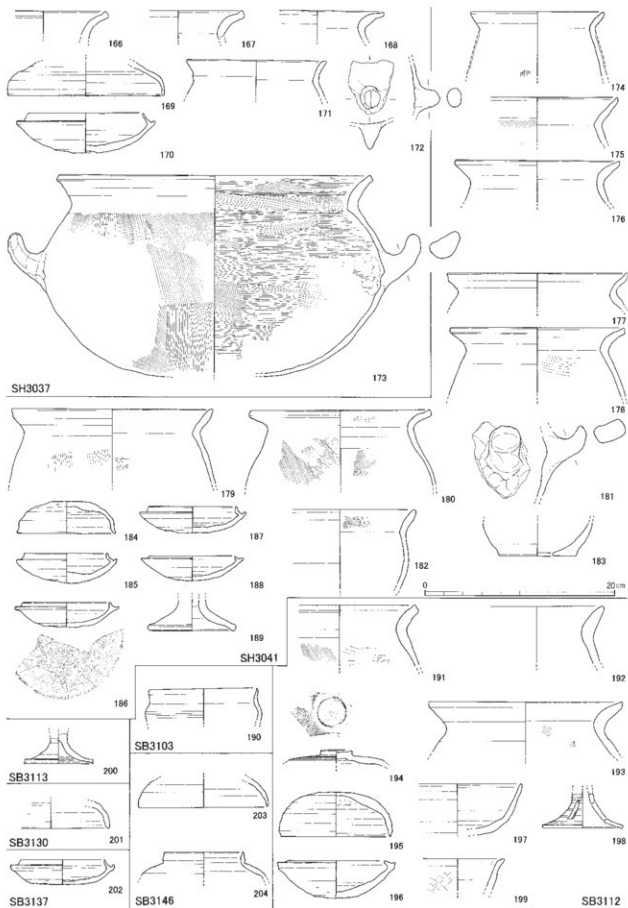
SH3040



SH3044



第47図 出土遺物④ (1:4)



第48图 出土遗物⑤ (1:4)

## (2) 掘立柱建物柱穴出土遺物 (190~204)

### ①SB3103出土遺物 (190)

190は須恵器の短頸壺。在地産か。

### ②SB3112出土遺物 (191~199)

掘立柱建物出土の遺物の中では最もまとまりがある反面、遺構の重複もあるため混入遺物である可能性を排除できない。

**土師器** 図示したものはすべて煮炊具である。個体差はあるものの、191~193とも頸部が屈曲し、頸部内面が肥厚する。

**須恵器** 194は長脚の高杯の蓋か。杯蓋(195)は口縁端部内面に面どりがあり畿内系のもと思われる。杯身(196)も畿内系のものか。195・196とも6世紀末から7世紀初めのものと思われる。199の外面の調整は不明瞭である。

### ③その他掘立柱建物柱穴出土土器 (200~204)

いずれも1点ないし2点のみの出土であり、この遺物のみで建物の時期を決定するには不安があるが、いずれの遺物も比較的古い様相を示す。

## (3) 土坑出土遺物

### ①SK3202出土遺物 (205・206)

205は壺の底部。外面にヘラ記号がある。

### ②SK3208出土遺物 (207)

207は杯蓋。天井部が比較的フラットである。

### ③SK3212出土遺物 (210~212)

210は土師器甕。頸部の内面はあまり肥厚しない。211は須恵器の長頸瓶か杯の蓋。7世紀中葉のものか。212は磨耗が激しく、調整などは判然としなない。弥生時代の遺物が混入したものなのかもしれない。

### ④SK3213出土遺物 (216)

216は土師器長胴甕。頸部内面が肥厚する。体部は肩が張らず、やや直線的である。

### ⑤SK3214出土遺物 (208)

208は須恵器瓶。7世紀代のもと思われる。

### ⑥SK3215出土遺物 (213~215)

土師器はいずれも甕類。須恵器杯身(215)は猿投産。H-44式のもと思われる。

### ⑦SK3226出土遺物 (217~220)

須恵器杯蓋(218)は7世紀末のものである。在地産のものか。杯身のうち220はこれよりも古く、

7世紀初めのものか。

### ⑧SK3229出土遺物 (209)

209は須恵器高杯。猿投産でI-17式と思われる。

### ⑨SK3231出土遺物 (221~224)

図示した土師器はすべて煮炊具である。甕(222・223)はともに頸部の屈曲が強く、口縁端部に面を持つ。須恵器の杯身(224)は猿投産。H-15式のものと思われる。底部外面にヘラ記号がある。

### ⑩SK3250出土遺物 (225・226)

225は須恵器杯身。猿投産で6世紀後半のもと思われる。

### ⑪SK3255出土遺物 (227~229)

227は須恵器杯蓋。猿投産でH-44式と思われる。外面の一部に赤色顔料(ベンガラ<sup>®</sup>)が塗布される。229の須恵器杯蓋は畿内系の影響を受けた在地産か。MT15~TK46併行期のもと思われる。

### ⑫SK3260出土遺物 (230)

230は須恵器の杯蓋。7世紀末ごろのものか。

### ⑬SK3272出土遺物 (231)

231は須恵器の壺である。

### ⑭SK3282出土遺物 (232~234)

232は精製の土師器杯。表面の調整は不明瞭である。

### ⑮SK3284出土遺物 (235)

235は須恵器の杯蓋。猿投産で8世紀後半のもと思われる。

## (4) 井戸出土遺物

井戸出土遺物は全体の中では、新しい時期のものが多い。

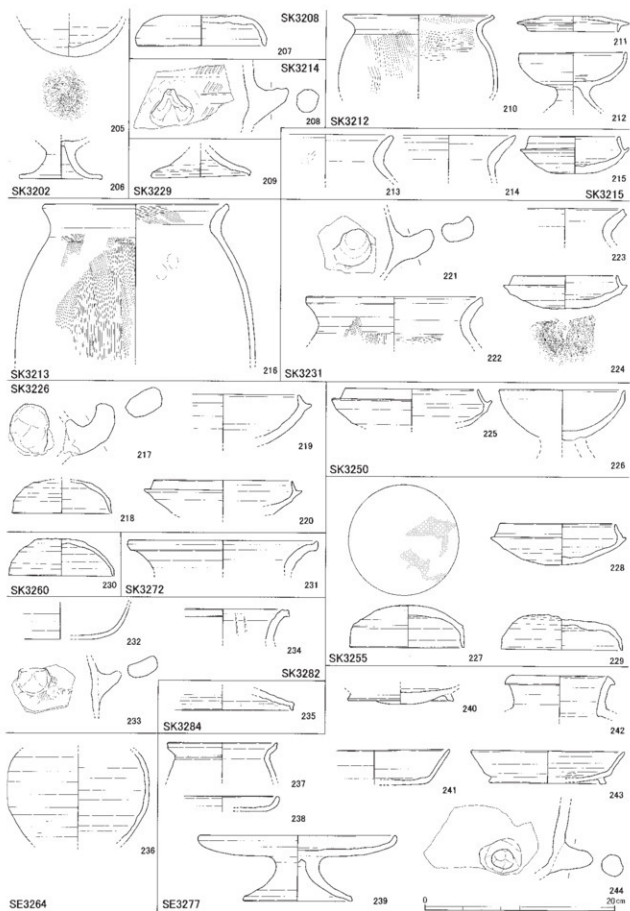
### ①SE3264出土遺物 (236)

図化できたのは、灰陶陶器の長頸壺(236)のみである。

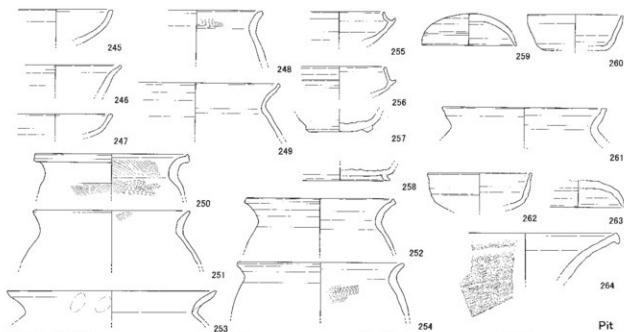
### ②SE3277出土遺物 (237~244)

**土師器** 土師器には甕(237)、皿(238)、高杯(239)、把手(244)がある。237は器壁が磨耗し、調整は不明瞭である。238・239は精製品。橙色に発色する。

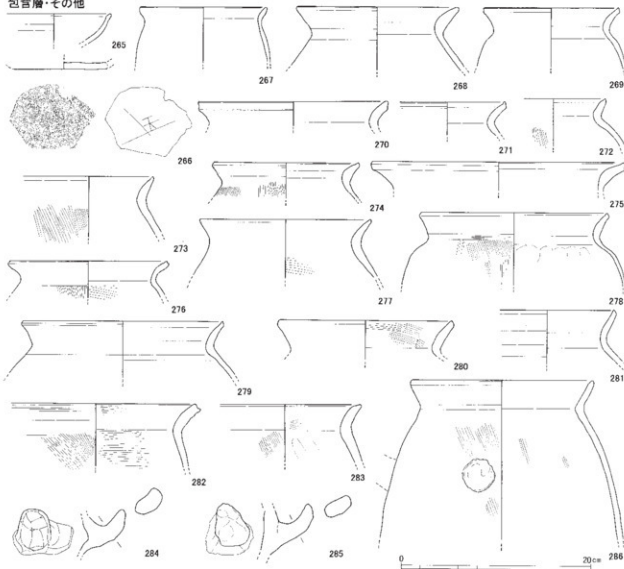
**須恵器** 杯身(240・241・243)、横瓶(242)がある。240・242・243は猿投産。240は8世紀前半、243は8世紀代のもと思われる。



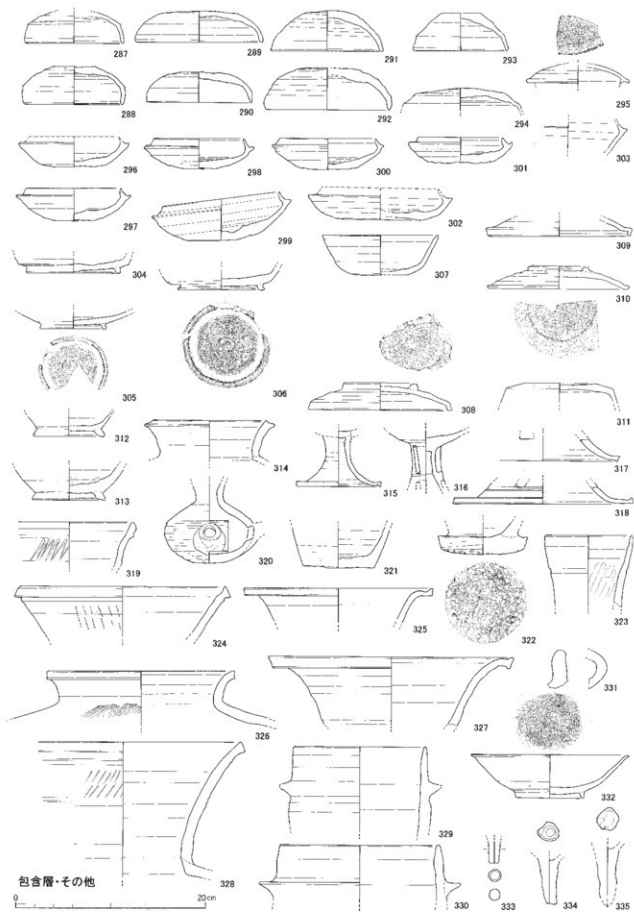
第49図 出土遺物⑥ (1:4)



包含層・その他



第50図 出土遺物⑦ (1:4)



第51図 出土遺物⑧ (1:4)

#### (5) 柱穴出土遺物 (245~264)

掘立柱建物としてまとまらなかった柱穴から出土した遺物である。

**土師器** 245~247は精製の杯・皿。いずれも橙色に発色している。248~254は甕。250のように頸部の内面が肥厚し、口縁端部がつまみ上げられるものがあるが、頸部から口縁部にかけての器壁が薄いものがほとんどである。

**須恵器** 255・256・258・262・264は猿投産である。255はH-15式、256はH-44式、258は7~8世紀代、262は7世紀前半のものである。264も猿投産。表面に黄土を塗付する。時期は7世紀後半のものか。260は在地産である可能性がある。

#### (6) 包含層出土遺物 (265~335)

**土師器** 265・266は精製の杯・皿。265は口縁端部の内面に面を持つ。266の底部外面には線刻がある。267から286は甕・長胴甕・鍋・甌などの煮炊具。形態は様々であるが、頸部内面が肥厚するもの(268・274・277)や口縁端部がつまみ上げられるもの(269・270・271・275・279)など比較的古い要素を持つものが多い。286の体部には剥離痕跡がある。

**須恵器・陶器** 土師器と同様に古い要素を持つものが主体となる。杯蓋(287~295)のうち287は猿投産でH-15式。295のみ返りがつく。

杯(296~311)には新しいものもみられる。300・302は畿内系のものに似る。いずれも7世紀中葉~後葉のものか。304は腰に稜を持つ。老洞窟出土ものに類似がある<sup>5)</sup>。306は猿投産の9世紀代のものか。307も猿投産。

比較的新しい時期の蓋(308~311)のうち、308は猿投産の可能性がある。310は灰軸陶器。311は猿投産で8世紀後半代のもと思われる。

312・313は長頸甕の底部、314は甕の口縁部である。横瓶かもしれない。高杯(315~318)のうち315は猿投産。I-41式のもと思われる。320は甕。猿投産の7世紀初めのもと思われる。

322は9世紀代の鉢。326の甕も猿投産。表面に黄土を塗付している。328も猿投産、7世紀代のもと思われる。329・330は土管。332は灰軸陶器の碗である。

**製塩土器** 図示した製塩土器はすべて知多式のものである。すべて4類型のもと思われる<sup>6)</sup>。

## V 中世・近世の遺構と遺物

### 1 遺 構

#### (1) 掘立柱建物

**SB3126** 調査区の東側で検出した4間×4間の総柱建物。概ね7.6m四方である。柱穴から古瀬戸後期の平椀が出土した。ほぼ同時期の井戸SE3290と重複するが、両者の前後関係はSE3290→SB3126となる。

**SB3138** 調査区の西側で検出した桁行3間×梁行2間の総柱の東西棟。南側が覆土により破壊されており、建物として明確なのは西側・北側の柱筋である。建物の規模は桁行が6.6m(2.2m+2.0m+2.0m)、梁行が4.8m(2.4m×2間)程である。柱穴からは古代の遺物しか出土していないが、区画溝SD3301・3304と方位が一致することから中世の掘立柱建物とした。

**SB3143・3149** 調査区の東側で検出した2棟の重複する掘立柱建物。SB3143は桁行2間×梁行2間の小規模な建物。柱穴から土師器属が出土した。

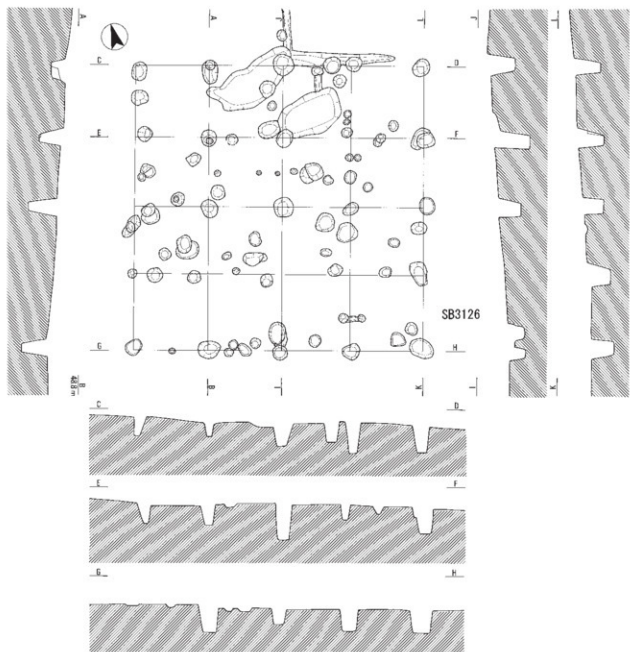
SB3149は桁行3間×梁行3間の建物。柱穴から古瀬戸後IV期新段階の搦鉢・土師器皿が出土した。

**SB3174** 調査区の西側で検出した桁行5間×梁行1間の東西棟である。建物規模は桁行が4.8m(0.75m+0.75m+1.2m+1.0m+1.1m)、梁行が1.05mである。道路道構に面し、方位が同一であるので中世の掘立柱建物とした。

**SB3175** 調査区の西側で検出した桁行4間以上×梁行3間以上の総柱建物。柱穴からは古代の遺物しか出土していないが、区画溝SD3301・3304と方位が一致することから中世の掘立柱建物とした。

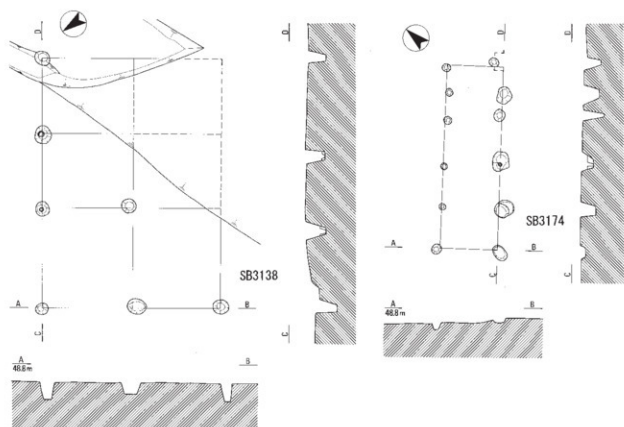
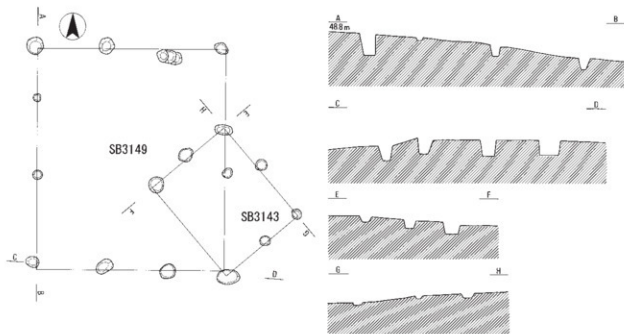
#### (2) 井戸

**SE3247** 調査区の中央よりで検出した。長径2.1m・短径1.6m、深さ2m程の楕円形の井戸。井戸底に



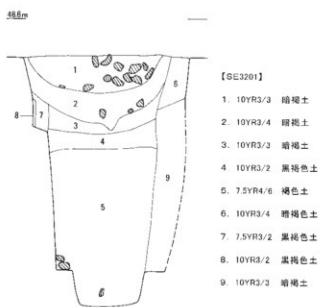
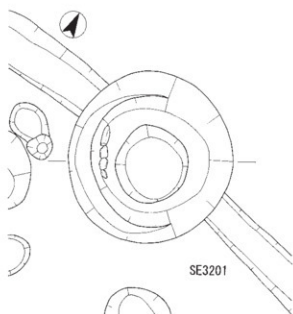
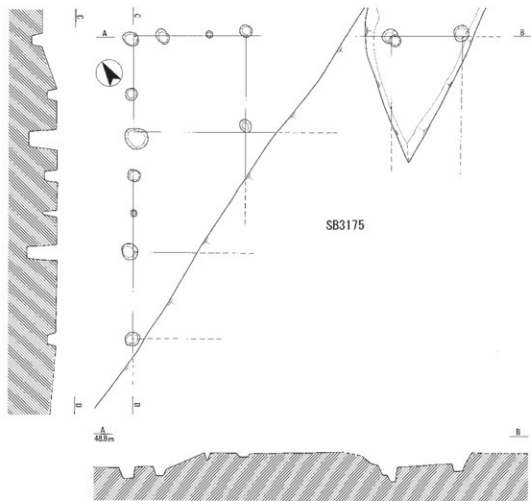
第52図 SB3126・3143・3149 (1:100)



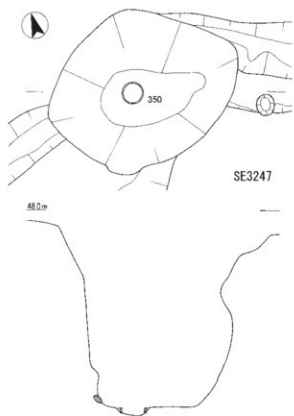


第53图 SB3138·3174 (1:100)

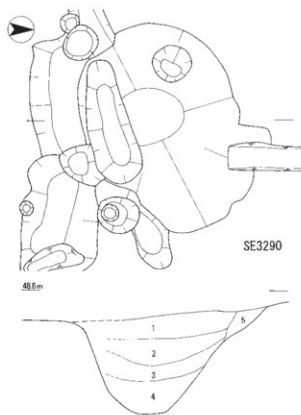




第54图 SB3175·SE3201 (1:100, 1:40)



SE3247



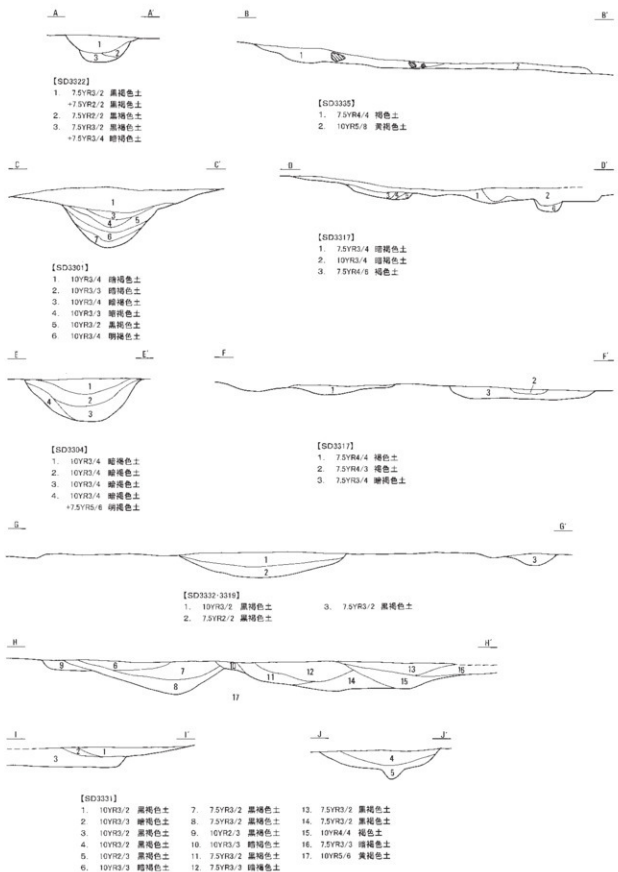
SE3290

【SE3290】

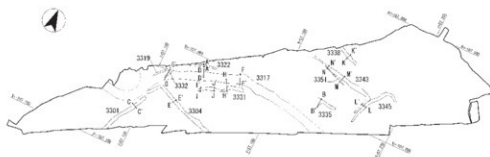
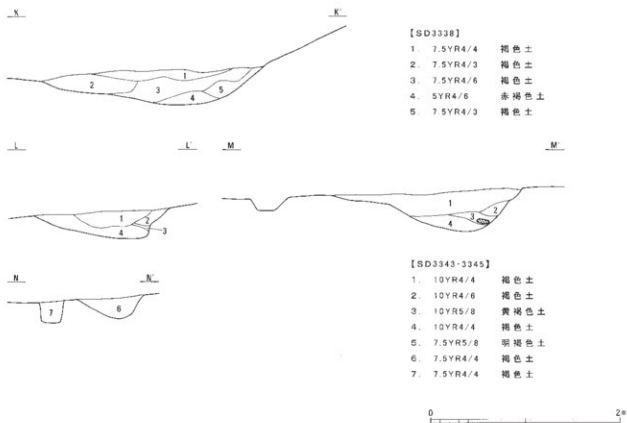
1. 10YR4/6 褐色土
2. 7.5YR4/5 褐色土
3. 10YR4/5 にぶい黄褐色土
4. 10YR4/4 褐色土
5. 7.5YR5/5 暗褐色土

0 2m

第55図 SE3247・3290 (1:40)



第56图 沟土层断面图① (1:40)



第57图 溝土層断面图② (1:40)

は曲物（350）が据えられている。このほか埋土から灰輪陶器（341）、瀬戸美濃製品の水注（342）・搦鉢（348）、山茶碗（343・344）、常滑製品の片口鉢（345～348）、砥石（349）が出土した。遺構の廃絶時期はおおむね15世紀後半と考えられる。

SE3290 調査区の東側で検出した。長径2.2m・短径1.6m、深さ1m程の楕円形の井戸である。

SE3201 調査区の西側で検出した。直径1.8m、深さ2.7m程である。西側の底近くに1～2段の石積が残る。また、埋土の最下層から大量の礎が出土したので石組の井戸と考えられる。埋土から出土した常滑甕片（378）と平瓦片（376）が、SD3304出土のものと同接合できた。区画溝SD3301・3304に囲まれた屋敷地にあり、掘立柱建物SB3138・3175の北西にある。SE3201は、これらとほぼ同時期（15世紀後半）に廃絶したと考えられる。

### (3) 溝

SD3301・3304 調査区の西側で検出したほぼ直交

する2本の溝。調査区内での一辺は30m以上、幅40cm、深さは60cm程である。方形の屋敷地を囲む溝である可能性が高い。区画の北西隅付近で溝が途切れる部分があり、ここが虎口になる可能性がある。この部分は東西の麓から丘陵に上ってきた道が「T」字状に交差する部分であり、虎口はこの方向に開いている可能性が高い。SD3304の埋土から常滑製品の甕（378）、大畑大洞新段階の東濃系山茶碗（377）、丸瓦（375）、平瓦（376）が出土した。このうち376と378はSE3201出土遺物と接合できた。

この他数本の溝を検出した。いずれも中世から近世のものと思われる。

### (4) 道路遺構

丘陵の東西の麓から続く道路遺構と「T」字状の交差点を検出した。SD3317はその側溝である可能性が高い。交差点を北に向かうと、西ノ広城跡の虎口に続く。

## 2 遺物

### (1) 土坑出土遺物（336～340）

336はSK3244から出土した寛永通宝である。337はSK3246から出土した。瀬戸美濃製品の盤類で、藤澤良祐氏の編年<sup>9</sup>の後Ⅰ～Ⅲ期ものと思われる。338は山茶碗。尾張型Ⅱ型式のものと思われる。伊勢地方での出土例は極めて少ない。339は常滑製品の片口鉢。中野晴久氏の編年<sup>9</sup>の第11型式と思われる。搦目があるものは珍しい。340は土師器皿。底部から口縁部にかけてまっすぐにたち上がる。

### (2) 井戸出土遺物（341～350）

ここに示したものはSE3247出土遺物である。341は灰輪陶器の広口瓶か。10～11世紀のものである。342は古瀬戸の水注。前Ⅱ期のものである。343・344は尾張型の山茶碗。いずれも10型式のものである。344の底部外面には「三」の墨書がある。底部内面にも墨痕が残る。345～347は常滑製品の片口鉢。345は9～10型式、346・347は10型式のものである。348は瀬戸美濃製品の搦鉢。後Ⅲ～Ⅳ期古段階のものである。349は砥石、350は井戸底に

据えられていた曲物。

### (3) 溝出土遺物（351～370）

351・352はSD3265から出土した。351は近世美濃焼の灯明皿。幕末のものかと思われる。352は鉄銭。銭文は不明である。

353・354はSD3305から出土した。353は古瀬戸の水注の把手。後Ⅲ～Ⅳ期のものである。354は龍泉窯系の青磁碗。

355はSD3307から出土した常滑製品の片口鉢で11～12型式のものである。

356はSD3310から出土した古瀬戸の合子蓋。後Ⅰ～Ⅱ期のものである。

357～359はSD3317から出土した。357は尾張型の山茶碗。8～9型式のものであると思われる。358は古瀬戸の桶。後Ⅳ期新段階のものである。359は石製の礎。

360はSD3320から出土した青磁の碗。外面には雷紋がある。

361はSD3331から出土した尾張型の山茶碗。9型



式のものと思われる。

362～370はSD3343から出土した。362は10型式の片口鉢。産地は瀬戸と思われる。363は常滑製品の片口鉢。10型式のものと思われる。364は青磁碗。龍泉窯系のもので、外面には蓮弁文がある。365～368は近代の磁器。最終的な埋没時のものか。369・370は瀬戸焼の乗燭。19世紀代のもと思われる。

371・372はSD3353から出土した。371は南伊勢系の鍋の口縁部。伊藤裕偉氏の編年<sup>3</sup>の第2段階a型式のものと思われる。372は尾張型の山茶碗。6型式のものと思われる。

373・374はSD3354から出土した。いずれも灰釉陶器。373は碗、374は水注である。いずれもK-14式のものと思われる。

#### (4) 中世居館関連遺構出土遺物 (375～376)

375～378はいずれも中世居館の溝SD3304から出土した遺物である。このうち、376と378は居館内の井戸SE3201出土のものと同一体で、接合することができた。

375は丸瓦。内面には細かめの、外面には粗めの布目が残る。376は平瓦。SE3201最下層から出土した個体と接合できた。下面には砂粒を多く含む。

377は東濃系の山茶碗。大畑・大洞新段階のものと思われる。

378は常滑製品の甕。SE3201東半部褐色礫層中から出土した個体と接合できた。11型式初頭のものと思われる。

#### (5) 包含層出土遺物 (379～420)

**石製品** 379は五輪塔の火輪。石材は不明。花崗岩でも砂岩でもない。

**土師器** 皿、鍋、羽釜がある。

皿 (380～384) には様々な形態のものがあり、法量分化も明瞭でない。382・384には内面に弱い稜線がある。

鍋 (387) は南伊勢系のものである。第2段階a型式のものと思われる。羽釜 (388～391) も様々な形態のものがある。罎の形状から、388・390は中北勢系、389・391は南伊勢系と思われる。

**陶器** 385は古瀬戸の入子。前Ⅲ～中Ⅱ期のもの。

内面には水銀朱が付着する。

386は東濃系山茶碗の小皿。大畑・大洞期のものと思われる。392～395は尾張型山茶碗。392は8～9型式、393・394は9型式、395は10型式のものと思われる。394の底部外面には判読不明であるが墨書の痕跡が残る。396・397は陶器の片口鉢。396は尾張型9型式のものと思われる。

398～401は瀬戸美濃製品。398は後Ⅲ～Ⅳ期の四耳壺。399は後Ⅳ期新段階の天目茶碗、400は後Ⅱ期の折縁小皿、401は後Ⅳ期の御皿。

402～404はいずれも近世後期の施釉陶器。402は登室連房8小期以降の搦鉢。403は美濃焼の油皿、404は瀬戸焼の搦鉢。

405は常滑製品の甕。10型式のものと思われる。

406・407は青磁碗。いずれも龍泉窯系のものか。

**土製品** 408は陶鍾。常滑製品か。409は甕の羽口。

**鉄製品** 410・411は断面方形の茎部。鎌の可能性が高い。412は鉄滓か。413は鉄鎌。414は工具か。

**その他** 415は砥石。416～419は縄文土器。痕象文がみられる。420は弥生土器の甕の口縁部。

(竹田憲治)

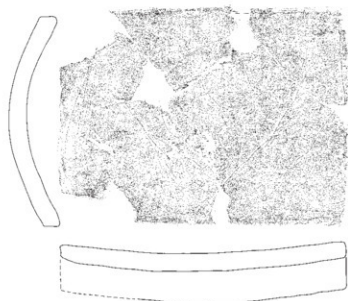
#### [註]

- ① 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器については、清水政宏『山奥遺跡Ⅱ』(四日市市教育委員会 2004年)、上村安生『伊勢・伊賀地域』(『弥生土器の様式と編年』木耳社 2002年)による。以下同じ。
- ② 石材は愛知県埋蔵文化財センター榎木真美子氏のご教示による。以下同じ。
- ③ 須恵器については城ヶ谷和広氏、渡邊博人氏に実見の上、ご教示をいただいた。以下同じ。
- ④ 赤色顔料に関しても愛知県埋蔵文化財センター榎木真美子氏のご教示を受けた。以下同じ。
- ⑤ 渡邊博人氏のご教示を得た。
- ⑥ 萩原義彦氏のご教示を得た。
- ⑦ 山茶碗及び瀬戸美濃製品については、藤澤良祐氏に実見の上ご教示を得た。以下同じ。
- ⑧ 常滑製品については中野晴久氏に実見の上、ご教示をいただいた。以下同じ。
- ⑨ 伊藤裕偉『中世南伊勢系の土師器に関する一試論』(『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会 1990年)





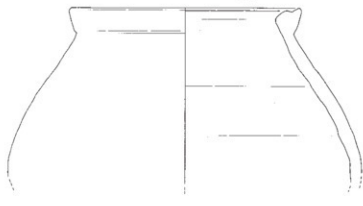
375



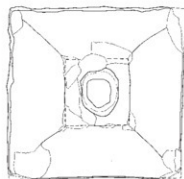
376



377



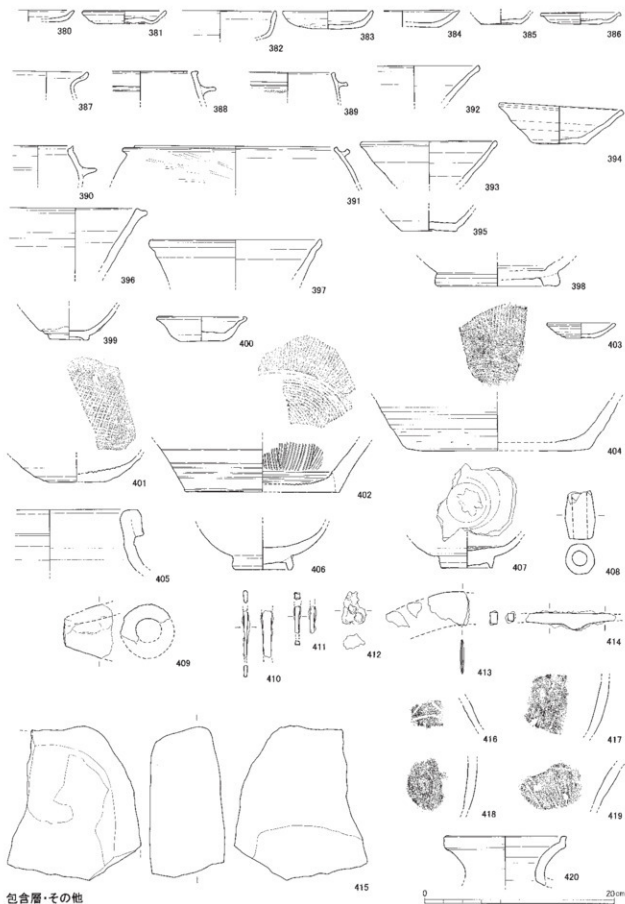
378



379

0 20cm

第59図 出土遺物⑩ (1:4)



包含層・その他

第60図 出土遺物① (1:4)

報告番号	No.	質	器形	新番号	計測値			胎土	色調	残存	
					口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)				
1	001-02	弥生土器	壺	SH3001	--	--	--	中中密 (~1.0mm少)	黄	5YR6/6	1/12以下の小片
2	001-03	弥生土器	鉢	SH3001	9.4	--	--	粗 (~3.0mm多)	にしい黄褐色	10YR7/4	①器部1/12、 ②器部~体部3/12程度
3	001-01	弥生土器	高杯	SH3001	--	--	--	中中密 (~2.0mm多)	黄	5YR7/6	①器部 (口器部含め) 1/12程度
4	002-01	弥生土器	壺	SH3002	底径 4.8	--	--	粗 (~4.0mm多)	黄	5YR6/6	底部10/12
5	002-05	弥生土器	壺	SH3002	底径 5.0	--	--	中中密 (~3.5mm多)	黄	7.5YR6/6	底部1/12
6	002-03	弥生土器	壺	SH3002	--	--	--	粗 (~3.0mm多)	にしい黄褐色	10YR7/4	①器部~ 器部1/12以下の小片
7	002-02	弥生土器	壺	SH3002	--	--	--	中中密 (~2.0mm中やや多)	黄	5YR7/6	①器部~器部3/12程度
8	002-04	弥生土器	高杯	SH3002	--	--	--	密 (~1.0mm少)	黄	5YR6/6	①器部1/12、口器部若干
9	002-06	土製品	土玉	SH3002	--	--	17.863	中中密 (~1.5mm中やや多)	黄	5YR6/6	5/12
10	059-01		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.3		0.030		ターコイズブルー		
11	059-02		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.4		0.073		ターコイズブルー		
12	059-03		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.4		0.072		ターコイズブルー		
13	059-04		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.3		0.029		ターコイズブルー		
14	059-05		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.3		0.042		ターコイズブルー		
15	059-06		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.25		0.045		ターコイズブルー		
16	059-07		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.3		0.060		ターコイズブルー		
17	059-08		ガラス玉	SH3002	最大径0.4×厚0.3		0.061		ターコイズブルー		
18	003-02	弥生土器	壺	SH3004	--	--	--	中中密 (~3.0mm多)	黄	5YR7/6	①器部~口器部1/12程度
19	006-01	弥生土器	壺	SH3004	--	--	--	中中密 (~2.0mm少)	にしい黄褐色	10YR7/4	①器部、器部で復元、 ②器部~体部3/12
20	003-05	弥生土器	壺	SH3004	--	--	--	粗 (~4.0mm多)	黄	5YR6/6	器部~体部残存2/12弱
21	005-01	弥生土器	壺	SH3004	7.4	--	--	中中密 (~4.0mm中やや多)	にしい黄褐色	10YR6/4	①器部1/12、体部3/12
22	005-02	弥生土器	壺	SH3004	底径 4.8	--	--	中中密 (~3.0mm多)	にしい黄褐色	10YR6/4	①器部は復元済、 器部~体部3/12
23	003-04	弥生土器	壺	SH3004	底径 6.0	--	--	粗 (~3.0mm多)	黄	5YR6/6	底部6/12
24	007-02	弥生土器	壺	SH3004	底径 6.3	--	--	中中密 (~2.0mm多)	にしい黄褐色	10YR6/4	底部1/12
25	006-03	弥生土器	鉢又は甌	SH3004	底径 4.8	--	--	粗 (~4.0mm多)	黄	7.5YR6/6	底部10/12
26	006-04	弥生土器	壺	SH3004	底径 5.0	--	--	中中密 (~2.0mm多)	黄	5.5YR6/6	底部6/12
27	006-02	弥生土器	壺	SH3004	18.8	--	--	中中密 (~1.5mm少)	黄	7.5YR6/6	①器部1/12以下、 器部で復元
28	009-01	弥生土器	壺	SH3004	14.0	--	--	中中密 (~5.0mm多)	にしい黄褐色	10YR7/4	①器部~体部6/12
29	003-03	弥生土器	高杯	SH3004	--	--	--	中中密 (~1.5mm中やや少)	黄	5YR6/6	①器部含む口器部2/12
30	004-02	弥生土器	高杯	SH3004	底径 14.4	--	--	中中密 (~3.0mm多)	浅黄	2.5Y7/4	器部7/12程度、 体部は復元済
31	007-01	弥生土器	高杯	SH3004	--	--	--	中中密 (~2.0mm少)	黒褐	2.5Y3/1	①器部1/12以下の小片
32	053-01	弥生土器	高杯	SH3004	--	--	--	粗 (~5.0mm多)	黄	7.5YR7/6	器上部のみは復元済
33	029-04	石製品	磨製石片	SH3004	5.1×2.9×0.95				緑・白・灰・黄		
34	030-05	弥生土器	壺	包	11.5	--	--	密	浅黄褐色	10YR6/4	①器部3/12
35	029-04	弥生土器	壺	丸18包	底径 4.3	--	--	中中密 (1.0mm少多)	黄	5YR6/6	底部1/12
36	029-01	弥生土器	壺	包	39.0	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	明黄褐色	10YR7/6	①器部2/12
37	030-07	土師器	壺	包	--	--	--	密	にしい黄褐色	5YR6/4	①器部小片
38	013-01	弥生土器	高杯	包	--	--	--	密	にしい黄褐色	7.5YR6/4	小片
39	030-04	弥生土器	高杯	包	--	--	--	中中密 (1.0mm少多)	黄	7.5YR7/6	①器部小片
40	029-06	弥生土器	高杯	包	--	--	--	密	黄	5YR6/6	①器部小片
41	030-06	弥生土器	高杯	包	--	--	--	中中密 (~0.5mm少多)	浅黄褐色	7.5YR6/4	①器部小片
42	011-05	弥生土器	高杯	~10包	体部径 5.0	--	--	中中密 (1.0~1.5mm少多)	黄	5YR7/6	体部4/12
43	110-01	石製品	磨製石片	包	10包						
44	108-04	石製品	磨製石片	包	--	--	--				
45	067-04	石製品	磨製石片	包	9.05×2.8×1.36						
46	108-02	土製品	土玉	包	--	--	--	密	黄	7.5YR7/6	
47	030-12	石製品	石鏝	包	--	--	--				ヤマト
48	030-11	石製品	石鏝	包	--	--	--				黒燐石
49	100-03	石製品	石鏝	包	--	--	--				下呂石
50	030-10		ガラス玉	包	0.4×0.3×0.3				ターコイズブルー		
51	030-09		ガラス玉	包	0.3×0.3×0.3				ターコイズブルー		
52	010-04	須恵器	杯蓋	SH3005	10.0	--	--	中中密 (~3.0mm少多)	灰黄	2.5Y7/2	①器部3/12
53	010-01		土玉	SH3005	底径 1.7	--	--	密	黄	7.5YR7/6	底部6/12
54	031-04	土師器	長形甕	SH3006	17.6	--	--	中中密 (~2.0mm中やや少)	黄褐色	10YR6/6	①器部2/12
55	010-05	須恵器	甕	SH3006	--	--	--	密	灰	5Y5/1	小片
56	012-05	土師器	長形甕	SH3007個人	19.0	--	--	粗 (1.5mm少多)	浅黄褐色	10YR6/3	①器部7/12
57	013-04	土師器	甕	SH3008	13.8	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	明黄褐色	10YR7/6	①器部2/12
58	013-02	須恵器	杯蓋	SH3008	下径 10.2	4.0	--	中中密 (~5.0mm小石)	灰白	10Y7/1	底部2/12
59	013-03	須恵器	杯身	SH3008	9.0	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	灰	NS/	①器部3/12
60	013-05	土師器	壺	SH3009	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい黄褐色	10YR7/4	①器部小片
61	066-03	土師器	壺	SH3009	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	黄	2.5YR6/6	①器部小片
62	016-01	土師器	壺	SH3010	17.8	--	--	密	浅黄褐色	10YR6/4	①器部3/12
63	015-03	土師器	壺	SH3010	19.8	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	灰白	2.5Y8/2	①器部3/12
64	017-01	土師器	壺	SH3010個人	11.0	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい黄褐色	10YR7/4	底部2/12

第1表 出土遺物観察表①

報告 番号	No.	質	器 形	新番号	計 測 値			土	色 調	残 存		
					口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
65	022-01	土師器	甕	SF12010甕	18.0	--	--	甎 (~4.0mm多)	にがい黄徳	0YR7/3	口縁部1/3	
66	019-01	土師器	甕	SF12010甕	18.5	--	--	甎 (~3.0mm多)	明黄徳	0YR7/6	口縁部12/12	
67	015-02	土師器	甕	SF12010甕	17.8	--	--	中々甎 (~3.0mm小石)	明黄徳	0YR7/6	口縁部2/12	
68	022-02	土師器	甕	SF12010甕	17.0	--	--	甎 (~5.0mm多)	にがい黄徳	0YR7/4	口縁部1/12以下	
69	018-01	土師器	長頸甕	SF12010甕	21.8	--	--	中々甎 (~3.0mm小石)	0YR6/3	0YR6/3	口縁部1/12	
70	021-01	土師器	長頸甕	SF12010甕	18.9	35.5	--	中々甎 (~4.0mm小石)	にがい黄徳	0YR7/4	ほぼ完全	
71	019-02	土師器	把手	SF12010	--	--	--	中々甎 (~2.0mm中々少)	黄	5YR7/6	把手部小片	
72	014-02	灰器器	杯蓋	SF12010	底径	11.0	4.0	--	甎	灰白	0YR7/1	底部1/12
73	017-05	灰器器	高杯	SF12010	底径	13.0	--	中々甎 (~5.0mm小石)	灰白	2.5Y8/2	底部2/12	
74	014-04	灰器器	杯蓋	SF12010	下径	11.8	4.1	--	中々甎 (~4.0mm小石)	灰白	0YR7/1	口縁部4/12
75	014-01	灰器器	杯蓋	SF12010	下径	10.4	3.2	--	中々甎 (~3.0mm小石)	灰	5Y8/1	口縁部3/12
76	016-03	灰器器	高杯	SF12010	柱状部	3.6	--	--	甎	灰白	5Y8/1	柱状部上部完全
77	017-04	灰器器	高杯	SF12010甕?	底径	7.7	--	中々甎 (~3.0mm小石)	灰	NK/	底部1/12	
78	014-03	灰器器	高杯	SF12010	底径	8.6	--	--	甎	灰	NK/	底部10/12
79	017-03	灰器器	高杯	SF12010	底径	13.0	--	--	甎	灰	NK/	底部2/12
80	016-02	灰器器	高杯	SF12010	底径	13.8	--	--	甎	灰褐	2.5Y8/2	底部1/12
81	017-02	灰器器	短頸甕	SF12010	8.8	--	--	--	灰白	2.5Y7/1	口縁部3/12	
82	020-01	灰器器	瓶小瓶	SF12010	--	--	--	中々甎 (~2.0mm少)	灰白	5Y8/1	1/12程度 (他断片有)	
83	015-01	---	瓶支柱	SF12010	14.7	5.8	--	支柱石小	にがい黄	2.5Y6/3		
84	124-01	鉄製品	鉄鏝	SF12010	--	--	--	--	--	--		
85	124-03	鉄製品	鉄鏝	SF12010	--	--	--	--	--	--		
86	024-01	土師器	甕	SF12011	頸部径	18.4	--	中々甎 (~3.0mm多)	明黄徳	2.5Y8/6	頸部1-12	
87	023-02	土師器	甕	SF12012	--	--	--	中々甎 (~2.0mm中々多)	にがい黄徳	0YR7/4	口縁部一層部1/12	
88	068-02	土師器	甕	SF12012甕	12.8	--	--	中々甎 (~5.0mm小石)	にがい黄徳	2.5Y8/6	口縁部1/12	
89	023-01	土師器	高杯	SF12012	--	--	--	甎 (~3.0mm多)	にがい黄徳	0YR7/4	柱状部1部/12欠損、下部ほぼ完全	
90	052-05	灰器器	杯身	SF12012 三柱穴	12.0	--	--	甎 (~2.0mm中々多)	灰	NK/	口縁部1/12	
91	027-01	灰器器	器台	SF12012	--	--	--	甎	灰白	2.5Y8/2	小片	
92	051-02	灰器器	杯蓋	SF12013 三柱穴	底径	12.4	--	甎 (~2.0mm少)	暗灰	N3/	底部1/12以下	
93	053-05	土師器	甕	SF12016	--	--	--	甎 (~2.0mm中々多)	黄	2.5Y8/6	口縁部一層部2/12	
94	030-08	土師器	甕?	SF12016	--	--	--	甎 (1.0~3.0mm小石多)	浅黄徳	0YR8/4	口縁部小片	
95	029-03	灰器器	杯蓋	SF12016	底径	9.3	--	甎 (1.0mm少多)	灰黄徳	0YR5/2	底部1/12、口縁部2/12	
96	029-01	灰器器	杯蓋	SF12016	11.5	--	--	中々甎 (0.5~1.0mm少多)	明黄徳	2.5Y7/2	口縁部4/12	
97	030-02	灰器器	柄?	SF12016	--	--	--	中々甎 (2.0mm小石)	灰	NK/	口縁部小片	
98	029-02	灰器器	高杯	SF12016	12.3	--	--	中々甎 (2.0mm少多)	灰黄徳	2.5Y7/2	口縁部5/12	
99	054-01	石製品	碇石	SF12016	(17.0) × (18.1) × 3.6	--	--	--	灰黄		使用痕有	
100	075-01	灰器器	杯蓋	SF12018 貯蔵穴	14.8	--	--	甎	にがい黄	2.5Y6/3	口縁部5/12	
101	056-04	灰器器	杯身	SF12018	--	--	--	甎	灰	N7/	口縁部小片	
102	031-01	灰器器	杯身	SF12020	12.6	--	--	甎 (~1.5mm少)	灰	2.5Y6/1	2/12受部にて傾斜出し 受部1/12	
103	031-04	灰器器	杯身	SF12020	10.9	3.9	--	甎 (~3.0mm少)	浅黄	2.5Y7/3	口縁部12/12	
104	031-03	灰器器	杯身	SF12020	10.8	4.3	--	中々甎 (~3.0mm中々少)	灰黄	2.5Y7/2	口縁部小片	
105	031-02	灰器器	高杯	SF12020	底径	7.4	--	中々甎 (~2.0mm中々少)	黄灰	2.5Y4/1	底部ほぼ完全8/12	
106	032-01	灰器器	高杯	SF12020	底径	10.8	--	中々甎 (~3.0mm中々少)	灰白	2.5Y7/1	底部2/12、底部4/12	
107	037-02	灰器器	杯身	SF12022	11.4	--	--	中々甎 (~2.0mm中々多)	灰	2.5Y5/1	口縁部2/12	
108	033-01	灰器器	杯蓋	SF12022	--	--	--	甎	黄	5YR6/6	蓋部分小片	
109	032-03	灰器器	瓶	SF12022	--	--	--	中々甎 (~1.0mm少)	浅黄徳	0YR8/4	口縁部小片	
110	034-01	灰器器	鉢	SF12022	22.8	--	--	中々甎 (~3.0mm 所々7.0mm大石混)	灰白	2.5Y7/1	口縁部9/12 全体としてほぼ完全	
111	032-04	灰器器	瓶	SF12022	--	--	--	中々甎 (~2.0mm多)	灰	2.5Y6/1	口縁部小片、 把手部一部、体部小片	
112	033-02	灰器器	杯身	SF12023	6.0	--	--	甎 (~2.0mm多、 一部5.0mm石)	灰	N3/	口縁部2/12	
113	033-03	灰器器	短頸甕?	SF12023	--	--	--	--	オリーブ灰	2.5G Y6/1	口縁部小片	
114	033-04	灰器器	高杯	SF12023	底径	7.8	--	中々甎 (~2.0mm中々多)	黄灰	2.5Y6/1	頸部1/12、底部2/12	
115	037-01	土師器	杯	SF12027	--	--	--	中々甎	明赤黄	5YR5/6	口縁部小片	
116	036-04	土師器	甕	SF12027	--	--	--	甎 (~2.0mm多、 所々4.0mm石)	黄灰	2.5Y8/3	口縁部小片	
117	036-02	土師器	甕	SF12027	--	--	--	甎 (~3.0mm多)	にがい黄	5YR7/3	口縁部4/12	
118	037-05	灰器器	杯蓋	SF12027	10.8	--	--	中々甎 (~3.0mm中々少)	灰白	5Y7/1	頸部分のみ2/12、 上部はほぼ完全	
119	036-03	灰器器	杯身	SF12027	15.4	4.0	--	甎 (~0.5mm程度少)	黄	5YR7/6	口縁部3/12	
120	036-01	灰器器	杯蓋	SF12028	11.9	3.4	--	中々甎 (~2.0mm少)	灰白	5Y7/1	口縁部6/12 把手部分ほぼ完全	
121	035-01	灰器器	杯身	SF12026	底径	13.1	--	甎 (~2.0mm少)	にがい黄	5YR6/3	7/12上部は、ほぼ完全	
122	035-03	灰器器	杯身	SF12026	13.0	4.2	--	甎 (~1.5mm少)	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/12	
123	035-02	灰器器	杯身	SF12026	15.2	--	--	甎 (~1.0mm少)	灰	5Y8/1	口縁部7/12	
124	039-01	土師器	甕	SF12028	--	--	--	甎 (~3.0mm小石少量)	黄	2.5YR7/6	口縁部小片	
125	039-04	土師器	甕	SF12028	22.4	--	--	中々甎 (~5.0mm小石)	にがい黄	0YR7/4	口縁部1/12	

第2表 出土遺物観察表②

種別 番号	元No.	質	器形	新番号	計測値			胎土	色調	残存	
					口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)				
126	038-03	土師器	把手	SI13018	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	灰黄	1.5YR/4	把手部分のみ
127	037-03	土師器	把手	SI13028	--	--	--	粗 (~3.0mm多)	黄	7.5YR7/6	把手部分のみ
128	038-02	灰産器	杯蓋	SI13028	--	--	--	密	灰	N6/	小片
129	037-02	灰産器	杯身	SI13028	10.4	--	--	密	灰白	1.0Y7/1	口縁部1/2
130	037-04	灰産器	杯身	SI13028	10.8	--	--	密 (~3.0mm中中多)	赤灰	2.5YR5/1	口縁部1/2
131	038-01	灰産器	壺	SI13028	9.4	--	--	密	灰黄	2.5Y7/2	口縁部1/2
132	039-02	石製品	砥石	SI13030	--	--	--	密	灰白	N6/	
133	043-06	土師器	甕	SI13031	12.4	--	--	中中密	にしい黄	5YR6/4	口縁部1/2
134	040-01	土師器	甕	SI13031	12.8	--	--	中中密 (~6.0mm小石)	洗黄	7.5YR6/4	口縁部1/2
135	041-03	土師器	甕	SI13031	12.8	--	--	密 (~1.0mm砂)	にしい黄	1.0YR/4	口縁部1/2
136	043-03	土師器	甕	SI13031	12.8	--	--	中中密 (~3.0mm砂粒)	にしい黄	1.0YR5/3	口縁部1/2
137	043-04	土師器	甕	SI13031	30.2	--	--	密	にしい黄	1.0YR7/4	口縁部1/2
138	042-02	土師器	甕	SI13031	19.2	--	--	密	洗黄	1.0YR/4	口縁部1/2
139	042-01	土師器	罎	SI13031	30.2	--	--	中中密 (~2.0mm砂粒)	赤赤	2.5YR7/4	口縁部1/2
140	039-04	土師器	甕	SI13031	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい黄	7.5YR5/4	小片
141	043-05	土師器	甕	SI13031	--	--	--	中中密	黄	5YR7/6	口縁部小片
142	040-02	土師器	把手	SI13031	--	--	--	中中密 (~5.0mm小石)	洗黄	1.0YR7/3	把手部分のみ
143	042-05	灰産器	杯蓋	SI13031	底径	10.8	--	密	灰白	5Y7/2	底部小片
144	039-03	灰産器	杯身	SI13031	底径	8.0	3.6	密	灰	5Y5/1	口縁部ほぼ定形
145	042-04	灰産器	杯身	SI13031	底径	7.4	--	密	灰黄	2.5Y6/2	口縁部1/2
146	043-01	灰産器	杯身	SI13031	底径	10.8	--	密	灰オリーブ	5Y5/2	口縁部1/2
147	043-02	灰産器	杯身	SI13031	底径	10.8	--	密	にしい黄	1.0YR6/3	口縁部4/2
148	041-02	灰産器	壺蓋	SI13031	底径	9.6	--	密 (~3.0mm小石数個)	灰白	5Y7/1	底部6/2
149	040-04	灰産器	高杯	SI13031	底径	11.6	--	密	灰白	1.0Y7/1	口縁部ほぼ定形
150	105-01	灰産器	高杯	SI13031	底径	11.8	--	密 (~3.0mm小石少)	灰	N5/	口縁部1/2以下
151	041-01	灰産器	高杯	SI13031	底径	9.4	7.7	密	灰	N5/	口縁部1/2
152	040-03	灰産器	高杯	SI13031	底径	12.1	8.6	密	灰	5Y6/1	口縁部1/2
153	042-03	灰産器	短頸罎	SI13031	底径	12.0	--	密	灰	1.0YR/3	口縁部1/2
154	043-02	土師器	甕	SI13032	17.8	--	--	密	洗黄	1.0YR/4	
155	044-02	土師器	把手	SI13032	--	--	--	粗	洗黄	1.0YR/4	把手部分のみ
156	044-01	灰産器	杯身	SI13032	底径	10.8	--	密	灰	1.0Y5/1	口縁部7/2
157	044-04	灰産器	杯蓋	SI13032	底径	9.3	--	密	灰白	7.5Y7/1	
158	044-05	土師器	甕	SI13033	--	--	--	中中密 (~3.0mm多)	にしい黄	1.0YR7/4	口縁部小片
159	044-06	灰産器	杯蓋	SI13033	底径	16.2	--	密	洗黄	7.5Y7/1	底部1/2以下
160	045-01	灰産器	杯蓋	SI13033	底径	19.1	--	密	灰黄	2.5Y6/2	底部1/2
161	045-01	灰産器	杯蓋	SI13034	底径	12.0	--	密	灰白	5Y8/1	底部1/2
162	045-02	灰産器	杯蓋	SI13034	底径	--	--	密	灰	1.0Y6/1	不明
163	045-03	灰産器	杯蓋	SI13040	底径	--	--	密	灰黄	2.5Y7/2	小片
164	045-02	土師器	甕	SI13040	底径	21.0	--	密 (~5.0mm小石:多)	明赤	1.0YR7/6	口縁部1/2
165	060-04	土師器	甕	SI13044編	--	--	--	中中密 (~5.0mm小石)	洗黄	1.0YR8/4	口縁部小片
166	047-02	土師器	甕	SI13037	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	明赤	1.0YR7/6	口縁部小片
167	047-01	土師器	甕	SI13037	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	黄	7.5YR6/6	口縁部小片
168	046-04	土師器	甕	SI13037	--	--	--	中中密	明赤	1.0YR7/6	口縁部小片
169	046-05	灰産器	杯蓋	SI13037	底径	16.2	--	密 (~4.0mm小石数個)	灰白	2.5Y7/1	底部1/2
170	079-06	灰産器	杯身	SI13037 貯蔵穴	底径	12.3	--	中中密 (~3.0mm小石)	灰白	1.5Y7/1	口縁部1/2
171	079-05	土師器	甕	SI13037 貯蔵穴	底径	14.6	--	粗 (~6.0mm小石)	にしい黄	1.0YR7/4	口縁、底部のみ
172	046-05	土師器	把手	SI13037	--	--	--	中中密 (~3.0mm砂)	明赤	5YR5/6	把手部分のみ
173	080-01	土師器	罎	SI13037	底径	22.6	--	中中密 (~8.0mm小石少)	にしい黄	1.0YR7/4	口縁部1/2
174	064-05	土師器	甕	SI13041	底径	12.8	--	中中密 (~3.0mm小石)	洗黄	7.5YR6/6	口縁部1/2
175	064-02	土師器	甕	SI13041	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	にしい黄	1.0YR7/4	口縁部小片
176	049-01	土師器	甕	SI13041	底径	17.2	--	密	黄	7.5Y7/6	口縁部1/2
177	064-03	土師器	甕	SI13041	底径	19.2	--	中中密 (~3.0mm小石)	黄	1.0YR6/6	口縁部1/2
178	049-02	土師器	甕	SI13041	底径	18.0	--	密	明赤	1.0YR7/6	口縁部1/2
179	050-01	土師器	甕	SI13041	底径	21.0	--	中中密	洗黄	1.0YR6/6	口縁部1/2
180	048-03	土師器	甕	SI13041	底径	18.8	--	中中密 (~3.0mm小石)	黄	5YR6/6	口縁部1/2
181	064-04	土師器	把手	SI13041	--	--	--	密	洗黄	1.0YR8/4	把手部分のみ
182	049-04	土師器	甕	SI13041	--	--	--	中中密 (~2.0mm砂)	にしい黄	1.0YR7/4	口縁部小片
183	064-01	土師器	短小罎	SI13041	底径	7.8	--	中中密 (~3.0mm小石)	洗黄	1.0YR8/4	底部1/2
184	047-06	灰産器	杯蓋	SI13041	底径	10.2	--	中中密 (~5.0mm小石)	灰白	1.0Y7/1	底部7/2
185	047-03	灰産器	杯身	SI13041	底径	8.6	--	密	灰黄	2.5Y7/2	口縁部1/2
186	048-01	灰産器	杯身	SI13041	底径	9.2	2.6	中中密 (~5.0mm小石少)	灰	N6/	口縁部1/2
187	047-05	灰産器	杯身	SI13041	底径	8.2	--	密	灰黄	2.5Y6/2	口縁部4/2
188	047-04	灰産器	杯身	SI13041	底径	9.0	--	密	灰	N5/	口縁部1/2
189	048-02	灰産器	高杯	SI13041	底径	8.8	--	密 (~1.0mm細い砂)	灰黄	2.5Y6/2	底部1/2
190	075-05	灰産器	短頸罎	SI83:03	底径	11.8	--	密 (~1.0mm少)	灰	7.5Y6/1	口縁部1/2以下、 底部1/2
191	073-01	土師器	甕	SI83:12	--	--	--	中中密	にしい黄	1.0YR7/3	口縁部小片
192	074-05	土師器	甕	SI83:12	--	--	--	粗	洗黄	1.0YR8/4	口縁部小片

第3表 出土遺物観察表③

発掘番号	RNo.	質	器形	新番号	計測値			胎土	色調	残存	
					口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)				
193	073-03	土師器	壺	SB3113	30.4	--	--	中や瓶	黄	7.5YR/6	口縁部3/12
194	074-02	灰土器	壺	SB3112	--	--	--	灰	黄	7.5Y/6/1	不明
195	055-04	灰土器	杯蓋	SB3112	11.8	4.7	--	黄 (~1.0mm程度の少)	灰白	7.5Y7/1	口縁部1/12
196	051-03	灰土器	杯身	SB3112	12.4	3.9	--	黄 (~1.0mm少)	灰	7.5Y6/1	底部～底面1/12
197	073-04	灰土器	杯身	SB3112	--	--	--	黄	灰オリーブ	5Y5/3	口縁部小片
198	029-05	灰土器	高杯	SB3112	底径 8.3	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石少)	オリーブ系	7.5Y3/1	底部ほぼ全存
199	074-03	灰土器	杯?*	SB3112	--	--	--	黄	灰白	5Y8/1	口縁部小片
200	058-03	灰土器	高杯	SB3113	底径 7.2	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石)	灰	5Y6/1	底部1/12
201	065-03	灰土器	杯蓋	SB3130	--	--	--	黄	灰	N5/	口縁部小片
202	052-03	灰土器	杯身	SB3137	8.8	--	--	黄 (~2.0mm少)	灰	7.5Y3/1	口縁部3/12
203	051-05	灰土器	杯蓋	SB3146	13.4	--	--	黄 (~3.0mm多)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12
204	058-04	灰土器	短頸壺	SB3146	8.2	--	--	黄	灰	N6/	口縁部1/12
205	067-02	灰土器	壺	SK3202	--	--	--	中や瓶 (~2.0mm砂)	灰白	7.5YR/1	不明
206	067-01	土師器	高杯	SK3202	底径 8.6	--	--	中や瓶	灰白	5Y8/1	不明
207	067-03	灰土器	杯蓋	SK3208	13.4	--	--	中や瓶	灰白	5Y8/1	底部4/12
208	069-04	灰土器	把手	SK3214	--	--	--	黄 (~1.0mm砂少)	灰	7.5Y5/1	把手部小片
209	075-05	灰土器	高杯	SK3229	底径 10.2	--	--	黄	灰	7.5Y5/1	底部全存
210	069-04	土師器	壺	SK3212	15.8	--	--	中や瓶	黄	7.5YR/6	口縁部2/12
211	069-02	灰土器	杯蓋	SK3212	底径 9.6	--	--	瓶	灰白	N7/	底部1/12
212	069-01	土師器	高杯	SK3212	--	--	--	瓶	浅黄褐色	7.5YR/4	不明
213	070-01	土師器	壺	SK3215	--	--	--	中や瓶 (~2.0mm砂多)	にしい黄褐色	7.5YR/4	口縁部小片
214	074-01	土師器	壺	SK3215	--	--	--	中や瓶 (~2.0mm砂多)	黄	7.5YR/6	口縁部小片
215	069-03	灰土器	杯身	SK3215	9.4	--	--	黄	灰白	7.5YR/1	口縁部12/12
216	072-01	土師器	長頸壺	SK3213	19.2	--	--	中や瓶 (~4.0mm小石、2.0mm小石多)	浅黄褐色	7.5YR/4	口縁部11/12
217	075-03	土師器	把手	SK3206	--	--	--	中や瓶	浅黄褐色	7.5YR/4	把手部分のみ
218	075-05	灰土器	杯蓋	SK3206	底径 10.8	--	--	黄	灰	7.5Y5/1	底部1/12
219	075-04	灰土器	杯身	SK3206	--	--	--	黄	浅黄	2.5Y7/3	口縁部小片
220	075-02	灰土器	杯身	SK3206	14.4	--	--	黄	灰白	5Y7/1	口縁部2/12
221	075-06	土師器	把手	SK3201	--	--	--	中や瓶	浅黄褐色	7.5YR/4	把手部分のみ
222	076-01	土師器	壺	SK3201	18.6	--	--	中や瓶 (~4.0mm砂)	黄	7.5Y7/6	口縁部2/12
223	076-02	土師器	壺	SK3201	--	--	--	中や瓶	灰白	2.5Y8/2	口縁部小片
224	070-02	灰土器	杯身	SK3201	10.8	--	--	中や瓶	灰黄	2.5Y7/2	口縁部11/12弱
225	077-03	灰土器	杯身	SK3200	14.0	--	--	黄	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12
226	077-01	土師器	高杯	SK3200	10.0	--	--	中や瓶	浅黄褐色	7.5YR/3	口縁部4/12
227	077-06	灰土器	杯蓋	SK3205	底径 11.7	--	--	黄	灰白	2.5Y7/1	底部1/12
228	077-04	灰土器	杯身	SK3205	11.4	--	--	黄	灰白	5Y7/1	口縁部9/12
229	077-05	灰土器	杯蓋	SK3205	底径 12.8	--	--	黄	灰	N5/	底部1/12
230	077-07	灰土器	杯蓋	SK3260	底径 11.3	--	--	中や瓶 (~1.0mm砂多)	灰白	7.5Y7/1	底部6/12
231	078-03	灰土器	壺	SK3272	19.9	--	--	中や瓶 (~5.0mm砂)	灰オリーブ	5Y6/2	口縁部1/12
232	079-04	土師器	杯?	SK3282	--	--	--	黄	黄	5YR/8	不明
233	079-02	土師器	把手	SK3283	--	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石多)	浅黄褐色	7.5YR/4	把手部分のみ
234	079-03	灰土器	壺	SK3282	--	--	--	黄	灰	N4/	口縁部小片
235	081-01	灰土器	杯蓋	SK3284	--	--	--	黄	にしい黄褐色	7.5YR/3	底部、底部のみ
236	085-01	灰土器	長頸壺	SE3204	体部径 18.0	--	--	黄 (~2.0mm小石)	灰黄	2.5Y7/2	体部3/12
237	086-01	土師器	壺	SE3277	11.4	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石)	にしい黄	7.5YR7/6	口縁部1/12
238	086-02	土師器	皿	SE3277	--	--	--	黄 (~3.0mm小石少、5.0mm小石1個)	黄	7.5Y7/6	口縁部小片
239	085-04	土師器	高杯	SE3277	20.8	--	--	黄 (~2.0mm小石)	黄	5YR/6	口縁部5/12
240	085-02	灰土器	杯身	SE3277	底径 11.0	--	--	黄 (~2.0mm小石)	黄灰	2.5Y6/1	底部11/12弱
241	086-05	灰土器	杯身	SE3277	--	--	--	黄 (~1.0mm小石)	灰白	2.5Y8/2	口縁部小片
243	086-03	灰土器	横瓶	SE3277	10.3	--	--	黄 (~3.0mm小石少)	灰白	N7/	口縁部2/12
244	086-04	灰土器	杯?	SE3277	16.2	3.4	--	中や瓶	にしい黄	7.5YR/6	口縁部1/12
244	085-03	土師器	把手	SE3277	--	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石)	灰白	5Y8/1	把手部分のみ
245	060-06	土師器	杯	33P11	--	--	--	黄 (~1.0mm小石数個)	黄	2.5Y6/8	口縁部小片
246	061-02	土師器	杯?*	37P12	--	--	--	黄	黄	5YR5/6	口縁部小片
247	063-06	土師器	皿	93P15	--	--	--	黄	明赤褐色	2.5Y5/6	口縁部小片
248	061-03	土師器	壺	530P12	--	--	--	中や瓶 (~2.0mm小石)	にしい黄	7.5YR7/6	口縁部小片
249	061-04	土師器	壺	719P13	--	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石)	灰黄	2.5Y8/4	口縁部小片
250	081-03	土師器	壺	た30P14	16.0	--	--	中や瓶 (~2.0mm小石、5.0mm小石1個)	黄	7.5Y7/6	口縁部2/12
251	053-02	土師器	壺	913P16	16.4	--	--	中や瓶 (~4.0mmやや少)	にしい黄褐色	7.5YR7/4	口縁部2/12
252	060-03	土師器	壺	#139P11	15.4	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石多)	灰白	7.5YR/2	口縁部4/12
253	052-02	土師器	壺	#109P6	22.0	--	--	黄 (~3.0mm多)	黄	7.5YR/6	口縁部1/12
254	065-01	土師器	壺	93P15	--	--	--	中や瓶 (~3.0mm小石)	にしい黄褐色	7.5YR7/6	口縁部1/12
255	057-02	灰土器	杯身	#177P10	--	--	--	黄	灰	N8/	口縁部小片
256	060-01	灰土器	杯身	#177P10	--	--	--	黄	灰	5Y6/1	口縁部小片
257	060-05	灰土器	杯身	#35P11	底径 6.0	--	--	黄	灰白	5Y7/1	底部6/12
258	060-02	灰土器	杯身	#34P11	--	--	--	黄	黄	2.5YR6/6	底部小片

第4表 出土遺物観察表④

備考 番号	No.	質	形	新番号	計 画 値			土	色 調	残 存
					口径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)			
259	063-07	銅器	杯蓋	530715	底径	10.0	3.5	—	—	—
260	052-01	銅器	杯身	1213716	底径	10.0	—	—	—	—
261	065-02	銅器	杯蓋	931713	底径	14.4	—	—	—	—
262	058-02	銅器	高杯?	020714	—	—	—	—	—	—
263	055-07	銅器	杯蓋	239713	—	—	—	—	—	—
264	053-04	銅器	蓋	931712	—	—	—	—	—	—
265	089-01	土器	杯	工草立金包	—	—	—	—	—	—
266	107-02	土器	皿	タ31包	—	—	—	—	—	—
267	092-02	土器	蓋	429包	13.4	—	—	—	—	—
268	120-01	土器	蓋	Cトロン包	17.0	—	—	—	—	—
269	106-02	土器	蓋	433包	14.2	—	—	—	—	—
270	094-04	土器	蓋	434包	19.8	—	—	—	—	—
271	095-02	土器	蓋	435・36包	—	—	—	—	—	—
272	068-02	土器	蓋	122包	—	—	—	—	—	—
273	112-01	土器	蓋	113包	—	—	—	—	—	—
274	066-01	土器	蓋	015包	14.2	—	—	—	—	—
275	119-02	土器	蓋?	Cトロン包	36.4	—	—	—	—	—
276	091-02	土器	蓋	117包	16.8	—	—	—	—	—
277	111-06	土器	蓋	014包	18.0	—	—	—	—	—
278	069-01	土器	蓋	122包	19.5	—	—	—	—	—
279	116-04	土器	蓋	426包	21.0	—	—	—	—	—
280	112-05	土器	蓋	包	18.2	—	—	—	—	—
281	116-07	土器	蓋	フトロン包	—	—	—	—	—	—
282	087-02	土器	蓋	10包	—	—	—	—	—	—
283	091-01	土器	蓋	117包	—	—	—	—	—	—
284	087-04	土器	把手	工草立金包	—	—	—	—	—	—
285	119-05	土器	把手	Cトロン包	—	—	—	—	—	—
286	118-01	土器	長柄鏝	41包	17.2	—	—	—	—	—
287	090-03	銅器	杯蓋	938包	底径	10.2	—	—	—	—
288	087-01	銅器	杯蓋	包	上部径	4.4	—	—	—	—
289	067-06	銅器	杯蓋	122包	底径	13.4	—	—	—	—
290	011-02	銅器	杯蓋	11包	11.0	—	—	—	—	—
291	107-01	銅器	杯蓋	930包	底径	11.9	4.3	—	—	—
292	111-06	銅器	杯蓋	013包	13.0	—	—	—	—	—
293	067-05	銅器	杯蓋	122包	底径	9.9	—	—	—	—
294	007-04	銅器	杯蓋	114包	—	—	—	—	—	—
295	094-05	銅器	蓋	436包	底径	10.8	—	—	—	—
296	011-03	銅器	杯身	11包	11.8	—	—	—	—	—
297	112-04	銅器	杯身	418包	10.0	—	—	—	—	—
298	110-02	銅器	杯身	22包	11.8	—	—	—	—	—
299	117-03	銅器	杯身	929包	13.4	—	—	—	—	—
300	008-01	銅器	杯身	115包	10.2	—	—	—	—	—
301	115-02	銅器	杯身	包	9.0	—	—	—	—	—
302	116-05	銅器	杯身	130包	—	—	—	—	—	—
303	078-01	銅器	杯身	927・28包	—	—	—	—	—	—
304	103-05	銅器	杯身	813包	底径	9.2	—	—	—	—
305	104-04	銅器	杯身	1735包	底径	6.2	—	—	—	—
306	106-01	銅器	杯身	930包	底径	9.0	—	—	—	—
307	116-01	銅器	杯身	フトロン包	12.2	—	—	—	—	—
308	110-03	銅器	蓋	130包	15.2	—	—	—	—	—
309	103-06	銅器	杯蓋	813包	底径	14.8	—	—	—	—
310	104-05	銅器	蓋	1736包	14.4	—	—	—	—	—
311	090-05	銅器	蓋	1739包	底径	7.4	—	—	—	—
312	092-03	銅器	蓋	429包	底径	7.4	—	—	—	—
313	104-02	銅器	長柄鏝	136包	底径	7.6	—	—	—	—
314	103-02	銅器	蓋	916包	11.8	—	—	—	—	—
315	095-01	銅器	高杯	424包	底径	8.8	—	—	—	—
316	104-01	銅器	高杯	813包	柱状部径	3.0	—	—	—	—
317	003-01	銅器	高杯	114包	—	—	—	—	—	—
318	116-03	銅器	高杯	929包	19.0	—	—	—	—	—
319	088-03	銅器	蓋	包	—	—	—	—	—	—
320	090-04	銅器	ハンコ	229包	底径	3.0	—	—	—	—
321	105-01	銅器	蓋	916包	底径	7.3	—	—	—	—
322	117-04	銅器	鉢	包	底径	8.6	—	—	—	—
323	113-03	銅器	長柄鏝	包	9.0	—	—	—	—	—
324	119-01	銅器	Cトロン包	21.4	—	—	—	—	—	—
325	117-01	銅器	蓋	136包	19.9	—	—	—	—	—
326	094-03	銅器	蓋	432包	19.8	—	—	—	—	—

第5表 出土遺物観察表⑤

報告 番号	No.	質	器 形	新番号	計 測 値			土 質	色 調	残 存		
					口径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)					
337	119-04	磁器器	壺			15.8	--	青	暗黄	2.5Y7/3	口縁部1/12	
338	088-02	磁器器	大甕	1418包	--	--	--	青 (~2.0mm小石少)	灰白	2.5Y7/1	底部小片	
339	125-06	磁器器	土甕	K12包	14.0	--	--	中中密 (~2.0mm砂粒)	灰白	7.5Y7/1	口縁部2/12	
340	109-03	磁器器	土甕	915包	16.8	--	--	青	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	
341	117-01	磁器器	罐底把手	包	--	--	--	青	黄褐	5YR2/1	把手部小片	
342	117-02	灰陶陶器	筒	438包	16.5	--	--	青	灰白	5Y7/1	口縁部約1/12	
343	109-02	磁器土器	つ19包	--	--	--	--	青	にしい青	7.5YR5/4		
344	111-01	知多式	磁器土器	1413包	--	--	--	青	にしい青	7.5YR7/4	小片	
345	112-03	磁器土器	918包	--	--	--	--	青	黄褐	5YR4/4	小片	
346	096-03	銅鏡	寛永通寶	SK2304	--	--	--					
347	079-01	陶器	飯椀	SK2306	--	--	--	中中密 (~4.0mm小石)	灰黄	2.5Y7/3	底部6/12	
348	078-02	陶器	山茶碗	SK2371	底径	5.8	--	青	灰	5Y1/8	不明	
349	092-01	陶器	片口鉢	SK2374	--	--	--	中中密 (~2.5mm小石)	にしい青	7.5YR6/4	底部小片	
349	127-03	土器器	片	SK2389	--	--	--	青 (~1.0mm砂粒少)	浅黄褐	10YR4/4	不明	
349	071-01	灰陶陶器	底口瓶	SK2301	底径	14.7	--	青	灰白	5Y7/1	不明	
349	083-03	陶器	水注	SK2347	体部径	10.0	--	青 (~2.0mm小石)	灰白	5Y7/1	体部3/12	
349	083-04	陶器	山茶碗	SK2347	底径	5.3	--	青 (~3.0mm小石)	灰白	2.5Y7/1	底部劣部	
349	083-01	陶器	山茶碗	SK2347	底径	5.0	--	中中密 (~2.0mm小石、 ~7.0mm小石3個)	灰白	2.5Y7/1	底部10/12	
349	082-01	陶器	片口鉢	SK2347	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい青	5YR5/4	口縁部小片	
349	082-04	陶器	片口鉢	SK2347	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石、 6.0mm小石1個)	黄	5YR5/6	小片	
347	083-02	陶器	片口鉢	SK2347	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	にしい青	5YR6/4	底部小片	
348	082-03	陶器	漆鉢	SK2347	底径	9.4	--	青 (~2.0mm小石)	浅黄褐	10YR4/4	底部3/12	
349	082-02	石製品	砥石	SK2347	縦5.4×横4.1	--	--					
350		木製品	曲物	SK2347	径	39.0	5.1	--				
351	104-03	陶器	灯明皿	SK2385	9.0	--	--	青	黄褐	5Y8/3	口縁部7/12	
352	123-05	銅鏡	SK2385	--	--	--	--					
353	090-02	陶器	鉄輪把手	SK2305	--	--	--	青	暗赤褐	5YR3/3	把手部小片	
354	090-01	青磁	筒	SK2305	底径	4.8	--	青	オリーブ灰	10Y6/2	底部4/12	
355	122-02	陶器	片口鉢	SK2307	--	--	--	中中密 (3.0mm程度砂少)	黄	5YR5/6	口縁部4/12	
356	129-01	陶器	蓋	SK2310	底径	2.8	1.0	--	黄褐	2.5Y8/3	劣部	
357	109-03	陶器	山茶碗	SK2317	底径	5.8	--	青	灰 (~7.0mm小石)	灰黄	2.5Y7/2	底部劣部
358	126-02	陶器	桶	SK2317	--	--	--	青	暗褐	7.5YR4/4	不明	
359	126-03	石製品	硯	SK2317	--	--	--					
360	091-03	青磁	筒	SK2330	15.8	--	--	青	明緑灰	7.5GY7/1	口縁部小片	
361	091-04	陶器	山茶碗	SK2331	底径	5.8	--	中中密 (~4.0mm小石)	灰白	2.5Y8/2	底部ほぼ完整	
362	094-02	陶器	片口鉢	SK2343	--	--	--	青	灰 (~7.0mm小石)	黄灰	2.5Y6/1	口縁部小片
363	094-01	陶器	片口鉢	SK2343	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	灰赤	5YR4/2	口縁部小片	
364	127-01	青磁	筒	SK2343	15.4	--	--	青	暗オリーブ灰	5GY7/1	口縁部1/12	
365	093-04	磁器	甕	SK2343	上部径	2.8	--	青	青みが少=た白		上部完整	
366	093-02	磁器	小器	SK2343	7.2	2.85	--	青	青みが少=た白		口縁部2/12	
367	093-01	磁器	小器	SK2343	7.4	3.2	--	青	青みが少=た白		口縁部3/12	
368	093-03	磁器	小器	SK2343	底径	3.8	--	青	青みが少=た白		底部5/12	
369	093-06	陶器	甕	SK2343	5.2	--	--	青	黄灰	2.5Y8/4	口縁部1/12	
370	093-05	陶器	甕	SK2343	底径	3.8	--	青	灰白	2.5Y8/2	底部ほぼ完整	
371	127-02	土器器	筒	SK2353	--	--	--	青	にしい黄褐	10YR7/4	不明	
372	093-04	陶器	山茶碗	SK2353	--	--	--	中中密 (~4.0mm小石)	灰白	10YR7/1	口縁部小片	
373	096-01	灰陶陶器	筒	SK2354	底径	9.5	--	青	灰白	5Y8/1	底部3/12	
374	096-02	灰陶陶器	水注	SK2354	底径	18.4	--	青	灰白	5Y8/1	底部小片	
375	089-01	瓦瓦	SK2304	縦27.8×横13.8× 厚8.3	--	--	--	中中密 (~5.0mm小石)	灰	N5/	欠損部有	
376	084-01	平瓦		縦30.3×横22.2×厚31.8	--	--	--	中中密 (~7.0mm小石)	灰白	5Y7/1		
377	058-01	陶器	山茶碗	1418P13	18.4	4.2	--	青	黄灰	2.5Y6/3	口縁部5/12	
378	122-01	陶器	壺	SK2304	24.0	--	--	中中密 (0.5~1.0mm砂少)	暗赤褐	2.5YR5/6	口縁部3/12	
379	171-01	石製品	五輪塔火輪		18.2×18.2	12.0	--					
380	030-01	土器器	皿	442P113	--	--	--	青	黄灰	2.5Y8/3	口縁部小片	
381	037-05	土器器	皿	442P113	8.8	1.35	--	中中密 (~3.0mm小石)	浅黄褐	10YR6/3	口縁部3/12	
382	050-02	土器器	皿	442P113	--	--	--	青	にしい黄褐	10YR7/4	口縁部小片	
383	108-01	土器器	皿	1415包	9.8	--	--	青	にしい黄褐	10YR7/3	口縁部6/12	
384	175-03	土器器	皿	530包	--	--	--	青 (~1.0mm砂粒)	10YR7/4	不明		
385	106-04	陶器	人子	429包	底径	4.3	--	青	褐灰	7.5YR4/2	底部7/12	
386	065-04	陶器	小皿	333P15	8.0	--	--	青	黄灰	2.5Y8/3	口縁部3/12	
387	057-01	土器器	筒	118P18	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい黄褐	10YR6/4	口縁部小片	
388	061-01	土器器	明基	331P11	--	--	--	中中密 (~3.0mm小石)	にしい黄褐	10YR7/3	口縁部小片	
389	056-01	土器器	明基	442P113	--	--	--	中中密 (~2.0mm小石)	浅黄褐	10YR8/3	口縁部小片	
390	125-04	土器器	明基	530包	--	--	--	中中密 (~5.0mm砂少)	灰黄褐	10YR5/2	不明	
391	108-05	土器器	明基	430包	21.4	--	--	中中密 (~1.0mm砂少)	にしい黄褐	10YR5/4	口縁部3/12	
392	092-04	陶器	山茶碗	429包	--	--	--	中中密 (~7.0mm小石)	灰白	2.5Y8/2	口縁部小片	
393	057-03	陶器	山茶碗	438P111	14.2	--	--	中中密 (~5.0mm小石)	灰白	2.5Y8/3	口縁部3/12	

第6表 出土遺物観察表⑥



報告書 番号	No.	質	器形	新番号	計測値			胎土	色調	残存		
					口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
394	037-04	陶器	山茶碗	443P113		13.8	4.0	—	肌 (~6.0mm石多)	灰白	5SY7/1	口縁部6/12
395	125-01	陶器	山茶碗	し33包	底径	5.8	—	—	やや肌 (5.0mm砂多)	灰黄	2SY8/3	底部7/12
396	115-01	陶器	片口鉢	441包		—	—	—	肌 (3.0mm砂多)	梅沢	10YR6/1	口縁部2/12
397	010-07	灰産物	片口鉢	49包		18.0	—	—	やや密	灰オリーブ	7.5Y6/2	口縁部2/12
398	135-05	陶器	西耳壺	4216包	底径	13.8	—	—	密	灰黄	7.5Y6/3	底部3/12
399	125-02	陶器	天目茶碗	た25包	底径	4.1	—	—	密	明赤褐	5YR3/2	底部7/12
400	127-04	陶器	新緑小皿	4233包	底径	4.4	—	—	密	灰黄	2.5Y8/4	底部残存
401	087-03	陶器	御皿	工取立金包	底径	6.0	—	—	密 (~2.0mm小石)	灰黄	2.5Y8/3	底部4/12
402	055-01	陶器	膳鉢	4211P12	底径	16.0	—	—	密	黄	7.5YR4/3	底部2/12
403	106-03	陶器	皿	434包		7.0	—	—	密	にしい黄	7.5YR4/6	口縁部6/12
404	115-01	陶器	膳鉢	包	底径	16.3	—	—	やや肌 (1.5~2.0mm砂多)	にしい黄	7.5YR5/6	底部5/12
405	120-01	陶器	壺	412包		—	—	—	やや密 (~2.0mm砂多)	灰オリーブ	5Y6/2	不明
406	128-02	青磁	碗	335P16	底径	5.8	—	—	密	灰オリーブ	7.5Y5/3	底部6/12
407	128-06	青磁	碗	た37包	底径	5.4	—	—	密	灰黄	6Y7/3	底部1/12
408	116-06	陶磁	す37包			—	—	—	密	埋褐	10YR3/4	一部欠損
409	068-03		樋口口	423・34包		—	—	—	やや密	黄	7.5YR7/6	不明
410	123-02	鉄製品	釘	す34包		—	—	—				
411	123-01	鉄製品	釘	し28包		—	—	—				
413	123-04	鉄製品	鉄押	し29包		—	—	—				
413	124-02	鉄製品	鎌	包		—	—	—				
414	123-03	鉄製品	刀子	く37包		—	—	—				
415	114-01	石製品	砥石	包		—	—	—				
416	039-01	縄文土器		△18包		—	—	—	肌 (~3.0mm多)	黄橙	7.5YR7/8	底部小片
417	039-03	縄文土器		△8包		—	—	—	肌 (~3.0mm多)	黄	5YR6/8	底部小片
418	039-02	縄文土器		△8包		—	—	—	やや肌 (~2.5mm多)	黄	2.5YR6/8	底部小片
419	039-04	縄文土器		△8包		—	—	—	肌 (~3.0mm多)	明赤褐	10YR7/8	底部小片
420	073-02	弥生土器	甕	418包		12.4	—	—	やや密	黄	5YR7/6	口縁部1/12以下

第7表 出土遺物観察表⑦

建構番号	旧建構番号	地区名	種別	建物規模	新旧建 建物 様方方向	時期
SI0001	SI03	小4	複式住居	長26.8m・短20.0m・ 幅0.05m	新旧 換装	古蹟 後装
SI0002a	SI04	ふ〜ほ 3〜7	複式住居	長25.7m・ 短23.4m・幅0.30m	古蹟 換装	時期 不明
SI0002b	SI04	ふ〜ほ 3〜7	複式住居	長26.8m・短24.8m・ 幅0.19m	古蹟 換装	時期 不明
SI0003	SI012	ク・ム 12地	複式住居	長27.7m・短23.2m・ 幅0.40m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0004	SI014	ク14、 の・は15地	複式住居	長25.1m・短21.1m・ 幅0.11m	新旧 換装	古蹟 換装
SI0005	SI016	ほ・ま 8・9	複式住居	長26.7m・ 短23.2m・幅0.22m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0006	SI017	へ〜ほ 9〜11	複式住居	長27.2m・ 短25.05m・幅0.06m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0007	SI019	ふ・へ 9・10、 ふ11	複式住居	長25.3m・短24.8m・ 幅0.32m	新旧 換装	古蹟 換装
SI0008	SI020 SI021	へ〜ほ 10〜12	複式住居	長28.2m・ 短24.8m・幅0.23m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0009	SI021 SI029	ク・ム 13・15	複式住居	長26.8m・ 幅0.20m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0010	SI022	ク・ム 13〜14	複式住居	長26.2m・ 幅0.14m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0011	SI023	ク14	複式住居	長23.3m・幅0.14m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0012	SI024 SI029	ク・ム 14・15	複式住居	長24.4m・短23.8m・ 幅0.10m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0013	SI025	複式住居	長25.3m・短23.3m・ 幅0.18m	古蹟 換装	時期 不明	
欠番0014						
SI0015	SI026	ほ14	複式住居	長24.8m・ 短23.6m・幅0.24m	古蹟 換装	時期 不明
SI0016	SI0201	ほ〜の 17・18、 ぬ19	複式住居	長26.8m・短23.3m・ 幅0.26m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0017	SI0201	ほ・ぬ17	複式住居	一辺4.5m角形?	新旧 換装	古蹟 換装
SI0018	SI0203	ぬ・の 21・22	複式住居	長23.7m・幅0.17m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0019	SI0236	ク18、 ク18〜19	複式住居	長24.4m・ 幅0.17m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0020	SI042	ほ・く 30・34	複式住居	長26.2m・幅0.45m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0021	SI043	ほ・く 34・35	複式住居	長24.4m・幅0.42m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0022	SI047	ほ・く37	複式住居	長24.8m・ 短21.1m・幅0.30m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0023	SI048	く30	複式住居	長23.2m・幅0.15m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0024	SI049	ほ33・34	複式住居	長24.4m・ 幅0.12m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0025a	SI040	ほ33	複式住居	長23.0m・幅0.10m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0025b	SI040	ほ33	複式住居	長23.6m・幅0.14m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0026	SI041	ほ・し 31・32	複式住居	長24.8m・ 幅0.33m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0027	SI042	し32、 フ32・33	複式住居	長25.0m・短24.7m・ 幅0.61m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0028	SI043	し・フ 33〜35	複式住居	長23.8m・幅0.43m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0029	SI0474	せ・え 26	複式住居	長22.5m	古蹟 換装	時期 不明
SI0030	SI0475	せ・え 26・27	複式住居	長24.8m・短23.8m・ 幅0.09m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0031	SI0476	フ36、 せ26・27	複式住居	長26.0m・短23.9m・ 幅0.21m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0032	SI0479	フ33・34	複式住居	長26.1m・ 短22.1m・幅0.42m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0033	SI0481	し・フ 30〜32	複式住居	長23.5m・ 幅0.26m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0034	SI0496	く36〜38	複式住居	長28.3m・幅0.38m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0035	SI0498	フ28・29	複式住居	長25.5m・幅0.32m	古蹟 換装	時期 不明
SI0036	SI0499	し28・29	複式住居	長23.0m・幅0.36m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0037	SI0502	し41・42、 く42	複式住居	長25.2m・ 幅0.16m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0038	SI0504	ほ32・33	複式住居	長21.3m・幅0.51m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0039	SI0505	く35	複式住居	長21.3m・幅0.21m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0040	SI0506	く36・37	複式住居	長24.8m・幅0.26m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0041	SI0516	せ35・36、 え35	複式住居	長26.2m・短23.0m・ 幅0.21m	古蹟 換装	古蹟 換装
SI0042	SI03	小4	複式住居	長23.8m・ 短23.5m・幅0.02m	古蹟 換装	古蹟 換装

建構番号	旧建構番号	地区名	種別	建物規模	新旧建 建物 様方方向	時期	
欠番0043	IC70326 〜3329			長27.0m・ 短25.0m・幅0.63m		古蹟 後装	
SI0044	SI04	ク・ム 15・16	複式住居	長23.3m・ 短20.8m・幅0.09m	古蹟 換装	時期 不明	
SI0045	IC0021	せ43・43	複式住居	長24.7m・幅0.09m	古蹟 換装	時期 不明	
SI0046		ほ・ま 8・9	複式住居	長23.0m・幅0.22m	古蹟 換装	古蹟 換装	
SI0001	SI01	ほ〜の 8・15	複式住居	3階×2階 4.5m×4.5m	N24.5°	W 古代	
SI0010	SI02	ほ・ふ 6	複式住居	3階×2階 3m×2.1m	N44.0°	W 古代	
SI0010	SI06	ふ・の 9	複式住居	3階×2階 5.4m×3.6m	N18.5°	W 古代	
SI0014	SI000	ぬ15、ぬ の16地	複式住居	4階×2階 6.3m×4.5m	N26.0°	W 古代	
SI0015	SI004	く19	複式住居	3階×2階 4.2m×4.2m	N10.0°	W 古代	
SI0016	SI014	ぬ・に 21・22	複式住居	3階×2階 5.1m×4.5m	N20.5°	E 古代	
欠番0107	SI026	ク19 20	複式住居	3階×2階			
SI0018	SI027	く20・21	複式住居	4階×2階 5.7m×4.2m	N18.0°	W 古代	
欠番0109	SI028	に20	複式住居				
欠番0110	SI029	に20	複式住居				
SI0111	SI026	の18・19 20	複式住居	3階×2階 5.1m×3.8m	N7.5°	E 古代	
SI0112	SI027	の19	複式住居	4階×2階?	6.4m×4.8m	N1.5°	W 古代
SI0113	SI010	せ・え38 20	複式住居	3階×2階 3.6m×3.6m	N22.5°	E 古代	
SI0114	SI012	せ・え37 20	複式住居	3階×2階 5.1m×3.6m	N25.0°	E 古代	
SI0115	SI029	に20	複式住居	3階×2階 7.5m×6m	N13.0°	E 古代	
SI0116	SI045	て・の 18・19	複式住居	3階×2階 4.1m×3.6m	N11.0°	E 古代	
欠番0117	SI046	つて 19・20					
欠番0118	SI047	た・ち 28・29					
欠番0119	SI048	た・ち 29・30					
欠番0120	SI049	た・ち 31・32					
SI0121	SI040	せ・え 28・29	複式住居	3階×2階 5.1m×3.8m	N1.5°	W 古代	
SI0122	SI011	く19 30〜34、 こ38	複式住居	3階×2階 4.95m×4.6m	N25.0°	E 古代	
欠番0123	SA013	こ・さ34、 こ35					
SI0124	SI014	に15、 ぬ16	複式住居	3階×2階 4.2m×4.2m	N35.5°	W 古代	
SI0125	SI018	せ・え 27・28	複式住居	3階×2階 3.6m×3.6m	N12.0°	E 古代	
SI0126	SI019	フ・し せ・え 31・32	複式住居	4階×4階 7.65m×7.2m		中世	
SI0127	SI020	せ・え 32・33	複式住居	4階×2階 6.3m×3.75m	N7.0°	W 古代	
欠番0128	SI021	フ31、 せ42〜34、 せ42・33					
欠番0129	SI022	せ・え 33〜35					
SI0130	SI023	フ・せ 34・35	複式住居	6階×3階 8.50m×4.8m	N2.0°	W 古代	
欠番0131	SI024	フ34・35					
SI0132	SI025	ほ〜フ 29・30	複式住居	3階×2階 8.4m×4.5m	N0.0°	古代	
欠番0133	SI026	せ・し32、 し33					
欠番0134	SI027	ほ・し 32〜34					
欠番0135	SI028	ほ・し35、 ほ36					
欠番0136	SI029	し40・41					
SI0137		ぬ・の 15・16	複式住居	3階×2階 5.85m×3.75m	N21.0°	E 古代	
SI0138		ク・ム 15〜16	複式住居	3階×2階 6.6m×4.7m	N26.0°	E 中世	
SI0139		ク・ム 11・12	複式住居	3階×2階 4.1m×2.4m	N28.0°	E 古代	
SI0140		ク・ム 8・9	複式住居	3階×2階 3.6m×2.4m	N26.0°	W 古代	
SI0141		ふ・へ 11・12	複式住居	3階×2階 4.7m×3.85m	N9.0°	W 古代	

第8表 遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	地区名	類別	建物形状	掘立柱建物 掘方向	時期
SK0143		ね・013	掘立柱建物	竪×2間	4m×2.85m	N3.0° E
SK0143		甲・4 33・34	掘立柱建物	竪×2間	3m×2.4m	
SK0144	SK029	と～に 24～26	掘立柱建物	竪×2間	6m×4.8m	N12.0° E
SK0145		14・15 15～17	掘立柱建物	竪×2間	7.8m×3.8m	N44.0° E
SK0146		の～フ 12～15	掘立柱建物	竪×2間	11.1m×3.6m	N23.5° W
SK0147		い・4011	掘立柱建物	1間×1間	1.2m×3.15m	N34.0° W
SK0148		と・女 14・15	掘立柱建物	竪×2間	5.6m×3.6m	N22.0° E
SK0149		ア・4 22・23	掘立柱建物	竪×3間	5.8m×5.0m	
SK0150		4～5 31・32	掘立柱建物	竪×1間	7.85m×3.5m	N11.5° E
SK0151		た31・32	掘立柱建物	竪×2間	3.5m×3.4m	N23.0° W
SK0152		931・32	掘立柱建物	1間×1間	3.1m×2.8m	N23.0° W
SK0153		た・530、 531	掘立柱建物	竪×1間	3.25m×3.1m	N17.5° W
SK0154		た29・30	掘立柱建物	竪×2間	4.45m×3.75m	N21.0° E
SK0155		た・5 28～30	掘立柱建物	竪×1間	6.6m×3m	N2.5° W
SK0156		た・528	掘立柱建物	竪×2間	3.6m×3m	N13.0° E
SK0157		ア・4 33・34	掘立柱建物	竪×2間	3.45m×3m	N14.0° E
SK0158		き・し 32・33	掘立柱建物	竪×3間	5.7m×5.1m	N22.0° W
SK0159		き・し 31・32	掘立柱建物	竪×2間	5.1m×3.6m	N3.0° W
SK0160		こ・8 33・34	掘立柱建物	竪×2間	4.8m×3.6m	N0.0°
SK0161		き・し 29・30	掘立柱建物	竪×3間	6.6m×3.15m	N0.0°
SK0162		17・こ 40・41	掘立柱建物	竪×2間	3.8m×3.75m	N6.5° E
SK0163		き39・ 40・41	掘立柱建物	竪×1間	5.6m×2.85m	N31.0° E
SK0164		ア・401、 ア42	掘立柱建物	竪×2間	5.4m×3.45m	N11.0° E
SA3165		き33・34	柱列	3間	0m×0m	古代
SA3166		き35・36	柱列	3間	0m×0m	古代
SA3167		1734・35	柱列	3間	0m×0m	古代
SA3168		き・38	柱列	3間	0m×0m	古代
SA3169		き6～8	柱列	3間	0m×0m	古代
SA3170		へ・186	柱列	4間	0m×0m	古代
SK0171		4118・19	掘立柱建物	竪×1間	3.6m×2.4m	N17.0° W
SK0172		ち・つ 20・21	掘立柱建物	竪×2間	3.2m×2.8m	N19.5° W
SK0173		4023・24	掘立柱建物	竪×2間	4.5m×4.2m	N0.0°
SK0174			掘立柱建物	竪×1間	4.8m×1.5m	N36.0° W
SK0175			掘立柱建物	竪×3間	8.7m×8.6m	
SK0201	SK07	1113	井戸			中世
SK0202	SK08	013	土坑			奈良
SK0203	SK11	015	土坑			奈良
SK0204	SK13	015・16	土坑			時期不明
SK0205	SK15	184	土坑			奈良
SK0206	SK20	117	土坑			近世
SK0207	SK23	1916・17	土坑			中世
SK0208	SK26	1916	土坑			奈良
SK0209	SK26	1915・16	土坑			奈良
SK0210	SK26	46・419	土坑			中世
SK0211	SK28	118	土坑			古墳
SK0212	SK29	222	土坑			古墳
SK0213	SK210	222～24、 223・24	土坑			時期不明
SK0214	SK211	22・23 23・24	土坑			古墳
SK0215	SK212	22～46 21～23	土坑			古墳
SK0216	SK213	222・23	土坑			古墳
SK0217	SK216	419	土坑			時期不明
SK0218	SK217	419・20	土坑			時期不明

遺構番号	旧遺構番号	地区名	類別	建物形状	掘立柱建物 掘方向	時期
SK0219	SK218	130	土坑			時期不明
SK0220	SK220	ね・017	土坑			時期不明
SK0221	SK221	ね・018	土坑			古墳
SK0222	SK222	ね・018	土坑			古墳
SK0223	SK223	119・20	土坑			時期不明
SK0224	SK225	つ・27	土坑			古墳
SK0225	SK226	018	土坑			古墳
SK0226	SK234	け・19・20	土坑			古墳
SK0227	SK236	ね・421	土坑			時期不明
SK0228	SK204	け・20	土坑			古墳
SK0229	SK205	こ・30	土坑			奈良
SK0230	SK206	こ・30 30・40	土坑			古墳
SK0231	SK207	し・29	土坑			古墳
SK0232	SK208	き37・38	土坑			時期不明
SK0233	SK209	230	土坑			時期不明
SK0234	SK211	408	土坑			古墳
SK0235	SK217	え・20	土坑			古墳
SK0236	SK218	230	土坑			古墳
SK0237	SK219	143	土坑			近世
SK0238	SK220	441	土坑			時期不明
SK0239	SK222	430	土坑			古墳
SK0240	SK223	734	土坑			時期不明
SK0241	SK225	437	土坑			時期不明
SK0242	SK226	843・44	土坑			古墳
SK0243	SK240	ね・414	土坑			時期不明
SK0244	SK242	1738・19	土坑			
SK0245	SK243	1738・19	土坑			時期不明
SK0246	SK242	218	土坑			中世
SK0247	SK243	1738	井戸			中世
SK0248	SK244	1738	井戸			近世
SK0249	SK245	ち・22	土坑			古墳
SK0250	SK246	723	土坑			古墳
SK0251	SK247	723	土坑			古墳
SK0252	SK248	723	土坑			時期不明
SK0253	SK249	つ・24	土坑			古墳
SK0254	SK250	723	土坑			古墳
SK0255	SK251	ち・つ 24・25	土坑			古墳
SK0256	SK252	423	土坑			時期不明
SK0257	SK253	513	土坑			時期不明
SK0258	SK254	115・16	土坑			時期不明
SK0259	SK255	516	土坑			古墳
SK0260	SK256	517・28	土坑			古墳
SK0261	SK257	727	土坑			時期不明
SK0262	SK258	ち・29	土坑			時期不明
SK0263	SK242	1738	井戸			奈良
SK0264	SK243	1738	井戸			奈良
SK0265	SK244	1738	井戸			奈良

第9表 遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	地区名	類別	建築物名	創立時期 建築物 敷方向	時期
SK3286	SK454	8・35・36	階式住居			古墳後期
SK3287	SK455	△35	階式住居			時期不明
SK3288	SK456	△36				古墳後期
SK3289	SK464	8・1・34	土坑			時期不明
SK3290	SK465	1・35	土坑			古墳後期
SK3291	SK466	1・35	土坑			古墳後期
SK3292	SK467	8・37	土坑			古墳後期
SK3293	SK470	4・33	土坑			古墳後期
SK3294	SK471	4・34	土坑			中世
SK3295	SK482	1・29	土坑			古墳後期
SK3296	SK487	9・29・30	土坑			時期不明
SK3297	SK488	9・29	井戸			奈良
SK3298	SK490	た・5 28・29	土坑			時期不明
SK3299	SK494	た27	土坑			時期不明
SK3300	SK495	た30	土坑			中世
SK3301						
SK3302	SK501	8・30・31	土坑			古墳後期
SK3303	SK503	△42	土坑			古墳後期
SK3304	SK507	1・31	土坑			奈良
SK3305	SK508	△31	土坑			時期不明
SK3306	SK509	8・31	土坑			近代
SK3307	SK510	△36	土坑			時期不明
SK3308	SK512	6・た31	土坑			時期不明
SK3309	SK515	△34	土坑			古墳後期
SK3310	SK517	4・30・31	井戸			中世
SK3311	SK6	へ・12 9・13、 19・11、 4・9～11、 11・12	溝			中世
SK3312	SK9	△～49	溝			中世
SK3313	SK10	4・11	溝			古墳後期
SK3314	SK202	ね・の12	溝			中世
SK3315	SK206	4・17～20、 △～の20	溝			近代
SK3316	SK215		溝			近代
SK3317	SK219	△22～24	溝			中世
SK3318	SK224	て・△ 25～28	溝			近世
SK3319	SK301	8・38～42、 1・41～44、 4・43	溝			近世
SK3320	SK314	4・36、 17～8・38、 1～4・27、 8～17・39	溝			近代
SK3321	SK303	△39～42、 17・38・39・ 42・43、 △・8・38	溝			近世
SK3322	SK315	4・37・4・36	溝			古墳後期
SK3323	SK316	4・35	溝			古墳後期
SK3324	SK321	4・42	溝			時期不明
SK3325	SK324	8・し 40・41	溝			時期不明
SK3326	SK326	4・37	溝			時期不明
SK3327	SK401	て19～21、 △16～21	溝			中世
SK3328	SK402	△11	溝			時期不明
SK3329	SK403	△・4・12	溝			時期不明
SK3330	SK404	△14・15	溝			中世
SK3331	SK405	△15	溝			時期不明
SK3332	SK406	△15～17	溝			古墳後期
SK3333	SK407	△17・18	溝			中世

遺構番号	旧遺構番号	地区名	類別	建築物名	創立時期 建築物 敷方向	時期
SK3334	SK408	4・4・13	溝			時期不明
SK3335	SK409	4・4・13	溝			時期不明
SK3336	SK411	4・14・15	溝			時期不明
SK3337	SK412	4・15・16	溝			古墳後期
SK3338	SK413	△13、 △・4・16	溝			古墳後期
SK3339	SK414	△16・17	溝			時期不明
SK3340	SK415	△17～20	溝			時期不明
SK3341	SK416	△21、 △22・23、 △24	溝			中世
SK3342	SK417	△13	溝			時期不明
SK3343	SK420	て・△18	溝			古墳後期
SK3344	SK421	△18～21、 △21	溝			奈良
SK3345	SK422	△18～30	溝			古墳後期
SK3346	SK441	△29	溝			時期不明
SK3347	SK444	△21	溝			古墳後期
SK3348	SK468	△28・29、 4・30	溝			近世
SK3349	SK469	4・31～33	溝			中世
SK3350	SK472	4～4・28	溝			中世
SK3351	SK473	4・せ 27・28、 せ29	溝			中世
SK3352	SK477	せ25	溝			不明
SK3353	SK478	せ26～29、 せ29～33、 た33	溝			近世
SK3354	SK480	4・せ30	溝			時期不明
SK3355	SK483	4・せ34、 た33、 せ35・33	溝			近世
SK3356	SK484	た～つ30	溝			古墳後期
SK3357	SK485	4～つ30	溝			近世
SK3358	SK486	4～て30	溝			古墳後期
SK3359	SK489	4・た30、 た・せ29	溝			古墳後期
SK3360	SK491	せ～つ28	溝			近世
SK3361	SK492	せ・4・28、 4・29～30	溝			時期不明
SK3362	SK493	せ・4・29	溝			時期不明
SK3363	SK497	4・せ28、 せ29	溝			中世
SK3364	SK500	8・29・30	溝			中世

第10表 遺構一覧表③

## VI 発掘調査のまとめと考察

### 1 遺構の変遷

#### (1) 弥生時代後期

第3次・第4次発掘調査では、当該時期の竪穴住居5棟、掘立柱建物1棟を確認した。第1次・第2次発掘調査で確認している竪穴住居とあわせると、東西100m、南北150mほどの丘陵上に、多くの竪穴住居が存在していたことになる。これらの竪穴住居はいずれも弥生時代後期後葉のものであり、この時期の集落の変遷を窺うことができる。

#### (2) 古墳時代後期～平安時代

当該時期の竪穴住居38棟、掘立柱建物47棟を確認した。これらはおおむね7世紀後半から8世紀までのもので、建物方位から4期ほどの変遷を追うことができる。東隣の菟上遺跡と比較すると、西ヶ広遺跡はやや遅れて遺構が現れ、やや遅くまで存続することが窺える。

旧朝明郡では先に述べた西ヶ広遺跡・菟上遺跡の

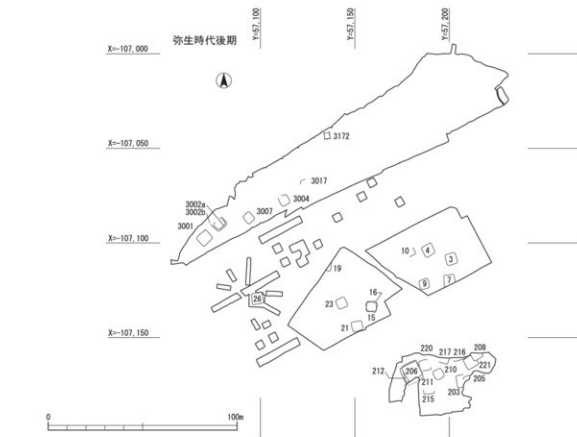
ほか、久留信遺跡・城ノ広遺跡・縄生庵寺などで発掘調査が行われ、集落・寺院・官衙の状況が明らかになりつつある。西ヶ広遺跡の調査成果により、古代朝明郡の地域構造がさらに明らかになるものと考えられる。その後9世紀から13世紀まで西ヶ広遺跡では集落は廃絶する。

#### (3) 南北朝時代～戦国時代

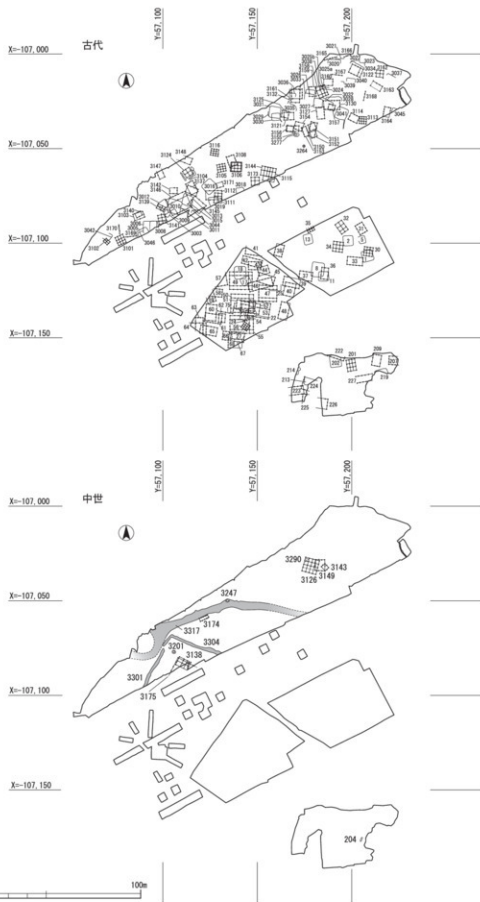
当該時期の掘立柱建物6棟、井戸3基、区画溝、道路遺構を確認した。

このうち、SD3301・3304は居館を囲む溝であり、道路遺構に面して虎口を持っている。内部には主屋(SB3138、3175)があり、井戸(SE3201)も同時期のものである。虎口から120mほど西にある西ノ広城跡との関連も注目できる。居館は15世紀末頃には廃絶し、さらに北の伊坂城跡に移った可能性が考えられる。

(竹田憲治)



第61図 弥生時代後期の遺構 (1:2,000)



第62図 古代・中世の遺構 (1 : 2,000)

## 2 弥生時代後期の集落と竪穴住居

### (1) 竪穴住居の時期

第3次・第4次発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居5棟を検出した。それ以前の第1次・第2次調査で確認されているものを含めると、竪穴住居の数は17棟になる。それらを時期別にみると、第3・4次調査部分の竪穴住居は、清水編年のI-①～②期、(上村編年のV-3～4期)にあたる。これに対し、第1次・第2次調査部分の竪穴住居は清水編年のI-③期(上村編年のV-5期)のものが主体を占める。弥生時代後期後葉の段階で、丘陵の奥部分から比較的低位部分への集落の移動が行われた可能性がある。

### (2) 竪穴住居の構造

**平面プラン** 第3次・第4次調査で確認した竪穴住居の平面には、長方形のもの(SH3001、3002、3007)と正方形のもの(SH3004)がある。長方形のものは、長辺:短辺の比率が1.1:1前後のものが多い。

これに対し、第1次・第2次調査で確認した竪穴住居は、正方形に近いものが主体を占める。弥生時代後期の竪穴住居の平面プランが、長方形のものから正方形のものに移行していく傾向は、以前から指摘されているが<sup>1)</sup>、西ヶ広遺跡での竪穴住居の平面プランの変遷もこれと一致するものである。

またSH3017は、古墳時代の竪穴住居SH3016により大部分が破壊されているが、コーナー部は、明らかに鈍角であり、津市四ツ野B遺跡<sup>2)</sup>、名張市坂之上遺跡<sup>3)</sup>、四日市市山奥遺跡<sup>4)</sup>、同菟上遺跡<sup>5)</sup>で検出されているような五角形プランの可能性もある。

山奥遺跡・菟上遺跡とも、西ヶ広遺跡と同じ朝明川流域にあり、三重県内ではこの地域が五角形住居の集中地域といえる。五角形住居の受容については、清水政宏氏が、近江からの伝播ではないかと指摘されているが<sup>6)</sup>、西ヶ広遺跡での五角形住居は、この指摘をさらに裏付けるものであると思われる。

**貯蔵穴** 西ヶ広遺跡で確認している竪穴住居は17棟ある。これらはいずれも南壁の中央付近に貯蔵穴を持っている。このような傾向はほぼ同時期の伊勢湾西岸の竪穴住居で指摘されている。そのことを確認するため、弥生時代後期の集落遺跡<sup>7)</sup>における竪穴

住居の貯蔵穴の有無を示したのが第63図上である。

これを見ると、西ヶ広遺跡の竪穴住居の88%が決まった位置に貯蔵穴を持っていることがわかる。この割合は、天花寺丘陵遺跡群でもほぼ同じ(90%)である。四ツ野B遺跡では、当該時期のすべての竪穴住居が貯蔵穴を持っている。北野遺跡では割合は若干下がる(61%)ものの、弥生時代後期の集落では、ほとんどの遺跡の竪穴住居が貯蔵穴を持っていることが理解できる。

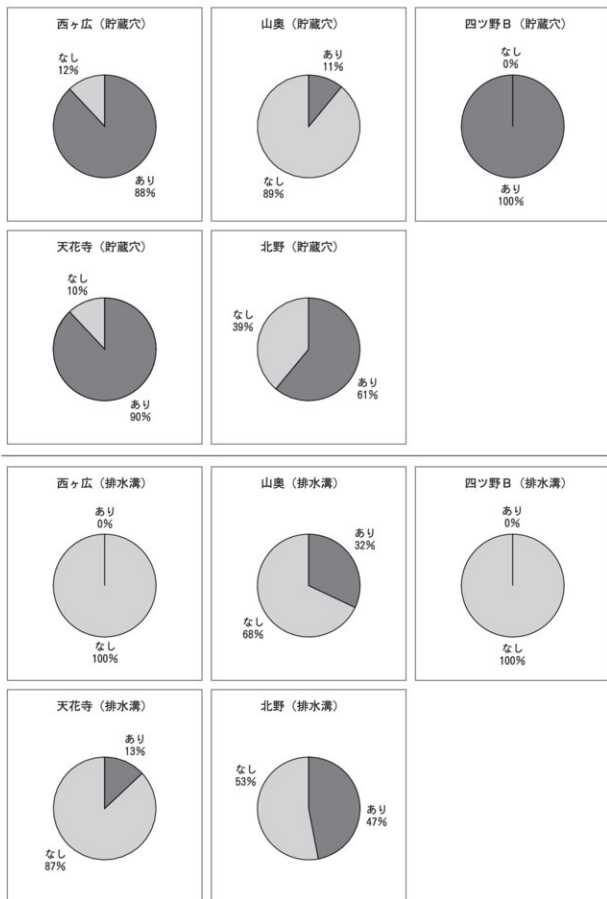
これに対し、山奥遺跡では、同時期でありながら11%の竪穴住居しか貯蔵穴を持っていない。これが何に起因するものなのかはわからないが、山奥遺跡の性格を考える上で重要な要素になると思われる。**排水溝** 西ヶ広遺跡の竪穴住居にはみられなかったが、弥生時代後期の竪穴住居では、排水のためと思われる溝(排水溝)が多く確認される。この有無を示したのが第63図下である。これらの遺跡は、すべてが丘陵ないし台地上の遺跡で基盤層の土質も似る。

排水溝を全く持たないのは西ヶ広遺跡、四ツ野B遺跡である。西ヶ広遺跡と四ツ野B遺跡は、五角形住居の存在、貯蔵穴採用・排水溝をまったくもたない点などで共通する部分が多い。

天花寺丘陵内遺跡群は4棟(13%)の竪穴住居に排水溝がある。この4棟は丘陵北端に固まっており、南の竪穴住居群では排水溝をもつものは全くない。

**まとめ** いくつかの要素から弥生時代後期の集落遺跡をみてきたが、伊勢湾西岸の弥生時代後期集落の共通項目として、平面形が長方形プランのものから、正方形プランのものに変化する傾向があること、貯蔵穴は多くの竪穴住居で採用されるが、例外的な遺跡(山奥遺跡)も存在すること、排水溝は同様な立地・土質であっても採用する集落としない集落があることなどを確認することができた。今後は、これらの共通性・非共通性が何に起因するものかということを考えていく必要があると思われる。

(竹田憲治)



第63図 弥生時代後期各遺跡の竪穴住居貯蔵穴・排水溝



### 3 西ヶ広遺跡における古代集落の様相

西ヶ広遺跡では過去の1次・2次調査を含め、住居跡を152棟確認している<sup>8</sup>。住居の中心は1次調査区付近とみられ、今回の調査区では1次調査区ほどの密集性はみられない。立地傾向としては1次調査区に連なると考えられる部分と幅20mの空地をおいて北東にまとまっている。この空地は小規模な谷が入ってきていると考えられ、北東部のまともりは北西部に比べやや標高が高い。ここでは過去の調査も踏まえて遺構の変遷を追い、遺跡の性格を考えてみたい。

#### (1) 竪穴住居

古墳時代後期～古代の竪穴住居は今回の調査で38棟を確認した。このうち規模が確定できたものは10棟ある。

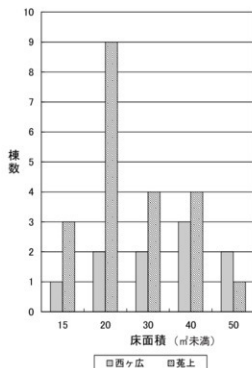
**立地** 北西部・北東部ともにみられ、どちらかに集中することはない。よく似た位置での複数棟の重複や明かな拡張もみられる。

**平面形態と規模** 正方形を呈するものと長方形を呈するもの2種類が存在する。床面積は20㎡未満が3棟、20㎡以上が7棟で、比較的規模の大きい住居が多い。これは、規模が確定できない他の住居でも一辺が7m以上と長いものが多く、規模の大きい住居はもっと増えると思われる。同時代で隣接する菟上遺跡<sup>9</sup>では規模を確定した竪穴住居21棟のうち、20㎡未満が12棟、20㎡以上が9棟であり、西ヶ広遺跡の方が規模の大きい竪穴住居が多いといえる。一方で、長方形タイプの方が、規模が小さい傾向がみられ、ほとんどが20㎡未満である(第65図参照)。これは菟上遺跡でも同様の傾向があった。時期的にも長方形タイプの方がやや新しい傾向を示し、この点も菟上遺跡と同じである。

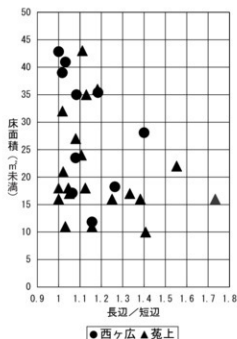
**主柱穴**は正方形タイプ、長方形タイプともに4基確認しているものが多い。周溝は全周まわるものが多く、おそらく大半が全周まわるものと推定している。周溝から排水溝が南方向に延びているものもみられる。

**火灶** 竪全体を確認したものは7棟、焼土のみを確認したものは9棟、全く確認できなかったものが22棟ある。焼土の位置は住居の中心付近ではなくいず

れかの壁よりであることから竪痕跡と考えられる。竪の住居内の位置は北壁・西壁・東壁の中央があり、北壁が最も多く9棟ある。次いで東壁に5棟確認している。竪は周溝を掘削した後に浅い土坑を掘り、その上に敷設されている。



第64図 竪穴住居の面積



第65図 竪穴住居平面形態と床面積

## (2) 掘立柱建物

今回の調査では掘立柱建物を47棟確認している。

建物の基本的な平面形式は桁行き4間以上の主屋建物と考えられる建物を13棟、倉庫と考えられる建物を29棟確認した。これに1次・2次調査の建物を合わせると主屋建物43棟、倉庫建物46棟となる。いずれも掘立柱建物で、礎石建ちの建物はない。また瓦も出土しておらず、瓦葺の建物も存在しなかったと考えられる。ここでは、規模の確定できたものについて傾向をみていきたい。

### ①主屋建物

**庇付建物** 今回の調査では2棟確認している。SB3122は桁行3×梁行2の身舎の東側（妻側）に1間の庇を持ち、SB3146は桁行4×梁行2の身舎の北側（平側）に1間の庇を持つ。どちらも桁間・梁間の柱間寸法は7～10尺と、他の主屋建物よりも広い傾向がある。過去の調査では3方に庇を持つ桁行6×梁行3と遺跡最大の建物が3棟確認されている。他にも2面庇の建物が1棟と1次調査区に集中して確認されている。

**規模** その他の主屋建物は桁行4～5、梁行2～3のものが多い。建物の床面積は25～40㎡の間に集中し、飛びぬけて大きなものはない。

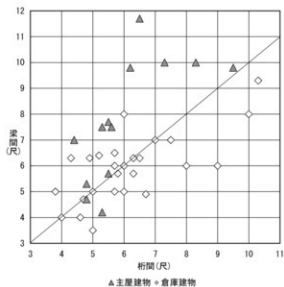
**柱間寸法** 桁間が5～7尺、梁間が5～10尺を測り、いずれも完数尺をとるが、やや梁間が広い傾向がみられる。

### ②倉庫建物

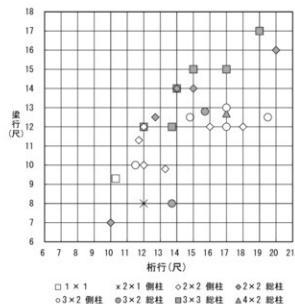
**平面規模** 平面規模は2×2～4×2のものがあるが、2×2もしくは3×2が多く倉庫建物の55%を占める。平面形は正方形を呈するものよりも長方形を呈するものが多い。建物の床面積は10～20㎡の間に集中するが、25㎡を超えるものも存在する。

**平面型式** 「倉」と呼ばれる総柱建物と、「屋」と呼ばれる側柱建物の2種類が存在する。構成比率をみると2×2ではほぼ半数だが、3×3ではほぼ総柱建物となっている。これは瓦上遺跡でも同様の傾向がみられ、規模が大きいかほど総柱建物となっている。

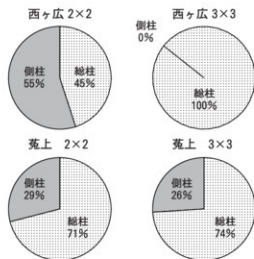
**布掘** 布掘り溝をもつ倉庫建物を1棟確認している。県内では斎宮跡で7棟<sup>9)</sup>、久留倍遺跡でも2棟確認されている<sup>10)</sup>。



第66図 掘立柱建物の柱間寸法



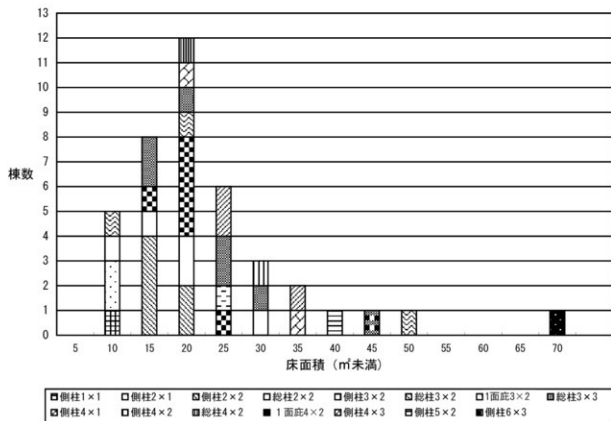
第67図 倉庫建物の規模分布



第68図 倉庫建物の平面構成比率

	1 × 1	2 × 1	2 × 2		3 × 2			3 × 3		4 × 1	4 × 2		4 × 3		5 × 2		5 × 3		6 × 2	6 × 3		7 × 3	8 × 3
床面積 (㎡未満)	側柱	側柱	側柱	総柱	側柱	総柱	1 面庇	側柱	総柱	側柱	側柱	側柱	1 面庇	側柱	側柱	1 面庇	側柱	2 面庇	3 面庇	側柱	側柱	側柱	側柱
5																							
10	1	2		1		1																	
15			4	1	1	(1)			2	(1)	1												
20			2	(1)	2		4	1		(2)	1			1									
25					(1)	1	(1)		1	2	(1)				2								
30				1		(1)	(1)	(1)	1	(2)	1	1	1			(2)							
35										(1)		(1)		1	(1)								
40											(1)				1	(1)							
45										(1)					(1)		(1)	(1)	(1)	(1)	1	(1)	(1)
50						1								(1)			(1)	(1)					(1)
55																(1)		(1)					
60																		(1)					
65																	(1)						
70													1										

第11表 掘立柱建物の規模一覧 (( )内は1・2次調査分、庇付建物は身舎の面積を示した。)



第69図 掘立柱建物の床面積

柱間寸法 3.5～10尺を測るが、いずれも完数尺をとり4～6尺の間に集中する。桁間、梁間が等間をとるものも多く、梁間と桁間なら桁間の方が広い傾向がある。

柱穴 総柱建物には外側の柱と内側の柱の太さが同じものと違うものの2種類が見られる。山中氏の分類では前者をⅠ類、後者をⅡ類とし、Ⅱ類は外側が通柱、内側が束柱構造をとるとされている<sup>9)</sup>。SB3101やSB3106はⅡ類にあたり、内側の柱の方が掘りかたが浅い傾向がみられる。

### (3) 遺構の変遷

1次・2次調査の結果も合わせ、遺構の変遷をみていく。今回の調査結果については重複関係や棟方向、出土遺物などから判断したが、過去の調査ではそれらのデータがはっきりせず、ここでは棟方向のみから判断せざるを得なかった。暫定的なものとして提示するに留めたい。

#### 第1期（7世紀前半～半ば）

菟上遺跡の第4-2期から第4-3期にかけてにあたる。西ヶ広遺跡では古代の集落の初現である。竪穴住居、掘立柱建物がみられる。住居は今回の調

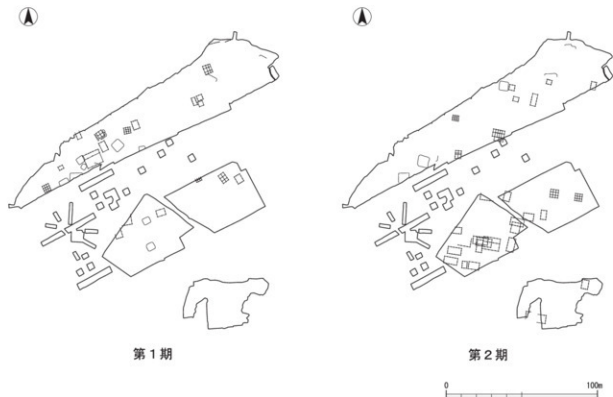
査区の北西部にやや集中する傾向がみられ、掘立柱建物よりも竪穴住居に中心があったようである。竪穴住居も大きめのものが多く、掘立柱建物も倉庫建物がほとんどである。

#### 第2期（7世紀後半～）

菟上遺跡第4-4期にあたる。徐々に建物が南側つまり、1次調査区の方へ集中していく傾向がみられる。建物自体も竪穴住居から掘立柱建物中心と移っていくのだが、竪穴住居が完全なくなるわけではない。

#### 第3期（8世紀前半～）

菟上遺跡の第5期にあたる。建物の棟方向を正方位に揃える。1次調査区では大きい掘立柱建物が立ち並ぶ。完全に遺跡の中心はこちらへ移り、今回調査区では大きな建物はみられない。しかし空地20mを隔てて、北東部に竪穴住居と掘立柱建物がややまとまって位置し、北東部にも確実に広がり確認できる。また、遺跡中心地では何度か同じような位置で建て替えがみられる。但し、菟上遺跡で見られたような主屋建物+倉庫建物といったセットは分かりにくい。建物の規模や棟数の割には倉庫建物が少



第70図 遺構の変遷① (1:2,500)

ない印象を受ける。

#### 第4期（8世紀後半～）

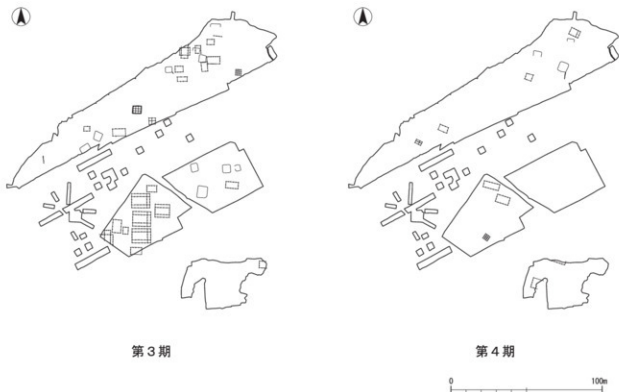
菟上遺跡ではこの時期の遺構はみられなかった。西ヶ広遺跡でも段々少なくなはるが遺構として確認できる。住居の集中は北東部に移り、北西部には数棟が見られる程度である。1次調査区でみられた大規模な建物は姿を消す。集落としては一時期の終焉を迎えつつある。この後、遺跡は14世紀に入るまで人々の営みが断絶する。

これから、遺跡の大きな画期は第3期と考えられる。7世紀後半から8世紀初頭にかけて大規模な建物が棟方向や規模を揃えて立ち並ぶ。施設を圍繞する施設こそないものの、3方に庇を持つ建物は一般の集落で見られるものではなく、その用途がひいては遺跡の性格を決定付けるといえよう。第2～3期にかけては建物の棟方向が地形と関係なくほぼ北方向を向くが、それ以外の時期は地形に規制されたか北から約20°西もしくは東に振れている。また、特徴として居住施設としては全時期を通じて竪穴住居が見られることがあげられる。基本的に竪穴住居から掘立柱建物に移ってはいくものの、完全には移

行しなかったようである。菟上遺跡では倉庫建物の秩序だった配置が見られたが、西ヶ広遺跡ではそのような配置はみられない。

#### (4) 集落の評価

ここまでの検討を踏まえて、古代西ヶ広遺跡の性格を考えてみたい。西ヶ広遺跡は過去2回の調査結果を合わせてみても、おおむね7世紀から8世紀後半にかけての遺跡であり、9～13世紀にかけては集落としての機能を停止している。集落としての存続期間は150年程度と思われる。7世紀から8世紀にかけては国家形成期に当り、西ヶ広遺跡が公的な性格を有しているかどうかの一つの鍵となつてこよう。同時期の周辺の特筆すべき遺跡として、同じ朝明川北岸の朝日丘陵上に位置し、約1.2km東に位置する菟上遺跡と、朝明川南岸の垂坂丘陵上に位置する久留信遺跡があげられる。菟上遺跡は当事業に伴い発掘調査が行われ、西ヶ広遺跡よりやや先行する有力者の集落遺跡として考えられている<sup>3)</sup>。久留信遺跡は近年の開発に伴う発掘調査が行われ、『日本書紀』にもみえる「朝明郡家」=朝明郡衙であることがほぼ確定された<sup>4)</sup>。西ヶ広遺跡も久留信遺跡が調査さ



第71図 遺構の変遷② (1:2,500)

れるまでは過去の調査で発見された3方庇の建物や、建物の配置から朝明郡衙ではないかとの想定もなされたが、久留信遺跡の調査によってその見解はすでに否定されているといつてよい。そこでこの3遺跡を同じ条件で比較してみて西ヶ広遺跡の性格を述べてみたい。

古代の官衙・豪族居宅遺跡の条件として山中氏・石毛氏の整理<sup>2)</sup>で抽出された条件に即して3遺跡を比較してみる。

**圍繞施設** 西ヶ広遺跡・菟上遺跡では遺跡を圍繞するような施設は発見されていない。但し未調査部分にそうした施設があった可能性は残されている。一方、久留信遺跡では政庁は塀、正倉は溝で圍繞されている。

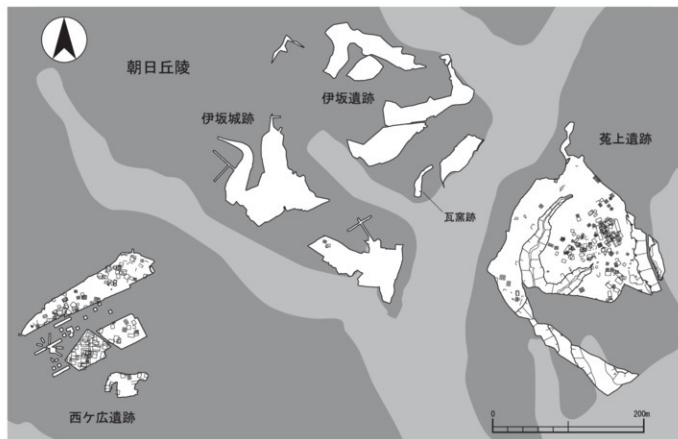
**建物の種類** 3遺跡とも瓦葺、礎石建の建物は存在せず、全て孤立柱建物である。西ヶ広遺跡・菟上遺跡では孤立柱建物と堅穴住居が混在していたようである。

**建物の規模** 孤立柱建物の平面積を比べてみると西

ヶ広遺跡では中枢部の大きな建物（SB45・49・50）を除くと45㎡未満、倉庫建物では20㎡に集中している。**建物の構成・配置** 久留信遺跡は、政庁部分は左右対象のロ字形、正倉部分も今のところ溝でロ字形に圍繞された中にL字状に倉庫が配置されている。菟上遺跡は4棟以上で構成されL字状の配置をとっており、倉庫群は主屋に対し北・西側に配置されている。一方で西ヶ広遺跡では主屋や倉庫群がまとまって配置されているようにはみえない。中枢部分はたしかに柱筋や建物方向を揃えているが、久留信遺跡ほど全体に波及しているわけではない。同じ丘陵上でも菟上遺跡は平坦な面が広く、西ヶ広遺跡は狭いという地形上の制約があったかもしれない。

また、配置の踏襲という点では、西ヶ広遺跡・菟上遺跡はどちらも踏襲されているとは言いがたい。30～50年程度のスパンでまったく違う棟方向・配置がとられており、短期間で機能が変化していると考えられる。

**出土遺物** 指標となる遺物には①文字関係資料、②



第72図 西ヶ広遺跡周辺の古代

須恵器大甍や大量の食器、③製塩土器、④施釉陶器、仏具など奢侈的遺物、⑤工房関係遺物、⑥武器・武具などがある。久留倍遺跡は現状では、出土遺物が非常に少ないため不明な部分が多い。一方で菟上遺跡は、礎はあるものの墨書はない、②・③・⑤は多少みられるといったところである。西ヶ広遺跡でも①礎はあるが墨書遺物はない、③は少量あるという点で菟上とよく似てはいる。

こうした条件を比較した結果、西ヶ広遺跡は官衙遺跡である久留倍遺跡よりも、豪族居宅遺跡と考えられる菟上遺跡に近い性格を持つと考えられる。出土遺物や遺構配置の点からも官衙遺跡というにはやや弱いといわざるを得ない。

菟上遺跡との違いは、時期はもちろんのこと、遺構配置にまともさがみられない点があげられる。菟上遺跡は主屋建物の北もしくは東に数棟の建物が柱筋をほぼ並べて配置されている。西ヶ広遺跡では主屋と倉庫の関係がはっきり見えず、配置の点でもまとまらない。ここから豪族居宅よりも一般集落とみることできる。しかし、菟上遺跡は西ヶ広遺跡よりやや古く、公的・私的施設の区別がはっきりして

いない可能性が高いことや、1次調査区にみられる3面庇の建物の存在などから、豪族居宅の可能性を否定することはできない。

時期に関しても今回は猿投産須恵器の編年を用い、在地産の須恵器の編年は検討していない。従って、今後在地産須恵器の編年が確立すれば絶対年代に変更が生じる可能性はある。しかし相対的にみて菟上遺跡と西ヶ広遺跡では、西ヶ広遺跡のほうが新しいといえよう。菟上遺跡が集落として終焉を迎える頃、西ヶ広遺跡では大規模な建物が見られるようになることから、朝明川の北岸では公的・私的は不明だがある一定の権力が菟上遺跡から西ヶ広遺跡へと移動したと位置づけたい。朝明郡という視点で見れば、対岸の久留倍遺跡のような公的施設とそれに匹敵するような施設が7世紀から8世紀にかけて並び立っていたといえよう。今後、末端行政組織や豪族居宅の研究が進んでくれば、これらの関係も含め、遺跡の新たな位置づけができると思われる。

(角正淳子)



第73図 久留倍遺跡遺構配置図(註9より引用)

## 4 中世後期の居館跡について

調査区の西側で、掘立柱建物2棟(SB3138、3175)と井戸(SE3201)、周囲をめぐる溝(SD3301、3304)を確認した。これらは居館内の建物・井戸・周溝である可能性が高い。本項ではそれらの変遷と周囲の遺跡とのかかわりを考察したい。

### (1) 規模

SD3301・3304の長さから、一辺が30m以上であったことは確実である。明治期の地籍図などにより、調査区外への延長をとらえようとしたが判然としなかった。

### (2) 構造

**掘立柱建物** 居館に関連する掘立柱建物は2棟確認している(SB3138・3175)。両者の前後関係は不明であるが、SB3175は桁行4間以上、梁行3間以上の大規模なものであり、主屋建物になる可能性が高い。

**井戸** SE3201は中世の井戸の中では唯一の石組井戸である。埋土から出土した常滑製品の甕(378)と平瓦(376)が周溝SD3304出土の破片と接合できた。両者の廃絶時期を表すものであろう。

**周溝** SD3304は東西方向に掘られた溝であるが、西端で南に向きを変え、しばらくしたところで途切れ、SD3301はその1m程南からはじまる。前述のように、溝SD3304出土遺物と井戸SE3201出土遺物が接合できた。

**虎口** SD3301と3304の間の部分が居館への虎口になると思われる。この部分は、西から谷を登ってきた道と東から尾根を横断してきた道の交差点に近い。この虎口を出て、道をまっすぐに120mほど山を登ると、西ノ広城跡の虎口にたどり着く。虎口が西北隅近くに造られるのは、西ノ広城への最短の場所を選んだためであると思われる。ただし、この虎口はあくまでも山上の城に向かうための「搦手口」で、居館の「大手口」は、東側あるいは南側にあった可能性が高い。

また、この虎口は道からまっすぐに館跡に入ることができない「喰い違い」の形状をなす。後述するように居館の廃絶は15世紀末から16世紀初頭と考えられる。すでにこの時期の虎口が喰い違いの形状を

なしていることは注目すべきである。

### (3) 時期

居館出土の遺物は、居館廃絶時に廃棄されたものと思われる。そのため居館の成立時期を明らかにするのは困難である。ただし周溝SD3304出土遺物の中にはほぼ完形の火燵・大洞新段階の東濃型山茶椀(377、14世紀中葉から後葉)がある。消極的な材料ながら、居館の成立はこのころにならうか。

これとは逆に、廃絶の時期はある程度明らかにできる。周溝SD3304から出土した常滑製品の第11型式初頭の甕(378、15世紀末～16世紀初頭)の破片は、井戸SE3201出土の個体と接合することができた。この状況から、周溝・井戸の同時廃絶＝居館の機能停止＝時期は15世紀末から16世紀初頭という図式を導き出すことができる。

### (4) 西ヶ広遺跡から伊坂城跡へ

前項では、西ヶ広遺跡の居館が15世紀末から16世紀初頭に廃絶することを明らかにした。これに対し西ヶ広遺跡の北の尾根上に位置する伊坂城跡では15世紀末から16世紀に城郭とそれに付属する屋敷地帯が形成される。ここでは、両遺跡の動向を比較し、それぞれの消長を明らかにしたい。

比較を行う前に、その前提となる状況と問題点をおさえておく。まず出土した瀬戸美濃製品の破片数は、伊坂城跡が839片、西ヶ広遺跡が69片である。両者を比較するために、遺跡毎にそれぞれの時期の瀬戸美濃製品の割合を「%」で現すが、両者の出土量の絶対数には12倍ほどの差がある。

つぎに西ヶ広遺跡で発掘調査を行った部分は、居館とその周辺であり、伊坂城跡では、被官層の屋敷地である。西ヶ広遺跡の調査部分は伊坂城跡なら主郭にあたる部分である。以下の分析は、両者を単純に比較するという問題点を内包するものであるということと述べておく。

第75図左上は西ヶ広遺跡の瀬戸美濃製品を時期別にしたものである。瀬戸美濃製品は、古瀬戸中期から一定量が出土し、増減を繰り返しながら推移する。その後、古瀬戸後Ⅳ期新段階には量的なピークを迎える。しかしその後、瀬戸美濃製品の量は激減し、







はっきりと大窯製品といえる破片は一つもない。

これに対し、第75図左下の伊坂城跡では、古瀬戸後Ⅳ期古段階以前の瀬戸美濃製品はほとんどない。一定量の瀬戸美濃製品が出土しはじめるのは古瀬戸後Ⅳ期新段階からで、大窯第1段階に最も多い時期を迎える。その後は減少しながら大窯第4段階後半までの瀬戸美濃製品が出土する。この二つのグラフを比較すると、15世紀末から16世紀初頭に西ヶ広遺跡から伊坂城跡への移動が行われたように見える。

第75図右は西ヶ広遺跡と伊坂城跡出土の古瀬戸製品を器種別にあらわしたものである。西ヶ広遺跡では様々な器種がみられる。特に日用品と思われる皿類、盤類、搦鉢の比率が高いという特徴がある。これに対して伊坂城跡では、器種のバリエーションが少ない。壺・瓶類の比率が極めて高く、天目茶碗、神仏具（花瓶・香炉など）も高い比率になっている。伊坂城跡での器種組成からは、限られた器種のみが選択的に持ち込まれ、消費されていた状況を読み取ることができる。

以上、西ヶ広遺跡と伊坂城跡の瀬戸美濃製品を比較・検討してきたが、冒頭に述べた資料的な問題を差し引いても、15世紀末から16世紀初頭に、両遺跡間で移動が行われた可能性が高いと思われる。西ヶ広遺跡の居館の主は、伊坂城跡の主部に移ったと理解したい。

15世紀まで領主の拠点であった居館が、16世紀前半に放棄され、山上に城郭を築き、そこを新たな拠点とするという現象は、全国的にも多く指摘され、そのことは領主権力の強大化を示すものとして理解されている<sup>9)</sup>。西ヶ広遺跡の居館から伊坂城跡への移動もこれと同じ流れにあると理解できる。

西ヶ広遺跡の居館ではその西・北側で発掘調査が行われ、東・南側の状況は判然としなが、少なくとも発掘調査を行った部分では、居館周辺への被官層の集住はみられない。しかし伊坂城跡では、城郭周辺への屋敷地の配置＝被官層の集住をも伴っている。これは単に領主の山上への移動ということだけでなく、それまで被官層がいたであろう周辺村落の構造をも変化させるものであった可能性が高い。

15世紀末まで続いた西ヶ広遺跡の居館の廃絶、伊坂城跡の築城、被官層の城郭周辺への移動は、16世

紀前半に地域社会のかんりの深部にまで「戦国化」の波が押し寄せたことを示すものとして理解されるべきである。（竹田憲治）

〔註〕

- ① 『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1995年）
- ② 『四ツ野B遺跡』（『津市埋蔵文化財センター年報9』津市埋蔵文化財センター 2005年）
- ③ 『名張市赤日町 坂之上遺跡』（三重県教育委員会 1988年）
- ④ 『山奥遺跡Ⅰ』、『山奥遺跡Ⅱ』（四日市市教育委員会 2003・2004年）
- ⑤ 『瓦上遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2005年）
- ⑥ 『山奥遺跡Ⅱ』（四日市市教育委員会 2004年）
- ⑦ 弥生時代後期の集落遺跡については、前掲註①・②・④のほか、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』、同Ⅲ-1、同Ⅳ・Ⅴ（三重県埋蔵文化財センター 1996～2005年）、『小谷赤坂遺跡2次、3次調査発掘調査報告書』（嬉野町教育委員会 2003年）、『北野遺跡』、『平成2年度農業基盤地域埋蔵文化財発掘調査報告 第2分冊』、『北野遺跡（第5次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター 1991・1996年）からデータ取りを行った。
- ⑧ 西ヶ広遺跡の過去の調査は以下の報告書に拠った。『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県文化財連盟 1970年）、『西ヶ広遺跡発掘調査報告-D地区-』（四日市市教育委員会 1972年）
- ⑨ 前掲註⑤
- ⑩ 『第107次調査』、『史跡寄宮跡 平成6年度発掘調査概報』（寄宮歴史博物館 1995年）
- ⑪ 四日市市教育委員会 赤松一秀氏のご教示による。
- ⑫ 『古代の官衙遺跡 I遺構編』（奈良文化財研究所 2003年）
- ⑬ 前掲註⑤
- ⑭ 久留信遺跡については、服部芳人『久留信遺跡の調査—東を向く官衙—』、『月刊 文化財』499号（第1法規株式会社 2005年）を参照した。
- ⑮ 山中敏史・石毛彰子『地方豪族居宅』、『古代の官衙遺跡 II遺物・遺構編』（奈良文化財研究所 2004年）
- ⑯ 例えば、矢田俊文『室町・戦国時代と北畠氏』（伊勢国司北畠氏の研究）吉川弘文館 2004年）

## Ⅶ 菟上遺跡範囲確認調査出土・地表面採集遺物

四日市市伊坂町の菟上遺跡では、三重県埋蔵文化財センターが平成10・11年度に範囲確認調査を、11・12年度に本調査を行い、平成16年度には報告書が刊行されている。今回報告するのは、平成11年度に行った範囲確認調査において出土した遺物である。

範囲確認調査は平成12年1月に行った。この調査では7ヵ所の試掘坑と3本のトレンチを配置し、260㎡を調査した。その中の№5トレンチの西端において、完形の山皿3点（1～3）と青磁椀1点（4）が出土した（第77図）。周囲には石列も存在した。また、同トレンチからは、青磁椀（5）及び瓦質足鍋（6）も出土した。

出土遺物のうち、1～3は山皿である。いずれも藤澤編年の尾張型5型式のものである。4は青磁椀。龍泉窯系のもので、高台は四角く、高台置付およびその内部は露胎である。森田勉氏の分類の1-2b類のものである。いずれの遺物も12世紀中葉から13世紀初頭のものである。5も青磁の椀。6は瓦質の

足鍋。外面に焼しがかかり、三足がつく。

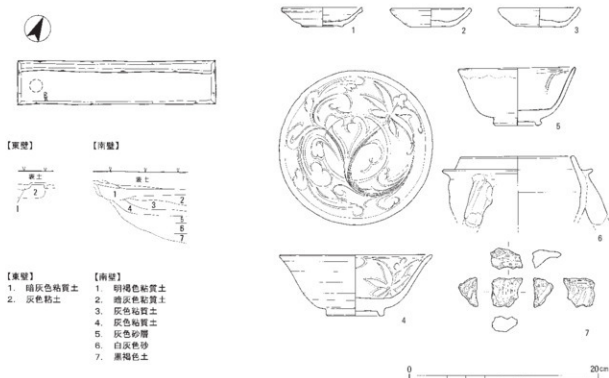
7は発掘調査中に表面採集された玉砥石である。石材はホルンフェルスである。

1～6が出土したトレンチは谷部分にあり、その西の尾根上には12世紀後葉から13世紀初頭の掘立柱建物12棟、土坑墓5基が検出されている。本項でふれる遺物はこれらとほぼ同一時期のものである。範囲確認調査中の出土遺物であるため、これらの遺物が何らかの遺構（例えば土坑墓）に含まれていた遺物なのか、尾根から転落した遺物なのかを明らかにすることはできない。しかしこれらの遺物の存在から、尾根上の掘立柱建物群の主が、貿易陶磁の優品を所有する階層であることが確認できる。

（竹田憲治）

〔参考文献〕

森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『大宰府陶磁器研究』1995年



第77図 調査坑概念図・出土遺物（1：4）



第78図 試掘坑配置図 (1:2,000)

写 真 图 版





調査前状況 北から



東端部全景 北西から



図版 2



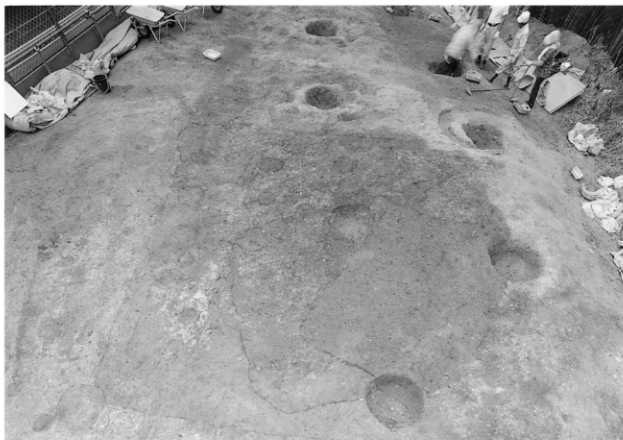
東端部全景 南から



東端部全景 東から



西端部全景 南から



SH3001・SB3102検出状況 北東から

図版 4



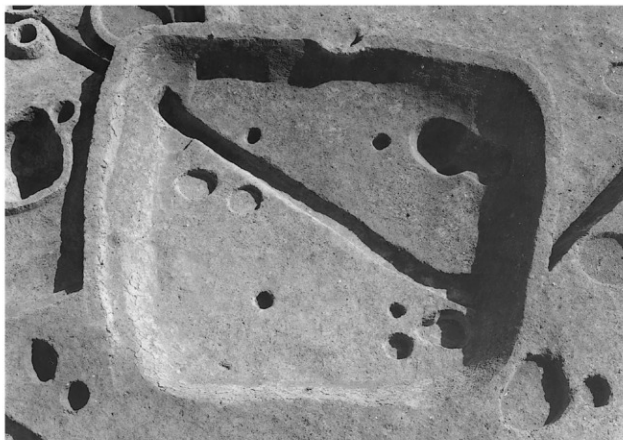
SH3002検出状況 南東から



SH3004・3103・3105 北西から



SH3007 北東から

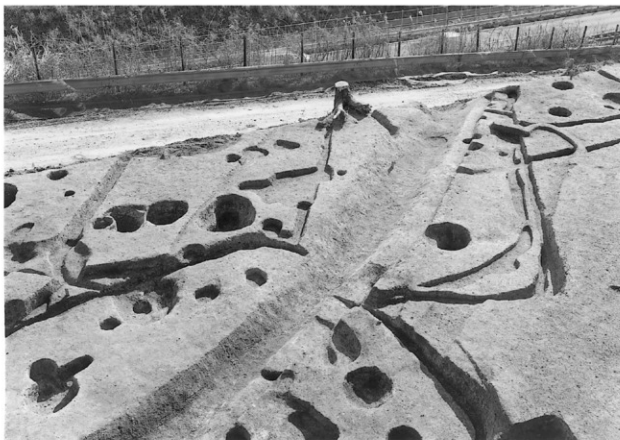


SH3003 西から

図版 6



SH3005 北西から

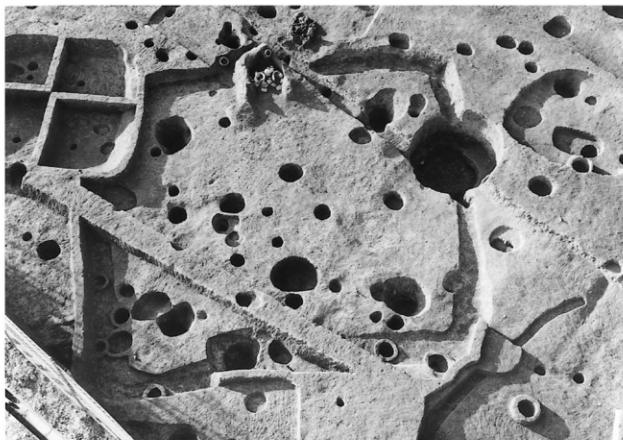


SH3006 北から





SH3009 北西から



SH3010 東から

図版 8



SH3010 甕遺物出土状況



SH3012 東から



SH3016・3017 北東から



SH3020 西から



図版10



SH3020竈 南から



SH3020竈 南から



SH3024・3025・3028 北西から



SH3027 南から

図版12



SH3026・3033 北から



SH3032・3028 南西から



SH3030・3031 南東から



SH3030竈 西から

図版14

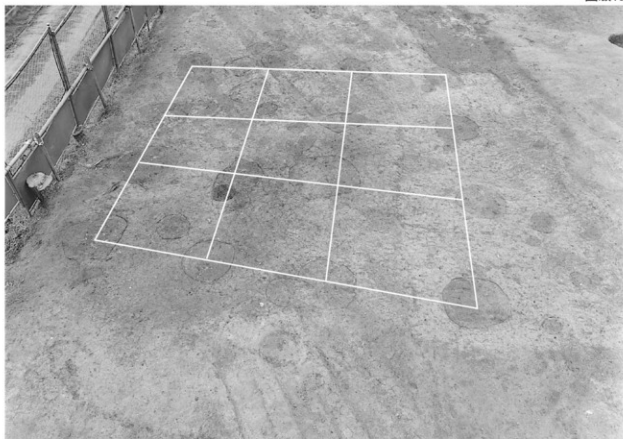


SH3031 竈遺物出土状況 南から

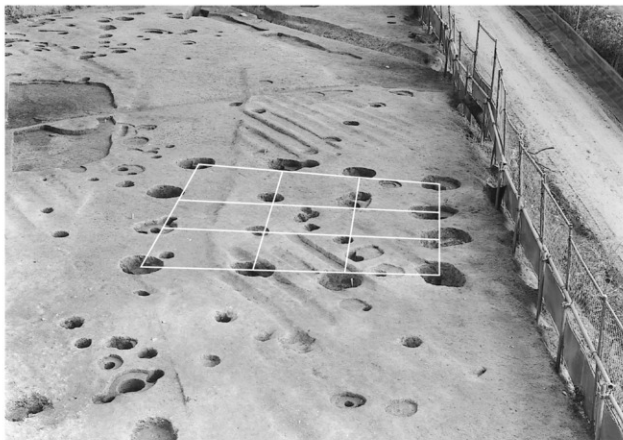


SH3031 竈 南から



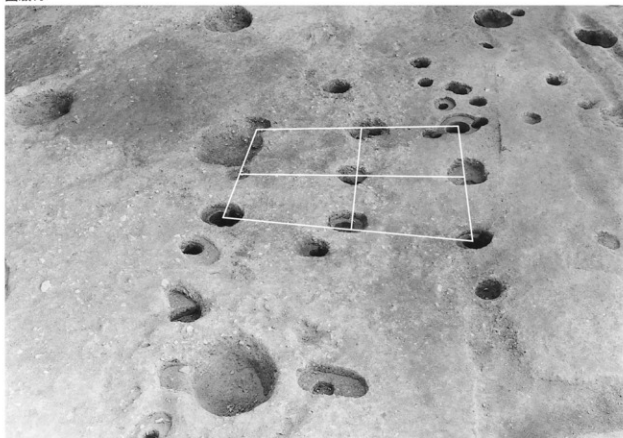


SB3101 検出状況 北東から

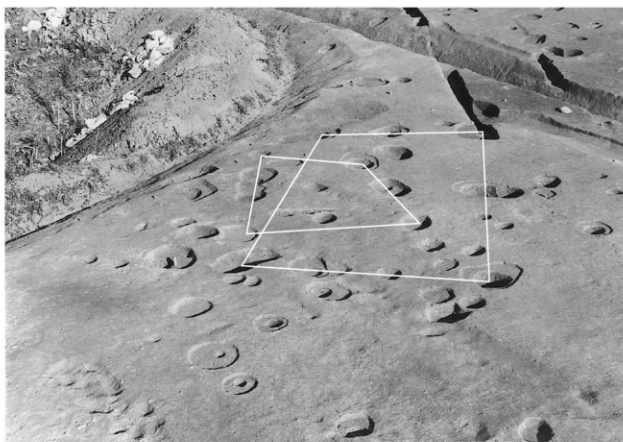


SB3101 南西から

図版16



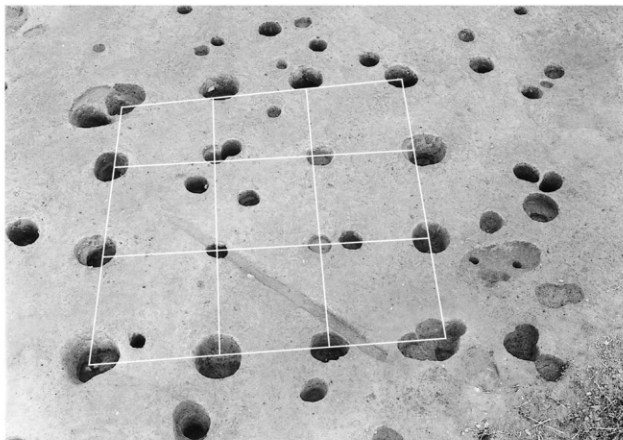
SB3102 北西から



SB3103・3140 西から



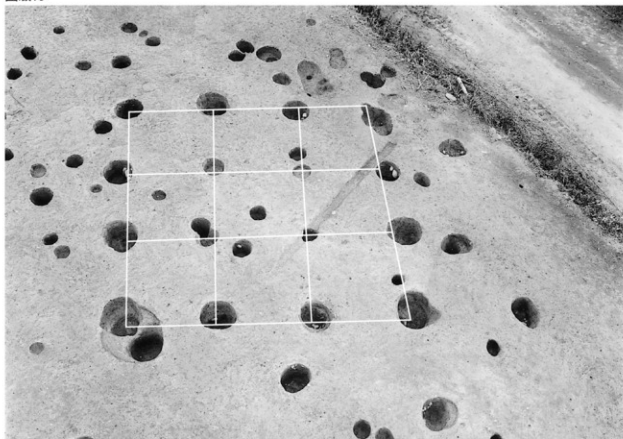
SB3104 北西から



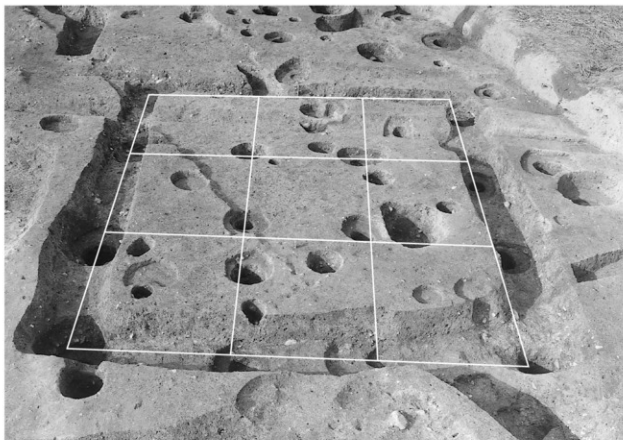
SB3113 南から



図版18



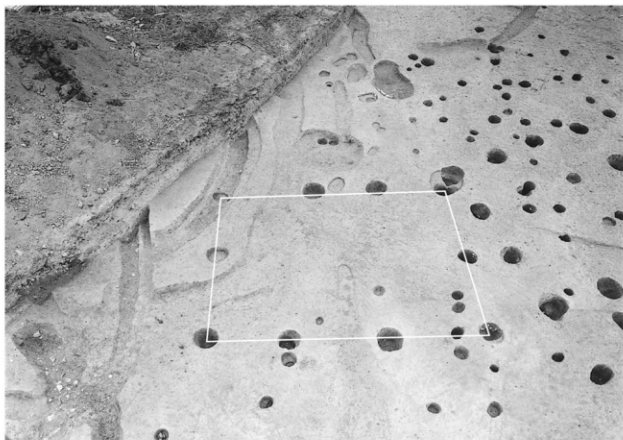
SB3113 西から



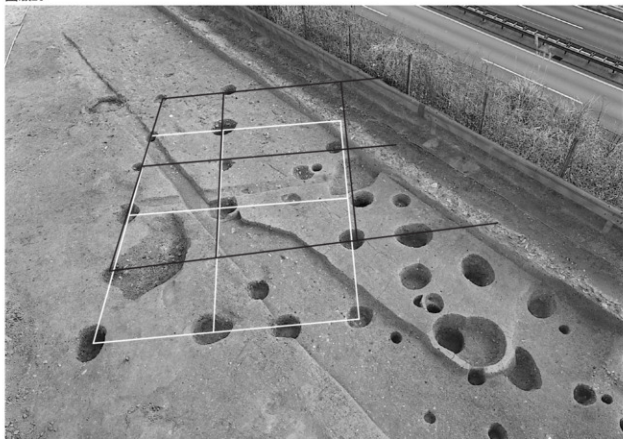
SB3106 北から



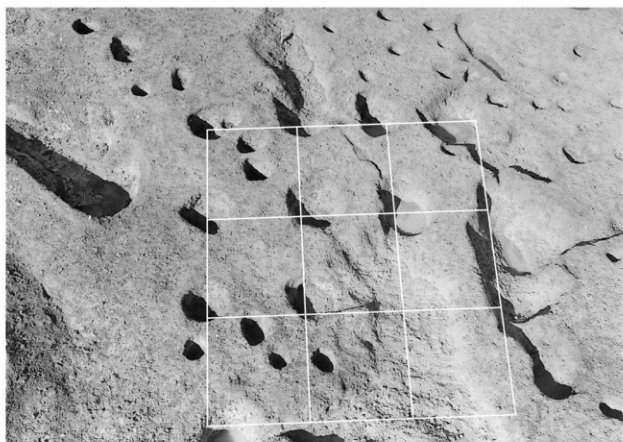
SB3114 東から



SB3114 南から



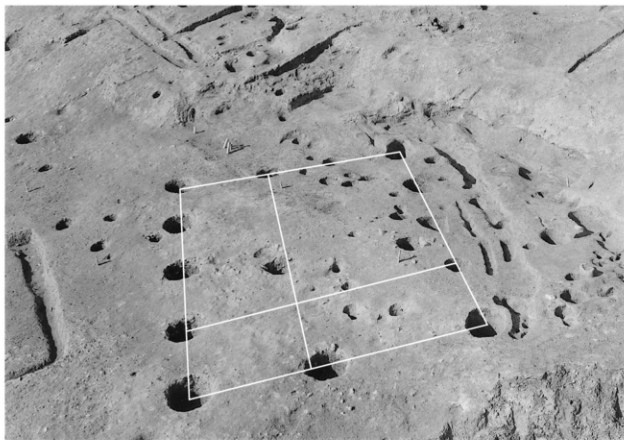
SB3115・3144 西から



SB3116 東から



SB3122 北から



SB3122・SH3020・3021 東から

図版22



SB3132 北東から



SE3264 北から





SE3277 西から



中世居館跡 北から

図版24



SE3247 南から



SE3247曲物出土状況 北から



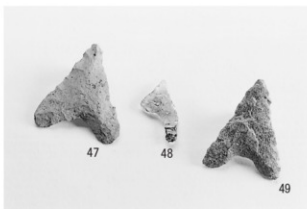
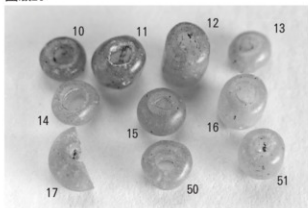
工事着工前全景



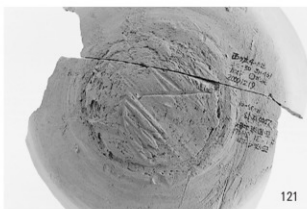
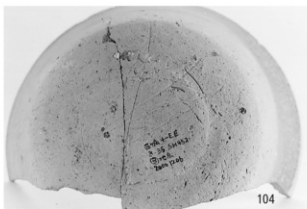
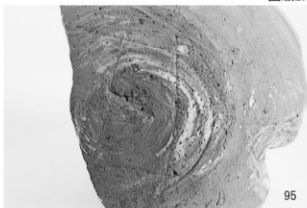
工事完成後全景



图版26



出土遺物①



図版28

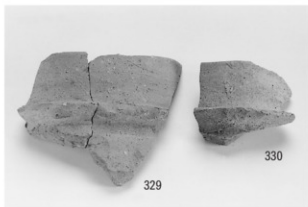


出土遺物③

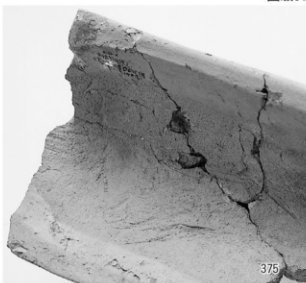
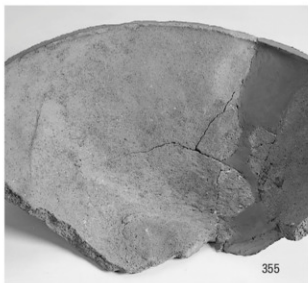


出土遺物④

图版30



出土遺物 ⑤



図版32



出土遺物⑦（瓦上遺跡）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしがひろいせき(だい3・4じ)ほくくつちょうさほうこく							
書名	西ヶ広遺跡(第3・4次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	227-9							
編著者名	竹田憲治、萩原義彦、角正淳子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしがひろいせき 西ヶ広遺跡	よっかいちし いさかちょう 四日市 伊坂町	24202	59	35° 02' 00"	136° 37' 38"	19991025 } 20000309 20001005 } 20010131	平成11年度 2,970㎡ 平成12年度 2,740㎡	近畿自動車道名古屋神 戸線(第二名神)愛知 県境～四日市JCT建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西ヶ広遺跡	集落跡	弥生時代後期		竪穴住居		弥生土器・石器・ガ ラス玉・鉄器		遺物出土量 51箱・ 329.29kg
		古墳時代後期		竪穴住居		須恵器・土師器		
		飛鳥・奈良時代		掘立柱建物・竪穴住 居		須恵器・土師器		
		南北朝～室町時代		居館跡・掘立柱建物		土師器・陶器・磁器		





---

三重県埋蔵文化財調査報告227-9

西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告

2006（平成18）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 伊藤印刷株式会社

---

